

# 未来の畜産女子育成プロジェクト



ニュージーランド研修 畜産アンバサダー活動報告書





公益社団法人 国際農業者交流協会

## 日本の畜産をもっと元気に!!

私たちが見たニュージーランドの畜産業 その中で感じたこと、考えたことが、 日本の畜産をもっと元気にする!



## 目次

1.	はじめに · · · · · · P1
2.	プロジェクトについて ·····P2
3.	写真でたどるプロジェクト·····P9
4.	畜産アンバサダー活動P21
5.	畜産業に関する意識調査P27
6.	参加者の報告 · · · · · · · P35
7.	未来の畜産へのアイデア · · · · · · P85



公益社団法人 国際農業者交流協会

会 長 野 中 和 雄

公益社団法人国際農業者交流協会は、英語名をThe Japan Agricultural Exchange Council (略称JAEC) と表記し、 海外において先進農業技術や経営などを学ぶプログラムを提供する専門機関として昭和63年に設立されま した。前身団体からの累積では、これまでに14.900名を超える日本青年が海を渡り、言葉の壁や文化、生 活環境の違いを乗り越えて先進農業を学んできました。海外で研鑽を重ねた方々は、培った知識と経験を 生かし、我が国における中核農業者として、更には農業関連諸企業や国際協力分野において活躍されてい ます。

本会では、上記に加えASEAN諸国や欧州諸国からの農業研修生の受入事業、国際化に対応するための課 題について勉強を行う研究会やセミナーの実施など、多岐にわたる事業を行っています。これらの事業は、 欧豪米及びアジア諸国の政府機関、関係団体との長年に亘る協力と信頼関係によって実現されているもの で、その質と研修効果の高さは国内外から高く評価されています。

JRA日本中央競馬会畜産振興事業により、昨年度から開始しました未来の畜産女子育成プロジェクトは、本 会が長年手がけてきた事業運営とそのノウハウを生かした内容となっています。参加した20名の高校生は、 現地研修を実施したニュージーランドで、農業視察、女性畜産農家へのインタビュー、ファームステイなどを 通じ、たくさんのことを学びました。このプロジェクトで得た知識や経験を参加していない人たちと広く共有 し、畜産業の魅力を発信していく「畜産アンバサダー」として活動しています。このアンバサダー活動は、高 校生たちにとって何ものにも代えがたい経験となったことはもちろん、活動の中で語られた発表は、聞く人 たちの心を強く惹きつけ、畜産業の魅力を元気いっぱいに発信する機会となりました。将来の日本農業を担 う人材として、皆さんの今後の活躍を心より祈念申し上げます。

結びとなりますが、本プロジェクト実施にあたりまして、ご指導・ご支援・ご協力を賜りましたすべての方々に 感謝申し上げますとともに、引き続き、本会運営事業へのご理解とご協力を頂けますようよろしくお願い申し 上げます。

## 2 プロジェクトについて

#### 未来の畜産女子育成プロジェクトとは

JRA日本中央競馬会の平成31年度畜産振興事業 により実施されました。畜産振興事業は、日本中央 競馬会の剰余金を活用し、畜産振興に資すること を目的とする事業に対して資金が交付されます。そ の時々の現状課題を踏まえた必要性や緊急性等に 応じ、年度ごとの公募テーマと重点的に対応する事 項が定められます。

平成31年度畜産振興事業の8つある公募テーマの 中から「担い手の確保」、7つある重点的対応事項 の中から「畜産現場における女性の活躍推進」を 選び、この公募テーマと重点的対応事項に沿って事 業を実施するため、海外研修と啓蒙活動を組み合 わせた事業が「未来の畜産女子育成プロジェクト」 です。次世代の農業者につながる人材育成のため、 全国から20名の高等学校生徒が参加しました。

#### 海外研修

女性が活躍している畜産先進国の現場を実見し、 その重要性を認識するため、海外での研修機会を 設けました。舞台に選んだのは、ニュージーランド 北島のタラナキ地方です。ニュージーランドは、女 性の活躍が目覚ましく、酪農大国として知られてい ます。世界経済フォーラム (WEF: World Economic Forum) による各国の男女格差の大きさを表す「グ ローバル・ジェンダー・ギャップ指数 | は、2019年 12月の発表によると、調査対象となった世界153か 国のうち、日本は121位、ニュージーランドは6位と いう結果でした。この指数は、各国の男女の格差を 経済・教育・健康・政治の4分野14項目で分析し、 評価しています。日本の評価は、教育、健康の分野 は高いものの、経済、政治の分野は芳しくありませ んでした。一方、ニュージーランドは、女性の参政 権を世界で一番早く導入した国で、

現ジャシンダ・アーダーン首相は、任期中に女子を 出産し、ニューヨークで開かれた国連総会への乳 幼児同行が注目されるなど、女性が活躍しやすい 環境を政治の世界でもしっかりと証明しています。 また、畜産業では、単一国として世界最大の乳製品 輸出国であり、日本もニュージーランドから多くの チーズやバターを輸入しています。

子牛の出産時期を合わせた季節分娩、広大な牧草地 での通年放牧、農家の出資によりできたフォンテラ社、 日本ではあまり見られない畜産やそれらを取り巻く

環境を広く学ぶことができ、さらに畜産業で活躍す る女性と言葉を交わしたこと、現地受入学校寮で の生活、ファームステイを通じて、将来畜産業を目 指す同年代と交流をはかれたことは、グローバル感 覚を養う有意義な機会となりました。

#### 啓蒙活動

海外研修から得た知識と経験を基に日本の現状を 比較考察し、得られた結論や意見を身近な人たち に広く啓蒙する 「畜産アンバサダー活動 | を実施し ました。20名の生徒が所属高等学校内外に広く宣 伝・啓蒙し、若年層への畜産業参入の動機づけや、 女性参画機会の促進、畜産業を担う女性人材の重 要性について意識改革をはかりました。今後の畜産 業界には、女性農業者に大きな役割や潜在能力、 その可能性があるにも拘らず、参画、活躍の場が不 十分な状況があり、畜産業担い手と成り得る高等 学校生徒が、海外の実情を知った上で行うフレッ シュな意見の発表、具体的な未来の畜産への提 案、特に畜産業の魅力を広く認識してもらう機会を 設けることで、農畜産業に従事する方、また志して いる若年層を鼓舞するとともに、男性からの理解 を深めることができました。

#### 未来の畜産へのアイデア

20名の高等学校生徒は、ニュージーランドから帰 国後、自身の畜産アンバサダー活動を実施する中 で、未来の畜産に対するアイデアを考えました。こ のアイデアは、現地研修を通じて得た知識や考え を基に、各自で考えられる我が国の畜産に対する 提案や宣言です。85ページから始まる畜産アンバ サダーたちのアイデアをご覧ください。



## 2. プロジェクトについて

### 未来の畜産女子育成プロジェクトの1年

①推進委員会(5月10日)

①推進委員会(6月19日)

①推進委員会(8月30日)

①⑧ プロジェクトを客観的、意欲的、専門的 に運営し評価するため、外部の専門家3名によ る委員会を開催しました。

⑧成果評価委員会(2月28日)

#### 備 進

#### ② 事前調査(5月11日~18日)

- ・現地研修受入学校の選定
- ・農畜産概況等の調査
- ・治安や安全面等の確認

プロジェクトの核となる現地研修を実施するた め、ニュージーランド北島のマナワツ・ワンガヌ イ地方、タラナキ地方の調査を行いました。

#### ③プロジェクト参加者募集 (4月26日~5月24日)

#### ④プロジェクト参加者選抜

- ・参加者20名を選抜
- ・引率者2名を選抜
- •書類審杳
- •□頭確認

全国農業高等学校長協会、全国高等学校農場 協会、日本学校農業クラブ連盟にプロジェクト 周知のご協力を頂き、全国34の高等学校から 応募がありました。書類審査、口頭確認によ り、プロジェクト参加者を選抜しました。

#### 研 修

#### ⑤ 事前 研修(6月17日~19日)

・事前学習・渡航準備・大使館訪問・テーマとキーワード設定

効果的な現地研修を実現するため、プロジェクト参加者に対して、プ ロジェクトの意義と目的、心構えの習得、現地研修時に学ぶテーマと キーワード設定のため2泊3日の事前研修を国立オリンピック記念 青少年総合センターで実施しました。

#### 6月17日(月)

13:00 集合~オリエンテーション~プロジェクト説明 第1回意識調査アンケート

19:00 自己PRプレゼンテーション、インタビュー演習

#### 6月18日(火)

06:45 起床~レクレーション

09:00 現地研修プログラム説明、メンターによる講義①(酪農実践編)

13:30 ニュージーランド大使館訪問

大使館職員による講義、農林水産省職員による講義

19:00 テーマとキーワード決め、畜産アンバサダー活動について

#### 6月19日(水)

06:45 起床~明治神宮参拝

09:00 メンター講義②(酪農知識編)、発表準備

11:00 現地研修テーマとキーワード発表

## Z

東

京

#### ⑥ 現 地 研 修 (8月19日~29日) ※ P.6~ 記 載

- ・テーマとキーワードに沿って研修 ・英語授業 ・農業授業・農業視察
- ・農畜産業従事者へのインタビュー ・学校寮生活 ・ファームステイ

### 東 京

#### ⑦帰国時研修成果報告会(8月30日)※P.7に記載

・研修の成果を社会に発信・畜産アンバサダー活動のキックオフ

#### 畜産アンバサダー活動(9月~2月27日) ※P.21~記載

パンフレット、 報告書にまとめ広く配布



Instagram、Twitterなどの SNS、ホームページにて広く発信





学んだことを ふまえた 自分の意見

畜産業の魅力 / 女性の活躍促進

#### 若者たちを鼓舞

- ・高校生
- ・畜産を目指す若者
- ・中学生・小学生など

所属高校を中心とした 発表会や農業イベント で畜産業の魅力を発信

#### 農畜産業界に広くPR

- ・農家
- ·農畜産関連企業
- ・農畜産団体
- ・メディア





就農者の増加

農畜産業界の活性化

#### 未来の畜産女子育成プロジェクト 構成メンバー

#### ●畜産アンバサダー(高等学校生徒)

	姓	名	出身	所属高等学校	学科	学年
1	尾崎	もも	北海道	北海道帯広農業高等学校	酪農科学科	2年
2	新屋敷	真生	青森県	青森県立三本木農業高等学校	動物科学科	2年
3	佐々木	美咲姫	岩手県	岩手県立遠野緑峰高等学校	生産技術科	2年
4	岩間	ほのか	宮城県	宮城県農業高等学校	農業科	2年
5	上野	璃桜	宮城県	宮城県加美農業高等学校	農業科	3年
6	髙橋	夢天	栃木県	栃木県立宇都宮白楊高等学校	農業経営科	3年
7	鈴木	美香	群馬県	群馬県立勢多農林高等学校	動物科学科	3年
8	神尾	里佳	埼玉県	埼玉県立川越総合高等学校	総合学科	3年
9	安江	日向子	埼玉県	筑波大学附属坂戸高等学校	総合学科	3年
10	渡良	サキナ	東京都	東京都立瑞穂農芸高等学校	畜産科学科	3年
11	川口	奈由	岐阜県	岐阜県立岐阜農林高等学校	動物科学科	3年
12	小林	香弥乃	静岡県	静岡県立富岳館高等学校	総合学科	2年
13	小屋敷	萌香	三重県	三重県立明野高等学校	生産科学科	3年
14	田中	陽満莉	京都府	京都府立農芸高等学校	農産バイオ科	2年
15	髙橋	未来	兵庫県	兵庫県立農業高等学校	動物科学科	2年
16	福田	侑美	島根県	島根県立出雲農林高等学校	動物科学科	3年
17	畑本	瑞穂	広島県	広島県立油木高等学校	産業ビジネス科	3年
18	友松	瑠生	愛媛県	愛媛県立野村高等学校	畜産科	2年
19	加藤	星菜	福岡県	熊本県立菊池農業高等学校	畜産科学科	3年
20	内野	佳奈	鹿児島県	鹿児島県立鶴翔高等学校	農業科学科	3年

#### ●現地研修 引率教員

岸田 隆志 北海道当別高等学校 校長

千田 なつ紀 富山県立中央農業高等学校 教諭

#### ●推進委員

納口 るり子 筑波大学 生命環境系 国際地縁技術開発科学専攻 教授

鈴木 憲治 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程調査官

髙橋 ゆかり 有限会社 那須高原今牧場 チーズ工房主宰

#### ●メンター

藤田 春恵 菅原牧場(自家酪農経営)

光成 有香 京都大学大学院 地球環境学舎 環境マーケティング論分野 博士後期課程

現地研修を実施したニュージーランドには、アンバサダー20名、引率教員2名、メンター2名、本会職員2名の計26名が渡航しました。

#### 6 現地研修

高校生の夏休み期間を利用してニュージーランド北島での海外研修を実施しました。タラナキ地方のStratfordにあるTARANAKI DIOCESAN School for Girlsが受入学校となり、現地研修プログラムのコーディネートをお願いしました。タラナキ地方は畜産業が盛んな地域で、畜産業における環境問題対策の取り組みも積極的に行っています。また、トム・クルーズ主演の映画『ラストサムライ』の撮影地としても有名です。農業講義や農業演習、学校周辺の農業視察、そして、実際に活躍する女性農業者との意見交換等を実施しました。また、国際的な視野を得る上で基本となる個人のコミュニケーション力の向上を目指し、外国語による授業ESOL: English for Speakers of Other Languagesを実施しました。さらに、異国の生活や文化背景が畜産に与える影響を十分に理解するために、ファームステイを通じてニュージーランド農家の生活スタイルを学び、学校寮で生活する現地生徒とのバディシステムにより、同年代の畜産を目指す若者たちとの交流機会の場を設けることができ、グローバル感覚を養うことができました。



#### 現地研修~帰国時研修成果報告会 日程

日次	月日	曜	時間	内 容	宿泊
1	8月19日	月	14:00 18:30	成田国際空港第1ターミナル集合〜出発前オリエンテーション 成田国際空港発 via ニュージーランド航空NZ90便	機內泊
2	8月20日	火	08:05 11:10 12:00 13:00	オークランド国際空港着 〜乗り継ぎ〜 オークランド国際空港発 via ニュージーランド航空NZ8037便 ニュープリマス空港着 専用車にてStratford方面へ TARANAKI DIOCESAN School for Girls到着 開講式 Kapa Haka Powhiri (マオリの歓迎儀式) オリエンテーション、入寮説明、入寮	ホステル (学校寮)
3	8月21日	水	08:30 11:00 14:30	ESOL① 英語授業 農業視察① TARANAKI SALE YARDS (せり市場) 農業視察② FONTERRA FARM SOURCE TARANAKI (フォンテラ社の農業資材店)	ホステル (学校寮)
4	8月22日	木	08:30 11:20 13:40 19:00	ESOL② 英語授業 農業授業① PITO (農業を実務的に指導する団体)による 簡易式電気牧柵設置研修 農業視察③ 女性酪農家 Ms. Rachel Short 研修取りまとめ	ホステル (学校寮)
5	8月23日	金	08:30 11:00 13:30 15:30	ESOL③ 英語授業、ファームステイ説明 農業授業② PITO (農業を実務的に指導する団体) による 乳製品加工研修 農業視察④ Dolly's Milk (生乳(非加熱)の直売酪農家) ファームステイ受入農家家族お迎え それぞれの受入農家に移動	ファームステイ
6	8月24日	土		ファームステイ 〜引率者による受入農家訪問を実施〜	ファーム ステイ

日次	月日	曜	時間	内 容	宿泊
7	8月25日	日	16:00 19:00	ファームステイ 〜引率者による受入農家訪問を実施〜 ファームステイ先から学校到着 研修取りまとめ	
8	8月26日	月	08:30 10:30 13:30 19:00	農業視察⑤ DAIRY TRUST TARANAKI (フォンテラ社のデモンストレーション農場) 農業視察⑥ FONTERRA CHEESE FACTORY (フォンテラ社のチーズ工場) 農業視察⑦ 女性酪農家 Ms. Hollie Wham 研修取りまとめ	ホステル (学校寮)
9	8月27日	火	08:30 12:00 13:20 19:00	研修取りまとめ、発表準備 閉講式 農業視察® TREWITHEN (搾乳牛1,100頭規模の大規模農場) 研修取りまとめ	ホステル (学校寮)
10	8月28日	水	07:30 08:30 09:25 10:15 11:30 15:00	退寮、ニュープリマス空港に向けて学校出発 ニュープリマス空港着〜チェックイン ニュープリマス空港発 via ニュージーランド航空NZ5036便 オークランド国際空港着 オークランド市内へ Mount Wellingtonにて市場調査 研修取りまとめ、発表準備	オーク ランド シティ ホテル
11	8月29日	木	06:00 06:30 08:55 16:50 19:00	オークランド国際空港に向けて出発 オークランド国際空港着〜チェックイン オークランド国際空港発 via ニュージーランド航空NZ99便 成田国際空港着〜東京都内に移動 発表リハーサル	ホテル フクラシア 晴海
12	8月30日	金	08:00 10:00 12:00	意識調査アンケート2回目、最終発表リハーサル 研修成果報告会 報告会終了後 解散	

#### 7帰国時研修成果報告会

帰国直後には、研修成果の周知を目的に、事業関係者、農畜産業関係者、メディアを参集し、研修成果報告会を実施しました。

5名1組がテーマごとに、それぞれ15分間プレゼン テーションを行い、最後に現地研修引率教員の 岸田隆志先生に総括して頂きました。

日本の畜産現場が抱える問題点や既存のやり方についての改善点を見いだし、若い女性ならではの感性を生かして見聞を広めたことが分かり、さらには、畜産アンバサダー活動の第一歩として自分自身の言葉を発信することができました。

#### 1. ビジネスとしての畜産(攻めの畜産)

岩間ほのか、髙橋夢天、鈴木美香、 福田侑美、加藤星菜

#### 2. 女性の活躍できる畜産 (ワーク ライフ バランス)

渡良サキナ、川口奈由、小林香弥乃、小屋敷萌香、髙橋未来

## 3. 家畜や自然のための畜産(アニマル ウェルフェア) 神尾里佳、安江日向子、畑本瑞穂、

神尾里佳、安江日向子、畑本瑞穂、 友松瑠生、内野佳奈

#### 4. 畜産の担い手(農家を育む政策)

尾崎もも、新屋敷真生、佐々木美咲姫、 上野璃桜、田中陽満莉

#### ニュージーランドでお世話になった方々

#### ◆現地研修受入学校(現地研修コーディネート)

TARANAKI DIOCESAN School for Girls 校長 Ms. Fiona Green

コーディネーター (ESOL指導) Ms. Fleur Karasawa 姉妹提携高校が日本にあり、日本語が流暢な Fleur先生のサポートには何度も助けられました。

#### ◆農業講義 ゲストスピーカー

PITO: Primary Industry Training Organization 職員Ms. Kim Lowry、Ms. Jacklyn Flintoff 農業の実務的なトレーニングを指導する団体職員の2人から、ニュージーランドの酪農全般についての講義、簡易式電気牧柵設置、乳製品加工の指導を受けました。

#### ◆農業視察

①TARANAKI SALE YARDS
マネージャー Mr. Peter Mayson
地域の家畜市場の中をご案内いただき、せりの仕方、市場経営の説明を受けました。

#### ②FONTERRA FARM SOURCE TARANAKI マネージャー Mr. Mitchel Williams

フォンテラ社の農業資材店で取り扱っている商品 や、周辺農家へのサポートについて説明を受けました。

#### ③女性酪農家 Ms. Rachel Short

ジャージー牛を主とした有機酪農を実践している 4代目の酪農家。家事や育児を支えるご主人から もお話を聞くことができました。

#### (4) Dolly's Milk

主宰 Mr. Peter Dalziel、Ms. Margaret Dalziel 搾乳牛20頭規模の生乳(非加熱)の直売酪農家 として、小規模農家が生き残るアイデアをご夫妻 から聞くことができました。

#### **5 DAIRY TRUST TARANAKI**

オペレーショナルマネージャー Ms. Debbie McCallum フォンテラ社のデモンストレーション農場で、経営 リサーチの実施をしています。ロータリーパーラーの実演、仔牛の哺乳の実演を見学させていただきました。

## ⑥FONTERRA CHEESE FACTORY Ms. Tania Kalin

Elthamにある世界有数のチーズ加工場であり、 場内を視察見学させていただきました。また、出 来立てチーズの試食もさせていただきました。

#### ⑦女性酪農家 Ms. Hollie Wham

26歳の若手酪農家であり、新規就農したばかりの50%シェアミルカー。パートナーからもお話を聞くことができました。

#### ®TREWITHEN Mr. James Barbour

搾乳牛1,100頭規模の大規模酪農場であり、50%のシェアミルカー。ロータリーパーラーによる60頭同時搾乳を見学させていただきました。4人の子供を子育て中の奥さんからもお話を聞くことができました。

#### ◆通訳

Mr. Jerry Jewett (JJさん)

生徒の語学レベルに合わせ寄り添った通訳により、 現地研修の学びを広く深くしていただきました。



7

#### 事前研修



全国から集まってきた畜産を目指す高校生たちが、はじめて顔合わせ。プロジェクトの目的や、渡航に向けた心構え、ニュージーランドの畜産概況について学びました。



練習してきた自己紹介。 畜産アンバサダーとしての自分自身をPR。



現地研修での農業視察、ファームステイのため、今のうちからインタビューに慣れておこう。インタビューの相手は、事前研修ご同行の先生方にご協力いただきました。



セレモニーでは2名が英語でスピーチ。神尾さん、小屋敷さん、2人とも素晴らしかったです。



ニュージーランド大使館を表敬訪問。大使館職員の方から、ニュージーランドの産業と教育について、農林水産省職員の方から、日本の畜産業、農業女子プロジェクトについて講義を受けました。



ニュージーランドのアフタヌーンティーを経験。ちょっと大人な気分はいかがですか?ニュージーランドの国鳥キーウィも来てくれました。



ニュージーランドで学ぶテーマごとのグループに分かれて、現地研修の学習について話しあいました。



現地研修に同行いただくメンター2人からの講義。酪農家の藤田さんからは酪農実践編(上)、研究者の光成さんからは酪農知識編(下)と、昨年度もメンターとして活躍された2人からの講義は、とても勉強になりました。



朝のレクリエーション。連続テレビ小説『なつぞら』の企画「みんなでつくる!FFJの歌」に応募するため練習中。現地研修引率教員の千田先生に歌唱指導いただきました。



現地研修で学ぶグループのテーマとキーワードを発表。話しあったことについて、推進委員の先生方、事前研修にご同行いただいた先生方に発表しました。



最初は緊張していたけど、すっかり打ち解けた様子。 日程が進むにつれて、笑顔が増えていきました。



現地研修成功に向けて推進委員の先生方から 応援のメッセージをいただきました。 左から、納口先生、鈴木先生、髙橋先生。



研修の成功を祈願して、明治神宮を参拝。現地研修成功のため課題を克服し、しっかりと渡航までに準備をしていこう。

.0

#### 現地研修 DAY 1



成田国際空港に集合しオリエンテーション開始。10時間 半かけ、9,000km先のニュージーランドを目指します。



オークランド国際空港到着後、国内線に乗り換えて タラナキ地方のニュープリマスに向かいます。

#### 現地研修 DAY 2



ニュープリマス空港に到着。現地研修コーディネーターの Fleur先生、通訳のJJさんが出迎えてくださいました。ここ からさらに南に40km、Stratfordにある受入学校 TARANAKI DIOCESAN School for Girlsを目指します。



で迎えてくれました。Stratford市長も列席され、 Hongiと呼ばれる片手で握手し、お互いの鼻と鼻、 額と額とを合わせる挨拶を経験することができました。



2019日本大会の公式ラグビーボールをプレゼントしました。ニュー ジーランド代表チームALL BLACKSが有名なだけあり、とても喜ばれ ました。また、アンバサダー代表として加藤さんが英語で見事なスピ ーチを披露しました。

11



受入学校での寮生活の説明を受けてこ の日は終了。綺麗な虹が出迎えてくれま した。

#### 現地研修 DAY 3



Fleur先生のESOL授業を受ける。英語を母国語としない人 (マオリ族や外国人等)がコミュニケーションで孤立しないように、 しっかりと英語教育を行うことを目的としたプログラムです。



ご案内いただいたマネージャーのPeter Maysonさん。 アンバサダーからのプレゼントをとても気に入ってく ださいました。



フォンテラ社の農業資材店にて、マネージャーの Mitchel Williamsさんから講義を受けました。これか らピークを迎える子牛の出産シーズン対策と、周辺酪農 家へのフォンテラ社のサポートについてでした。



ニュージーランドに来て最初の農業視察。 地域のせり市場を見学。





店内もご案内いただきました。 高校生たちは、お土産に耳標を購入していました。

#### 現地研修 DAY 4





受入学校生徒達との交流。ニュージーランドの文化体験として、伝統菓子Pavlova作りや、スーパーで売られているお菓子やジュースを食べ比べた感想を言い合い、親睦を深めました。



マオリの伝統芸能授業を見学させていただきました。マオリの歌、Hakaも披露していただきました。



PITOの職員Kim Lowryさん、Jacklyn Flintoffさんから、 簡易式電気牧柵の設置方法について指導を受けました。



Jacklynさんは現役酪農家でもあり、「長靴と情熱さえあれば女性だって酪農ができる!」という言葉に高校生たちは勇気をもらいました。



ジャージー牛を主として有機酪農を実践するRachel Shortさんからお話を聞きました。子供たちを学校に迎えに行って帰ってきたご主人からもお話を聞くことができました。

13



ニュージーランドに来て最初の農場訪問だったため、搾乳の時間となりやってきた牛たちにみんなは

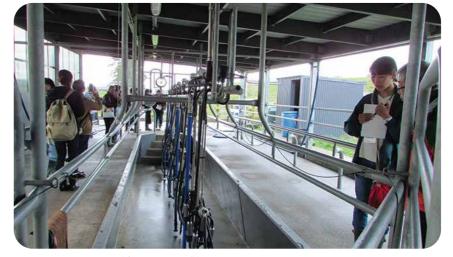
#### 現地研修 DAY 5



Kim Lowryさん、Jacklyn Flintoffさんの2人が、この日も来てくださいました。乳製品加工の指導を受け、みんなでバターを作りました。「私たちは、畜産業の仲間」と、お別れは感動的でした。



搾乳牛20頭(非加熱)の直売酪農家Dolly's Milkを訪問し、主宰のPeter Dalzielさん、Margaret Dalzielさんご夫妻からお話を聞きました。



ミルクパーラーの綺麗さには驚きでした。 これが生乳の販売を可能にしていることが分かりました。



今朝搾った牛乳をいただきました。 その味の濃さと、のどごしの良さに笑顔が思わずこぼれます。





夕方からは、いよいよ2泊3日のファームステイです。出発前に、最後の英語インタビュー練習を行いました。

1 /

#### 現地研修 DAY 6-7

















タラナキ地方の9軒の農家に2泊3日お世話になり、農作業もさせていただきました。受入農家家族の中には、 受入学校の生徒や、受入学校の理事の方もおり、大変良くしていただきました。





短かったけど素晴らしい経験になりました。お別れに涙する姿も。

#### 現地研修 DAY 8



フォンテラ社のデモンストレーション農場を訪問しました。オペレーショナルマネージャーのDebbie McCallumさんからフォンテラ社の取り組みについてお話を聞きしました。



訪問時は、ロータリーパーラーでの搾乳、子牛の哺乳についても実際に見学させていただきました。



Elthamにある世界有数のチーズ加工場を 見学させていただきました。



セキュリティの関係から、10人が1グループとなって工場を見学するチーム、もう一方はビデオを見ながら出来立てのチーズを試食するグループとに分かれました。



昼食はMcDonald's。英語で頑張って注文しました。 見学したばかりの工場で生産されたチーズは使われているかな?



放牧場も案内してくださいました。 酪農女子は、 どこの国でも牛が大好きなんですね。



若手女性酪農家のHollie Whamさんからお話を聞きました。「分娩時のことなど、女性は酪農に適している」と、パートナーの方からもお話を聞くことができました。



せっかくだからと搾りたての牛乳をバルクからくんで きてくださいました。すると、Hollieさんの手がすべっ て牛乳が辺り一面にこぼれ大変なことに・・・。

#### 現地研修 DAY 9



受入学校での閉講式。 一人ひとり、修了証書をい ただきました。



通訳として活躍してくださったJJさんに、みんなでお礼のメッセージを書きました。6日間ありがとうございました。



搾乳牛1,100頭規模の大 規模酪農場TREWITHEN のJames Barbourさん、奥さ んからお話を聞きました。



60頭を同時に搾乳できるロータリーパーラーには、度肝を抜かれました。



日本ではあまり見ないよね、 これほど大きなJOHN DEERE のトラクター。



引率教員の千田先生と コーディネーターのFleur 先生。ともに英語講師で、 友情が芽生えました。



アメリカでの酪農研修経験を持つ2人は、高校生たちの学びを深く良くサポートしてくださいました。

#### 現地研修 DAY 10-11



いよいよ日本に向けて帰国という日にタラナキ山がついに顔を見せてくれました。



早朝の出発にもかかわらず受入学校の 生徒たちが見送ってくれました。



8月23日のDolly's Milk訪問が地元紙に取り上げられました。その記事が掲載された新聞が受入学校を経つ朝に発行され、Fleur先生がニュープリマス空港へのお見送りの際に届けてくださいました。



オークランドに1泊して、帰国の途につきました。都内研修施設到着後は、すぐに翌日の報告会リハーサルです。 明日は、研修の成果をたくさんの人に届けるため頑張るぞ!

#### 帰国時研修成果報告会

5名1組のテーマごとのグループが、それぞれ15分間プレゼンテーションを行いました。



ビジネスとしての畜産 (攻めの畜産) グループ



女性の活躍できる畜産 (ワーク ライフ バランス) グループ



家畜や自然のための畜産 (アニマル ウェルフェア) グループ



畜産の担い手(農家を育む政策)グループ



「帰国した翌日のこのわずかな時間でここまでの報告は素晴らしい。出来すぎていて逆に恐ろしい。」出席された方々からお褒めの言葉をたくさんいただきました。



会場からのA2ミルクの質問について答える岩間さん。



総括していただいた引率教員の岸田先生は、「10年後の君たちを楽しみにしている」と締めくくりました。



畜産アンバサダーとして、それぞれの地で活動していきます。また、会える日まで。

## 4. 畜産アンバサダー活動

#### 畜産アンバサダー活動とは

プロジェクト参加者は、現地研修から帰国後、畜産アンバサダーとして所属高等学校内外における研修報告会、イベント等を通じて、畜産の魅力、担い手の確保、畜産現場における女性の活躍推進をテーマに研修成果の積極的な普及活動を行いました。



ニュージーランドに渡航する前に、それぞれがニュージーランドで学びたいことを考え、帰国後のアンバサダー活動の取り組みを準備してきました。実際に現地の畜産を目の当たりにしたことや、農畜産業関係者への聞き取りを通じて、これからの日本の畜産に必要なことを考える機会がありました。

その中で、自分なりに考えた未来の畜産に対するアイデアと思いを取りまとめ、その考えを発表してきました。20人のプロジェクト参加者による、若年層への畜産の魅力の発信や、女性の活躍に向けた意識向上をはかり、各畜産アンバサダー活動において参集者へのアンケートを実施しました。

#### ◆畜産アンバサダー実施期間

2019年9月2日~2020年2月27日

#### ◆実施回数

- ・学校内(プロジェクト参加者母校での活動、学校の文化祭等も含む) 29回
- ・地域(大学、小中高、地域の産業祭、農業クラブ連盟での大会等) 20回
- ・国際化対応営農研究会 5回 ※全国を5ブロックに分け各1回

#### ◆アンバサダーの声を届けられた数

総数 13,298人

· 学校内 9,197名 · 地域 3,618名

·国際化対応営農研究会 483名

ニュージーランド研修のダイジェスト版パンフレットも作成し、全国の農業高等学校や関連機関及び企業、農畜産業関係者、大学教員等に配布しました。



全校生徒を集めての発表は各校で実施し、同級生や下級生たちに対して、プロジェクトの目的や意義、ニュージーランドで学んだことを踏まえた未来の畜産に対するアイデアを発表できました。また、オープンキャンパス等での発表を通じ、新年度入学予定の中学生や、文化祭で来校された一般の方々にも考えを届けることができました。

母校での活動以外にも、地域の小学校や中学校、大学と連携した共同企画による発表会など、その活動は 多岐にわたりました。畜産アンバサダー活動は、母校の先生がサポートしてくださり、学校間の連絡や会場 の手配など多大なるご協力をいただきました。畜産アンバサダー活動では、参集者に対して、アンケートを実 施しました。

畜産アンバサダーたちの発表により、畜産に対する良い印象を持ってもらうことができました。 また、1.400人以上の方が畜産アンバサダーになりたいという結果は、嬉しい数字でもありました。

#### 畜産アンバサダー活動によるアンケート結果

有効回答数:5.899名

畜産に対する 印象が良くなった



畜産に対する 理解が深まった



畜産業では女性の 活躍が期待できる



このような発表を もっと聞きたい



日本の畜産は 変わる必要がある



将来畜産業に 携わりたいと思う



私も畜産アンバサダーに なりたい



海外農業研修に 行きたい



## 4. 畜産アンバサダー活動

#### 各地での畜産アンバサダー活動

#### 【事例1】学校祭での活動



#### 岩手県立遠野緑峰高等学校の佐々木美咲姫さん

2019年10月26日、27日と2日間にわたり開催された母校の緑峰祭で活動を行いました。生産技術科展の一角に展示ブースを設け、模造紙にニュージーランドで感じたことや学んだことをまとめ、来場者およそ1,300名の方に対して啓蒙活動を行いました。

#### 【事例2】農家の勉強会での活動



#### 栃木県立宇都宮白楊高等学校の髙橋夢天さん

2019年11月27日に開催された農家自身による・農家のための和牛の勉強会「とちぎの和牛を考える会」で発表を行いました。畜産業への人材育成の一環として活動の機会を設けていただき、高校生や農業大学校の学生、そして、畜産業の若手から指導者まで幅広い参加者があり、310名の方に対して啓蒙活動を行いました。髙橋さんの研修のテーマである「放牧」について、参加者が考えるきっかけを作ることができました。

#### 【事例4】地域の高校生、中学生に向けた活動



## である N Z へ 研修と行き、アンドサマーとして N Z の 音をと の 高 を の 達 い は かとの ま と の 高 を の 達 い は なる また 4 選 い の また 9 認 い

#### 島根県立出雲農林高等学校の福田侑美さん

2019年11月16日に開催された母校の農業祭で活動を行いました。福田さんが現地研修テーマとした「ビジネスとしての畜産」を中心に、ニュージーランドと日本の畜産の違いや自分のテーマに沿って学んだこと、生かしていくべきことについて模造紙にまとめ展示しました。農業祭には、およそ1,000名が来場し、畜産関係者、高校生、中学生、小学生、さらに幼稚園児にも興味を持って見ていただきました。

#### 【事例3】他の農業教育機関との連携による活動



#### 埼玉県立川越総合高等学校の神尾里佳さん 筑波大学附属坂戸高等学校の安江日向子さん

2020年1月11日に女子栄養大学で開催された第8回埼玉県農業教育連携校学習発表会の場で、2人のアンバサダーが活動を行いました。この学習発表会は、女子栄養大学、埼玉県農業大学校、埼玉県内農業関係高校の教育連携の一環として合同で研究発表を行い、埼玉県内の相互の交流を促進することを目的に開催されています。発表会には69名の参加があり、閉会式時の講評では、畜産アンバサダー2名の発表について好評を得ることができました。

#### 東京都立瑞穂農芸高等学校の渡良サキナさん

2020年2月19日に瑞穂町スカイホールで、瑞穂町内の高校生、中学生373名に対し啓蒙活動を行いました。元々畜産に関心を持つ生徒が少なかったものの、95%以上の方が「畜産に対する印象が良くなった」とアンケートに書いてくださいました。これは、ニュージーランドでの実体験を自らの言葉を用いて伝えることができた結果です。

#### 【事例5】農業クラブでの活動

農業を学ぶ高校生への啓蒙活動となり、プロジェクトの周知、そして海外で農業を学ぶ研修があることを知ってもらう良い機会となりました。



愛媛県立野村高等学校の友松瑠生さん

2020年1月16日に開催された愛媛県学校農業クラブ連盟第2回各種発表県大会の場で、172名の愛媛県内高校生に対して発表を行いました。



三重県立明野高等学校の小屋敷萌香さん

2019年11月25日に開催された三重県学校農業クラブ年次大会で、586名の三重県内高校生に対して発表を行いました。

#### 【事例6】酪農教育ファーム、オープンハイスクールでの活動 兵庫県立農業高等学校の髙橋未来さん



2019年11月4日に同校が所在する加古川市の公共施設で、酪農教育ファームを開催しました。小さな子供でも理解できるようにと、髙橋さんの得意な絵で紙芝居を作りました。子供からお年寄りまで、幅広い年代の方が参加し、400名の方に発表する機会がありました。

#### 【事例7】地域に根差した活動 鹿児島県立鶴翔高等学校の内野佳奈さん





2019年11月6日、7日と2日間にわたり開催されたオープンハイスクールの場で、受験を希望する中学生や保護者、中学校職員に対して、プロジェクトの紹介を行いました。540名の方の来場があり、同校の動物科学科にいる動物を、ニュージーランド研修で得た知識や体験を加えて説明しました。中学生には乳牛に触れ、乳牛1頭に与える餌の種類や飲水量、1日の牛乳の生産量などを実際に手に持ってもらう工夫をし、体感することで、乳牛に興味・関心を深めてもらうことができました。質問もたくさんあり、ニュージーランドと日本の違いや特徴、飼育の仕方や違いなど、大いに発信することができました。

およそ半年間の畜産アンバサダー活動実施期間中に 最多6回の活動を行いました。特に重視したのは地域 に根差した活動でした。出身中学校、地域の中学校 で中学生に向けた発表(写真左上)、また、2019年 12月15日には阿久根市産業祭(写真右上)、2019年 12月19日には専門高校フェスタ(写真下)で、ブース を設けました。自作のポスターを使って来場された方 に畜産業の魅力についてPR活動を行いました。専門 高校フェスタでは、中学生の多くが海外の研修に興 味を示しました。中には、卒業後の進路選択で農業高 校を選択し、ぜひ海外農業研修に参加したいという生 徒が複数いました。

23

## 畜産アンバサダー活動

#### 国際化対応営農研究会での畜産アンバサダー活動

全国を5ブロックに分けた国際化対応営農研究会の場に登壇しました。この研究会は、全国各地の農業者や農業 関係者、農業担い手育成担当者の集まりです。

青森、群馬、福井、愛媛、鹿児島の各会場に4名の畜産アンバサダーを派遣し、「女性が活躍する未来の畜産に向 けて | というタイトルで発表しました。それぞれの会場でアンケートを取り、畜産アンバサダーたちの発表を聞い て、どのように感じたかを、そう思う、そう思わない、どちらとも言えない、の3つの項目で回答していただきました。 その結果、いずれの項目においても、高い割合で、畜産アンバサダーの発表に好感が持たれ、共感いただけたこ

とがわかりました。営農研究会の参加者の多くは、農業経 営者または農業従事者、農業関係者であり農業を良く知る 人が多数いました。未来の畜産業を担う高校生たちが、畜 産業をもっと盛り上げようという提言、それに向かって頑張 りたいという姿に会場は強く心を打たれた様でした。「将 来の畜産業を担う人材を増やすため、プロジェクトの継続 を強く願います」といったコメントも多く寄せられました。 福井大会に参加された女性稲作農家の方は、アンケート裏 面いっぱいにアンバサダーたちへの応援メッセージを書い てくださいました。

畜産アンバサダーたちの発表が多くの方に勇気を与え、こ れからの畜産業に対して期待を持っていただけたことがわ かりました。

せる然を通いてもた。マロンとてを伝えてなない、です。 「なよる力」のある人が、業界を募べて窓します。ありがアランでいました。

ニュージーラーにの放牧が、て記者を上げるのに午前相をかけるのではから、 人間のか忠を(すう、というがきを外のコンム・マラマではないだけてまた。 (4月数21) で野にヤメリットについてアメン英勢にするいなくだいないた。 かけら聞いてかはこと形をいないているです。一つとないないないのようないないのよかで まれと新い機点ですれ、どれてお何性に合わせたがまなができるようは DANTES & BOST. BIRET STORES.

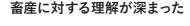
等行いなしむはは頑強、ている様ながらかかた、こ目体のない動物の世話も 67いまないとことで、生生物を書くてことに対する確如性が残れたしまれた。 ニュージングンドマンラ理想に出て主て長ずれて思います。ありかくラングでは下

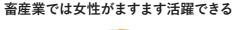
アンケート裏面に書かれた応援メッセージ

#### 国際化対応営農研究会でのアンケート結果

参加者数:483名 有効回答数:321名

畜産に対する印象が良くなった











このような発表の機会がもっと必要 日本の畜産は変わる必要がある





25

- そう思う
- そう思わない
- ─ どちらとも言えない



2020年1月31日(金) 青森県青森市の ウェディングプラザアラスカにて開催

- ○新屋敷真生
- ○佐々木美咲姫
- ○岩間ほのか
- ○ト野璃桜

2020年1月28日(火) 群馬県高崎市の ホテルメトロポリタン高崎にて開催

- ○尾崎もも
- ○神尾里佳
- 〇安江日向子
- 〇川口奈由





2020年2月5日(水) 福井県福井市の 地域交流プラザAOSSAにて開催

- ○髙橋夢天
- ○髙橋未来
- ○小屋敷萌香
- ○田中陽満莉





2020年2月14(金) 愛媛県松山市の ホテルマイステイズ松山にて開催

- 〇鈴木美香
- ○渡良サキナ
- ○畑本瑞穂
- ○友松瑠生

常和元年展 九州ブロック国際化対応営農研究会

26

令和2年2月19日(水) 鹿児島県鹿児島市の アートホテル鹿児島にて開催

- 〇小林香弥乃
- 〇福田侑美
- ○加藤星菜

## 5. 畜産業に関する意識調査

参加した高校生20名の畜産業に関する意識や考え方が、本プロジェクトを通じてどのように変わるか、プロジェクト期間中に実施した3回のアンケートにより調査しました。

1回目: 畜産アンバサダーとして選抜され事前研修に集合した初日(6月14日)

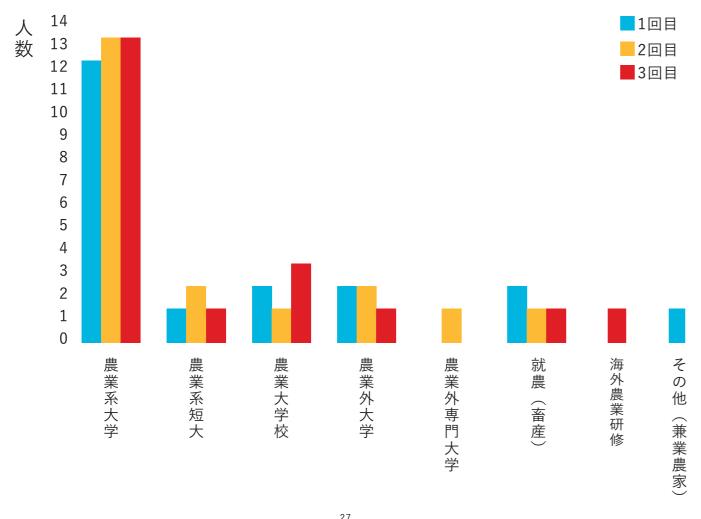
2回目:ニュージーランドでの現地研修を終え帰国した翌日(8月30日)

3回目:現地研修の経験を基に行った畜産アンバサダー活動後(2月20日~27日の間)

3回のアンケートの設問については、①当てはまる、②やや当てはまる、③やや当てはまらない、 ④当てはまらない、⑤わからない、のいずれかで答えていただきました。

#### 1. 今、考えている高校卒業後の進路は?

高校卒業後の進路として、事前研修時から農業 系大学への進学を考えている人が多数を占めま した。東京農業大学、酪農学園大学、帯広畜産 大学、宮崎大学など、農学部、生物資源科学部 を持つ大学、また獣医学部を持つ大学への進学 を考えている人もいました。現地研修後は農業 系大学の人数が増えていますが、将来畜産業界 で活躍するための知識を身に着けたいという考えからでした。また、インタビューを行ったニュージーランドの農家たちが、観光、教育、簿記など農業外の分野を大学で学んでおり、その理由が「違う分野を学んでおくと、農業で役に立つ」という話から、新たな分野の学びに挑戦することへの価値を見いだしたという人もいました。

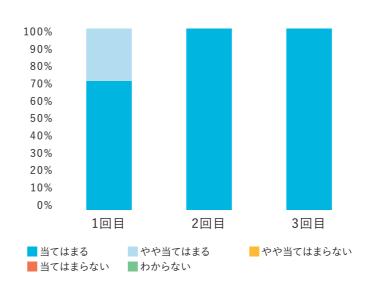


#### 2. 畜産業はかっこいい仕事である

普段から畜産に携わっている高校生であることから畜産業に対する憧れがあり、「当てはまる」が事前研修時から高い数値でした。参加者の多くが、畜産業のネガティブな3K(キツい、臭い、汚い)を、ポジティブなイメージに変えていきたいと考えていて、現地研修後にその考えはさらに強まりました。

「ニュージーランドの畜産業にネガティブな3Kのイメージはなかった」という人もいました。畜産アンバサダー活動では、酪農を「楽農」にしたいと発表する人がいました。

ニュージーランドで出会った女性就農者の影響は大きく、プロジェクトを通じて、畜産業はかっこいい仕事であるという意識が確実に定着したと考えられます。



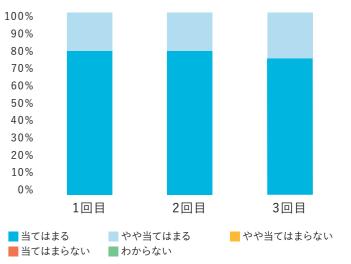
#### 3. 将来、畜産(生産)に携わりたい

いわゆる畜産業への就農意識は、事前研修時から高い数値でした。今すぐに就農したいということではなく、大学や農業大学校で知識や経験を積み、何年か先に就農したいという考えを含みます。進学して、人口授精師、受精卵移植師、削蹄師などの資格を取り、畜産現場で活躍したいと考えている人もいました。

現地研修では、PITOのJacklyn Flintoffさんが「長靴とパッション(情熱)さえあれば、女性だって酪農ができる」というメッセージを贈ってくださいました。これをきっかけに、就農につい

て動機づけられた人もいます。

また、就農ではなく畜産業を支える職業に就き たいと考えている人もいます。乳業関連企業や 研究所、遺伝子解析を学び畜産動物の病気治療や予防の分野で貢献したい、獣医師になり地域の畜産農家を支えたい、農業高校の教員として畜産業の担い手不足を解消したいという考えを持った人たちです。



#### 4. 畜産業は儲かる仕事である

事前研修時は、「当てはまる」の数値が少なかったものの、現地研修後は、その数値が増えました。

現地研修中に実施した2泊3日のファームステイで、お風呂とトイレが各部屋に完備された大きな家に滞在させていただいたり、ずっと遠くの場所を指さし「あそこまでがうちの土地」と、見渡す限り先の放牧地を見せられたりと、日本では考えられないスケールの大きな農家を目の当たりにした影響です。

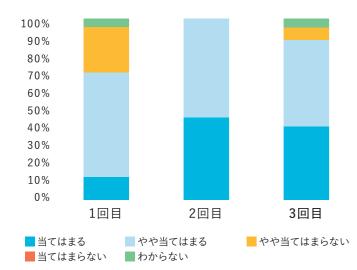
さらには、まだ牧場のオーナーになっていない 牧場従業員でさえ、独立するために資金を貯 め、既に3億円近くの貯金があることがインタ ビューを通じて分かりました。

また、20代前半にして年収が750万円の若手酪農家がいたりと、ニュージーランドの農家は日本よりはるかに高い収入を得ていることが分かりました。それらに加えて、ニュージーランドで酪

## 畜産業に関する意識調査

農業に就くキャリアパスシステム「シェアミルキ にはそうならないかもしれないと考えた人の二 ング | の存在を知れたこともあります。これらの ことから、畜産業自体が儲からない職業である という認識はなくなりました。

一方、畜産アンバサダー活動を通じて、日本の 畜産業の状況について理想と現実の間で考えを改め た人もいました。



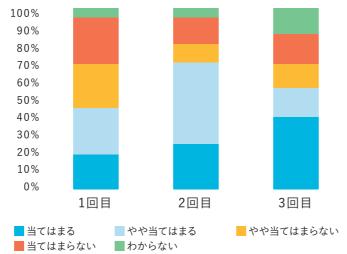
#### 5. 将来、畜産農場の経営者になりたい

参加者たちの就農意欲は高いものの、将来、畜 産農場の経営者になりたいという考えは、事前 研修時は少ないものでした。生産には携わりた いが、経営者になることはハードルが高く、考え が確信にいたらなかったようですが、現地研修 後に変化が見られました。

農業視察で実施した女性酪農家へのインタ ビュー、またファームステイでの経験から、やり 方次第では十分に経営ができることが分かりま した。ニュージーランドで出会った畜産農家が 「農業は仕事ではなくライフスタイル」と、畜産 業を仕事として捉えるのではなく、一つの生き 方や生きがいとして捉えていて、その考え方に 憧れを持った人が多くいました。

畜産アンバサダー活動後は、「当てはまる」の数 値が続けて伸びた一方、「わからない」の数値 が増えました。この時期高校卒業後の進路を考 え、牧場経営者になりたいと考えた人と、実際

つが混在したと考えられます。



#### 6 畜産業は 努力が報われる仕事である

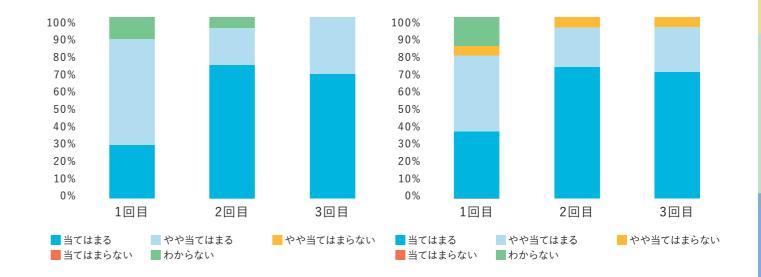
3回の意識調査を通じて、「当てはまる」、「やや 当てはまる | が高い数値となりました。

多くの参加者は、農業実習などで少なからず畜 産現場での経験があり、朝夕の搾乳、家畜の管 理作業など、労働時間や作業形態について体感 的に知っていたように感じます。現地研修後は、 「当てはまる|の数値が大きく増えました。

大型のロータリーパーラー、GPSを利用した牧 草地管理システム、牛の年齢や妊娠の有無を牛 に装着したICチップにより判別できる装置な ど、最新技術やシステムの紹介がありました。

これらを利用することで、今まで時間をかけて いた作業が省力化できると分かり、報われるか は努力と工夫次第だと分かりました。

また、畜産アンバサダー活動を通じて、ニュー ジーランドで得た最新技術や考え方について、 日本の畜産業に導入するアイデアを共有できた ことが手ごたえとなり、畜産アンバサダー活動 後は、「当てはまる」、「やや当てはまる」が高い 数値になったと考えられます。



#### 7. 放牧は畜産業の省力化に効果的である

放牧はニュージーランドの酪農の代名詞と言え ます。事前研修時は、「当てはまる」、「やや当 てはまる | の数値だけで80%ありました。

事前研修では、メンターの二人から自分の牧場 で実践している放牧や、研究対象として調査し た放牧の話を聞く機会がありましたが、耳にし ただけで放牧をまだ実際に見たことがない人が 大半でした。現地研修後、「当てはまる」の数値 が大きく増えました。

ニュージーランドは町から少し離れるとすぐに 放牧地があり、牛たちがのびのびと草を食んで いました。放牧の様子を実際に見たり、ファーム ステイを通じて体験したことにより、具体的に放 牧のメリットを実感する機会がありました。畜舎 を掃除する手間が減る、免疫力が高まり病気が 減るなど、確かに放牧は省力化に効果的である と分かりました。一方、放牧により個体管理が 難しくなる、放牧地の管理に時間や労力、コスト がかかるなど、省力化できない部分があること が分かり、一概には効果的だとは言えないとい う意見もありました。

#### 8. アニマルウエルフェアは 一般的によく知られている

環境問題や持続可能な農業は、畜産を学ぶ高 校生たちにとって関心の高いテーマです。我が 国でも、生産性の向上や安全な畜産物の生産に もつながることから、ヨーロッパを中心に高まっ ているアニマルウエルフェア(動物福祉)の考え 方を踏まえた家畜の飼養管理の普及が求められ ています。

事前研修時は、アニマルウエルフェアの考え方 自体よく分からなかった人が多く、「当てはまら ない |、「わからない | の数値が半数を占めまし た。現地研修後は、「やや当てはまる」の数値が 増えました。ニュージーランドはアニマルウエル フェアの水準が高く、この取り組み自体が付加 価値という考え方ではなく、それが農家の義務 であり、牛本来の生態に近づけることが大切だ と考えられていました。

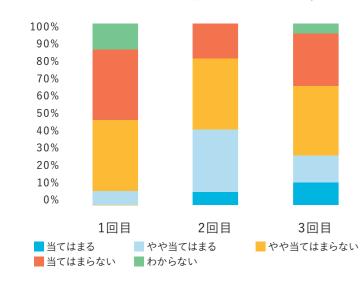
「人のために牛が働くのではなく、牛のために人 が働いている。| 「思いやりを持って牛に接すれ ば、牛は健康で幸せでいられ、結果として自分 も健康で幸せでいられる|と話す農家もいまし

畜産アンバサダー活動後は、「やや当てはまる」 の数値が減り、「当てはまらない」の数値が増え ました。畜産アンバサダー活動を通じて、日本と ニュージーランドを対比した時のアニマルウエ フェアの考え方に、大きな差があると分かった

## 5. 畜産業に関する意識調査

ことによるものと考えられます。

「家畜に福祉が必要なのか?」と逆に質問をされたり、アニマルウエルフェアという言葉が浸透していないことから、この考え自体が理解されないといった報告がありました。一方、畜産業が盛んな地域では、アニマルウエルフェアについてよく知られていたという報告もありました。



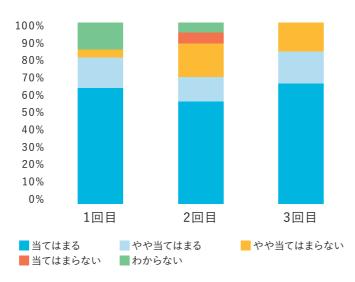
#### 9.6次産業化は 今後も推進されるべきである

3回の意識調査を通じて、「当てはまる」の数値が高いものの、その数値は興味深い変化がありました。

畜産農家が他産業と連携して複数の収入を得たり、付加価値を向上させる取り組みは重要であるという考えから、事前研修時から6次産業化の推進について肯定的な考えを持つ人が多くいました。

しかし、現地研修後は、「やや当てはまらない」の数値が増えました。ニュージーランドには6次産業化に取り組んでいる酪農家が少なく、その理由は、ニュージーランドの酪農が輸出産業として確立し、国内需要を促進するための工夫があまりいらないことが分かったからです。

畜産アンバサダー活動後は、「当てはまる」、「やや当てはまる」の数値が現地研修後よりも増えました。日本では牧場に加工場を持ち、独自にブランド化した牛乳やアイスクリームを販売している農家など、地域の風土や慣習に合う方法として6次産業化を推進する必要があると考えを改めた人がいたことによります。



31

#### 10. 畜産業は女性に適している

事前研修時は、「当てはまる」、「やや当てはまる」を合わせた数値が60%でした。

この時点ではまだ畜産業において活躍をしている女性にあまり出会ったことがなく、「わからない」の数値が40%ありました。

現地研修後は、「当てはまる」、「やや当てはまる」を合わせた数値が95%に達しました。

畜産アンバサダー活動後は、「当てはまる」の数値がさらに増えました。畜産アンバサダー活動を実施した会場で、女性の活躍を期待する多数の共感が得られたことにより、意識が高まったものと考えられます。

一方、「やや当てはまらない」と回答した人が1名いました。「畜産業は女性に適しているか?」という、この質問自体に疑問を呈しました。性別ではなく、個々人の能力を生かした仕事をするべきだと、ニュージーランド研修から得た男女平等・公平という考え方によるものです。

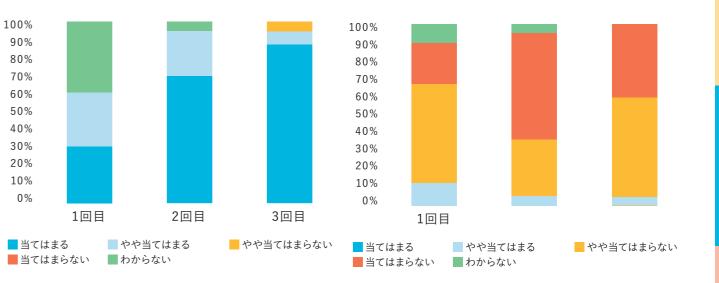
## 11. 日本の畜産業は女性が活躍できる環境が整っている

3回の意識調査を通じて、「やや当てはまらない」、「当てはまらない」の数値が高い結果となりました。「当てはまらない」という回答が、現地研修後は特に上昇しています。

事前研修中に農林水産省職員から、就農・女性 課女性活躍推進室の「農業女子プロジェクト」 について説明を聞きました。その中で、女性の 役員や管理職がいる農家は、売上や収益が向 上する傾向があるという話がありました。

現地研修中、それを裏付けるように、帳簿や対 人能力は女性の方が優れ、女性が経営に加わる ことで良い経営を行っている農家の実例を多数 聞きました。

男女の平等、公平について考える機会となり、 性別によってできること、できないことが分けられる必要はなく、それぞれの特性を生かすこと の大切さに気づかされた様子でした。



## 畜産業に関する意識調査

#### 日本とニュージーランドの比較

ニュージーランドと日本の畜産業の「強み」と「弱み」について記述式で回答をしてもらい、プロジェ クトを通じた最終結果の出る畜産アンバサダー活動後の3回目のアンケートについて参加者たちが考 察を行いました。色々な言葉で表現されていましたが、その中の特徴としてよく表れていることを分類 し横棒グラフにしました。

33

#### 12 ニュージーランドの畜産業の強みと弱み

「放牧」が、強みとして一番多く挙がりました。 子牛の出産時期を合わせた季節分娩、広大な 牧草地での涌年放牧による作業の省力化、また 牛のストレスを軽減し長命多産につながると参 態では、国際価格が変動した際、酪農家に大き 加者たちは考えました。一方、後述しますが、放 な影響が出る可能性があるため、「流通経路の 牧が最も良い飼育方法とは言い切れないことが 分かりました。

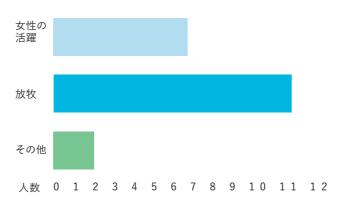
これは、弱みとして一番多く挙がった「環境汚染 問題 | にも関連しています。ニュージーランドに は、放牧による家畜排泄物の河川汚染や、家畜 による草地の踏み荒らし問題があることが分か りました。参加者たちは、放牧による環境負荷 が重要な課題であることを認識し、放牧はメ リットばかりではなく、デメリットがあることも 分かりました。強みについて二番目に多く挙げら れたのが、「女性の活躍」です。ニュージーラン ドでは、性別に関係なくそれぞれの個性を生か した農業パートナーとしてお互いを支え合ってい ました。

また、ニュージーランドで出会った逞しい女性た ちは、畜産業の先輩として参加者を励ましてくれ ました。その他には、政府からの補助金がなく ても畜産業が1つのビジネスとして成り立ってい ること。また、現地研修を実施したタラナキ地 方が、放牧による環境汚染問題に対策を講じて いることが分かり、放牧のデメリットを補う対策 が強みだと挙げた人がいました。

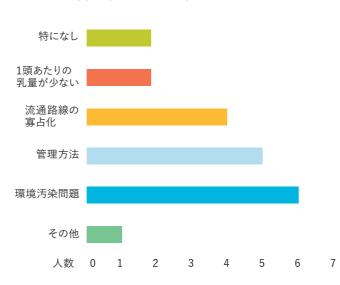
弱みについては、やや意見が分かれました。「環 境汚染問題 | が一番に挙げられましたが、次に 多かったのが「管理方法 | です。個体管理や牧 草地(飼料管理)の難しさを考えると、放牧は 必ずしも作業が減るわけではなく、十分な知識 と管理能力が求められることが分かったためで す。さらに、牧草をメインとする飼養なので、濃 厚飼料を与えた場合と比べて「1頭あたりの乳量

が少ない」が挙げられました。また、生乳の取引 先がフォンテラー社の独占市場となっているこ とに加え、取扱量の8割を輸出するビジネス形 寡占化 | を挙げた人がいました。

#### NZ畜産業の"強み"は何だと思いますか?



#### NZ畜産業の"弱み"は何だと思いますか?



#### 13. 日本の畜産業の強みと弱み

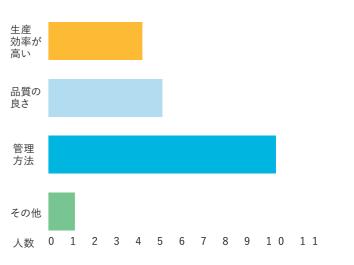
「管理方法」が強みとして一番多く、大半の人 最後に、ニュージーランド畜産業の一番の強み 「牛産効率が高い」という回答にも関連します。 いると考えた人もいました。

弱みについては、半数近い人が「作業効率が悪 い | を挙げました。強みを生かした品質の高い 牛乳を生産する代わりに、労働時間が長くなり れません。放牧だけでなくシェアミルキング制 ます。ニュージーランドの酪農は、給餌作業や牛 床の管理がなく、搾乳時の前搾りや乳房拭き、 ディッピングを行わないことが、日本と比べて作 業時間を少なくしていました。日本人特有の真 面目で几帳面な性格が、衛生的で、安全、安心 な質の良い牛乳を生産できる一方、時にそのこ とが作業効率において障害となっていると考え た人がいました。

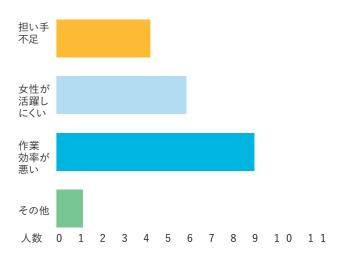
別段ですが、「畜産業における日本の農業技術 は世界と比べて優れているか? | という質問を、 畜産アンバサダー活動後の参加者に投げかけた ところ、そのように感じている人が多くみられま した。海外の畜産現場を知ることで、日本の農 業技術は高いレベルであることを再認識したよ うです。一方、「畜産業における日本の農業経営 は世界と比べて優れているか? | という質問につ いては、7割の人が否定的な回答でした。ニュー ジーランドで出会った農家は、酪農を仕事では なくライフスタイルであると話し、生活に負担を かけず、プライベートを大切にする考えから、自 分に合った什事量で、上手にプライベートを両 立させる考えを持っていました。性別を問わない 人それぞれの強みを生かした様々な活躍の機会 があれば、畜産業におけるネガティブなイメージ が減っていき、新規参入者が増え、日本の畜産 業の弱みとして挙げられた「女性が活躍しにく い | 、「担い手不足 | を改善できると考えた人が いました。

が挙げました。牛舎でのつなぎ飼いにより、病として参加者たちが挙げた「放牧」を、日本に導 気の早期発見、牛の清潔さ、1頭あたりの乳量が 入することができるのかという点について考えた 多いことなど、個体管理が行き届くと参加者た 人が何名かいました。日本は、国土の70%以上 ちは考えました。管理方法は、「品質の良さ」、が森林であり放牧に向いた土地が少ない上に人 □が多く、生産量を重視するため牧草メインで その他には、日本人の真面目で几帳面な性格を は乳の生産量が不足すること、また、夏の気温 挙げ、そのことが管理方法の良さにつながって やアブなど害虫が多いことを考えると、ニュー ジーランド式の放牧をそのまま導入するには向 いていません。しかし、近年増え続ける耕作放 棄地を放牧地として生かすことができるかもし 度により担い手を増やしていくことで、日本に放牧 が定着する可能性は十分にあると考えられます。

#### 日本畜産業の"強み"は何だと思いますか?



#### 日本畜産業の"弱み"は何だと思いますか?





#### 現地研修 引率教員

北海道当別高等学校 校長 岸田 降志

未来に広がる畜産女子ネットワーク ~北海道から鹿児島まで~

#### 1. お礼.

このたびの本事業への参加につきまして、

国際農業者交流協会様並びに日本中央競馬会様には 本当にお礼申し上げます。ありがとうございました。貴 重な経験とともに全国に広がる現役高校生とのネット ワークを作ることができました。教師冥利に尽きる部 分がたくさんありました。たくさんの新しい知識を得 て、たくさんの経験ができました。たくさんの楽しい思 い出がありました。同時に彼女たちの将来の活躍に向 けた一助になればと思います。

#### 2. はじまり

平成31年4月の異動で本校に赴任しました。ニュー ジーランド(以下NZ)大使館の方から北海道博物館で のマオリの展示会の開会式・夕食会の招待状が届き ました。同じ頃NZ航空から生徒対象のカルチャー キャンプの申込案内も届きました。招待の方は、私の 都合が合わず、本校の教員に出席してもらいました。 キャンプは、1名の生徒が参加しました。NZには、何 かの縁を感じる機会でもありました。

昨年度までの3年間は普通科高校に勤務しており、第 1回目のこの事業の実施は知りませんでした。4月下 旬全国農業高等学校長協会より応募のメールが届 き、初めて事業の存在を知りました。

#### 3. 事前研修

国立オリンピック記念青少年総合センター 2泊3日 初の顔合わせです。全国からの生徒20名、協会職員2 名、メンター2名、引率教員2名です。「ワクワク」感や 「ドキドキ」感で期待が膨らんでいました。モチベー ションが高く、自らの興味・関心を持ち、目を輝かせて いた高校生たちは、見るからに頼もしい限りでした。 モチベーション (意欲・動機) の高い高校生。個性あ ふれる集団。事前研修の期間で行ったことは、①自己 紹介をした。②テーマ(キーワード)を決めた。③グ ループ分けをした。④事業説明、NZ大使館訪問、講 義を受けた。また、NZ大使館訪問の際に生徒2人の 英語での挨拶があり、ともに素晴らしい挨拶でした。 この他、NHK『なつぞら』でのFFJの歌の動画に応 募し、7月25日見事に配信されました。メンターの2

人からのアドバイスもいただきました。

型にはまらない、学校の枠を越えたこの事業への参加に 感謝し、この高校生達に何を与えられるのかを模索し ながらの事前研修でした。2か月後の再会を約束し、 終了しました。渡航までの2か月をメールでやりとりを しようと考えていました。全員にメールアドレス入りの 名刺を配りました。高校生は、さほどメールを使用し ていないことが分かりました。全員とメールが確認で きたのが、7月4日です。4つの問い、参考資料3回、 課題2回を送信しました。9名からの解答がありました。

#### 4. 現地研修

成田~オークランド~ニュープリマス~ストラトフォード

ほとんどの生徒が、海外初体験です。しかし、特別に 動じる様子もなく、NZドルへの両替も各自が済ませ ました。パスポートを忘れることもありませんでした。 出国の際は、顔認証でしたが、パスポートへの出入国 の印をもらいました。オークランド空港では、トラブル により全員が空港外への避難指示が出されました。 国内の乗り継ぎ場所が違ったので、バスですぐに移動 し、ニュープリマス空港へ。到着後、一路バスでタラ ナキダイオセサン女子高校へ向かいました。特筆すべ きは、開講式の際のホンギです。鼻と鼻を合わせるマ オリの儀式ですが、全員が経験できました。素晴らし いことです。また、代表生徒による英語のスピーチも 立派でした。カパハカ ポフェリ(マオリの歓迎の儀式) を間近で見られたことも全員が感動しました。

寮生活が始まります。生徒の微妙な英訳があったり、 食後のデザートの一口を交換したりと、各人のコミュ ニケーション能力は、全開でした。

2人部屋。シャワールームとトイレは別にありました。 寮母さんがおり、男子禁制はもちろんです。私たちも 最初案内されて寮内を回りましたが、それ以降は学習 室のみの出入りで、毎日来訪者の名簿にサインが必要 でした。日本の農業高校には、文部科学省の経営者 育成寮を設置している学校がいくつかあります。今回の 参加者の中にもこの寮生活を経験した生徒や現在も 遠隔生対象の寮で生活している生徒がいました。その せいか、大きな問題もなく過ごせたようでした。寮生活に 対し、世話ができる生徒として1名のバディをつけてくれた ことも生徒間のコミュニケーションに役立ちました。

現地コーディネーターによるプロラムは、見事でした。 日本語が堪能で、日本でのALT経験があるとお聞き しました。基本は英語ですが、生徒の話す日本語を聞 き分け、場合によっては日本語を交えての会話でし た。学習内容が素晴らしいものでした。次を見据えた 学習内容として、必ず役立つものでした。この間の英 語学習は、生徒達のモチベーションもさることなが

ら、必ず使うであろう英語レッスンとなり、担当授業 の生徒を参加させての実践的な会話の練習もさせて くれました。具体的には、買い物の仕方の英会話。簡 易なケーキ作り。お菓子を食べ比べての評価。自己紹 介。バター作り等々。

#### <食牛活>バイキング(寮)

食欲がある生徒は、健康上問題がないと思います。事 前研修の時から、たくさん食べることのできる生徒達 でした。寮の最初の食事は、開講式の後の昼食でし た。生徒達は好き嫌いもなく、お米もあったので、お いしく食べていたようです。気のついたことは、煮た ビーツ(初めて)がスライスで用意されていた。ミロが 飲めるようになっていた。ベジタリアンの食事が用意 されていた。野菜が少なかった。私の体調も良く、腰 の痛みもほとんど感じない毎日でした。NZは1階建 ての建物が多く、階段がないせいかもしれません。 チーズ工場見学の後は、工場生産のチーズが使われ ているマクドナルドでハンバーガーをそれぞれが注文 して食べることができました。唯一オークランドのホ テルでは、ラム・ビーフ・チキンからの選択ができ、そ れぞれが好みでオーダーしていました。

#### <スタッフ>

協会職員・メンター・引率教員・現地学校教員・現地通訳 優れたメンバーでした。適材適所という言葉が当ては まる動きでした。それぞれが自己の役割を深く認識 し、生徒理解に努め、個々の生徒への指導・助言が適 切になされました。現地教員・通訳も同様でした。 各人が、日頃から無意識のうちに自己研鑽による人間力を 高める努力をしており、面識の無い生徒に対してもすぐ に打ち解け、指導をすることができました。対応する 生徒達は、指導の本質をすぐに理解し、行動に移す。

基本的に優れたスタッフと素直な生徒達の集団でした。

#### 5. 研修中のアドバイス ~話したこと~

<課題解決学習(プロジェクト学習法)>

4日目の木曜日、報告会に向け農業高校で教えている 課題解決学習=プロジェクト学習法について話をしまし た。Plan→Do→See目標を持って計画し、計画 に沿って実践をする。そして反省評価をします。最近 は、Plan→Do→Check→Actionとなってい ますが、まとめ方やプレゼンの仕方。帰国後の報告 会、更には各地での報告会について話をしました。

#### <ほっと一息ついたとき>

10日目、オークランドのホテルで夕食前に時間をい ただきました。ほとんどの行程が終了し、気心も知 れ、安堵の気持ちから自我を優先し、周囲を顧みない 言動が見受けられました。このメンバーは、将来ずっ とつながるであろう20名です。この機会を楽しい方 向へとつなげるよう努力してほしい。最後の発表に向 けて、全員で頑張ろうと励ましました。

#### <発表前夜>

短い準備期間の中にあって高い完成度と評価します。 しかし、時間の使い方の目安が見えませんでした。ま た、完成までの時間意識が薄く感じられました。結 果、学校の先生のように急ぐことを促す発言が出てし まいました。

#### <発表当日>

彼女たちに私がどう映っていたかは、わかりません。 発表を前に一緒に渡航した大人達からの一言で校長 は最後にと声が飛びました。彼女たちは、最後によう やく私が校長であるとの認識をしたのかもしれません。 この経験を次のステップへとつなげてほしいなどとあ りきたりの話をしたように思います。伝えたいことはた くさんあったはずなのに、時間の経つのがなんと早い ことかと感じました。

#### 6. 将来に向けて

見学先等専門の施設や経営形態の説明は、他に任せ ました。私の視点は、このプロジェクトの始まりから 彼女たちの将来に向けてのものになります。

プログラムを消化することにより、彼女たちのできる ことが増えていきました。できないじゃなく確実にでき るようになっていました。この経験や成長がそのまま 学校で通用するとは思いません。様々な角度からの 視点があり、社会環境や文化・習慣の違いを感じてほ しいと思います。きっかけは作りました。将来にどう生 かすかは、本人次第です。将来の活躍を期待します。 本事業の継続を望みます。また、運や縁といった人と 人のつながりを大切にし、人材育成のための事業を 望んでいます。第70回日本学校農業クラブ全国大会 南東北大会に参加する生徒が何人かいました。制服 の違う生徒が複数で集まっていれば、周りの興味・関 心を引くと思い、大会の閉会式会場前で記念写真撮 影の約束をしました。相談があれば進路の全面的サ ポートを約束しました。気が向いたら結婚式に呼んで ほしいと言いました。10年後に笑顔のすてきな女性に 成長した彼女たちとの再会を夢見ています。



## 6. 参加者の報告



#### 畜産ア<u>ンバサダー</u>

北海道帯広農業高等学校 酪農科学科 2年

尾崎 もも

#### 1. テーマ

畜産の担い手(農家を育む政策)

#### 2. キーワード

教育

#### 3. キーワードの繋がりと考察

私は「畜産の担い手(農家を育む政策)」というテーマを「教育」というキーワードで考えることにしました。昨年、このプロジェクトに参加した先輩の発表から、NZでは酪農が人気のある職業だと聞いており、NZでは、一般の方々に対して、どのように酪農の魅力を伝えているのか疑問を持つようになりました。NZの学校では酪農に関する授業や取り組みが多く行われているのではないか、また、農業に対する理解者を増やすことが担い手の増加につながるのではないか、と考えていました。

実際にNZに行ってみると、酪農は、第一次産業の中では人気があることが分かりました。しかし、NZの多くの若者は酪農以外の職業に興味を持っていました。また、酪農に対する授業を学校が行っているわけでもありませんでした。しかし、農家側では、ファームステイなど一般の方々との交流を行っている方が多かったです。実際にNZの学生に酪農のイメージを聞いたところ「牛がかわいい」や「お金持ち」などの意見が出てきて、悪いイメージは一切ありませんでした。

日本で聞く酪農の3Kのイメージを頭の片隅に置きながら牧場を見ると、これらのことは感じられませんでした。また、酪農家同士や酪農に関して興味のある人が入れるコミュニティが多くありました。

そのため、どの農家も仕事に誇りを持って楽しそうに取り組んでおり、酪農に対する悪いイメージがほとんどありませんでした。このように、酪農に触れる機会が日本よりも多いと感じました。

まず、悪いイメージとしてよく聞く3Kのイメージをなくします。そのためには、3Kのイメージを打ち消す、酪農の魅力を伝えることが必要となります。牛の優しさ、酪農という一つのライフスタイル、美味しい乳製品、自然と共存し成り立つ産業の素晴らしさを伝えたいです。

その手段として、一般の方々が実際に酪農を体験でき

37

る場や酪農家の方々と酪農に興味を持っている人が 交流できるコミュニティを増やし、興味を持つきっか けの場を作ります。



#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

NZ研修で私が一番衝撃を受けたのは、どの農家さんも幸せそうだったことです。もちろん日本にも農業を楽しんでやっていて幸せそうな人もいますが、私の中では高齢者が少し疲れ気味でやっているイメージが強かったため、とても驚きました。

そこで、NZすべての酪農家に仕事へのモチベーションを聞いたところ、「酪農を仕事としてとらえてはいない。1つのライフスタイルと思っているから仕事という感覚ではない」と言っていました。また、私がお話しできた4. NZすべての酪農家の方々は、「目標を持って常に高みを目指しており、仕事を楽しんでいる」と感じました。他にも前述したように酪農家同士のコミュニティが多く、情報共有の手段がしっかりしているため互いに高め合えるということもあると思います。

また、もう一つNZで感じたことは、真の男女平等の在り方です。日本は今まで女性が不利な立場になることが多かったです。そのため女性を支援しがちですが、逆に女性が有利な立場になってしまう気がします。しかし、NZでたくさんの人の話を聞き、男女には差がないという発想の上で適材適所な役割分担をすることが本当の平等なのだと気づきました。そのためには、「男性ができることは女性でもできる」という考えを根付かせる必要があります。実際NZの人たちは当たり前のようにそう思っていました。その上で、女性だから、男性だからではなく、その人が向いていることをやることが本当の平等だと思います。

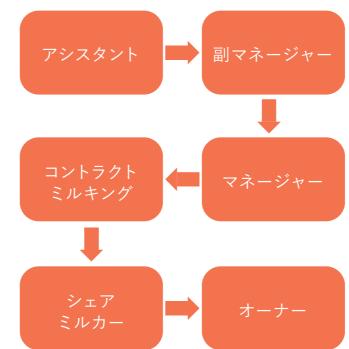
#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私が畜産アンバサダーとして広めていきたいことは、 畜産業の魅力はもちろんですが、NZで学んできた 「シェアミルキング」というキャリアパスです。シェア ミルキングとは土地のある人(オーナー)と、土地はな いが牛は持っている人(シェアミルカー)が共同でビ ジネスを行い、収入と経費を一定の割合でシェアする 制度のことです(下記の図参照)。

具体的には、まず、アシスタントとしてオーナーの牧場で働きます。約1年で認められると、副マネージャーに昇進します。さらに認められると、マネージャーに昇進します。次にコントラクトミルキングという搾乳のみを行い、実際に搾った量で賃金を決められる段階があります。しかし、あまり主流ではなく次の段階のシェアミルカーになる人が多いです。シェアミルカーは前述したように、オーナーと、収入と経費をシェアします。そのため、自分のやり方次第で自分の賃金を増やせるというわけです。そして、土地を買えるだけのお金が貯まると、最終段階のオーナーになれます。

このようにNZでは新規就農するための明確な道筋があります。それに比べ、日本ではそのような段階がありません。そのため、この制度を広めることにより酪農に興味はあるが、何から始めればわからない人達を就農へときちんと導くことができます。また、就農にはお金がとてもかかるためやりたくてもやれない人がいると思います。しかし、この制度は確実にお金を貯めることができ、さらには現場での経験も積むことができます。つまり、この制度を広めることにより、畜産の担い手を増やすことができるというわけです。

#### NZにおける酪農家のキャリアパス



#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

私は以前から酪農家になるという夢があります。NZ 研修を通してこの夢に具体性を持たせることができま した。ただ酪農を営むわけではなく、働きやすい仕事 環境や自然環境に配慮した酪農家になりたいと思い ます。NZの人たちを見てきて「人生を楽しんでいる なしというイメージを受けました。この差の一つとして 日本人は、仕事にとらわれすぎなのだと思いました。 もちろん生きていくために働かなくてはいけません が、仕事だけが人生ではありません。人生を豊かにす るためのお金を稼ぐ手段の一つが仕事なのだと私は 考えます。そのため、私の牧場では、働いている人の ことを優先し休みを取りやすい環境を作りたいです。 また、自然環境に配慮することによって酪農に関する 悪いイメージを減らせると私は考えています。この夢 を実現するために、日々の努力を惜しまずに努力し続 けたいと思います。

## 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

私は小学生のころから酪農家になりたいと思っていいと思っていいほど「農家の息子に嫁ぎなさい」と言われます。この経験は、畜産業を目指している女子にはよくあるとだと思います。NZでは最近、酪農に興味を持つるです。上記でも言ったように、NZの人達には「男性があることは女性でもできる」という考えがあります。そこで私が伝えたいことは、畜産業を目指す人以外にもられているです。実際、NZの人に私の夢を伝えたところ「You can do it!」と励ましてもらえました。そのため、皆さんも夢に向かって努力し続けてほしいです。



## 6. 参加者の報告



#### 畜産アンバサダー

青森県立三本木農業高等学校 動物科学科 2年

#### 新屋敷 真生

#### 1. テーマ

畜産の担い手(農家を育む政策)

#### 2. キーワード

農業機械

#### 3. キーワードの繋がりと考察

畜産の担い手というテーマで農業機械について考えました。若者は畜産業に対して3Kという「きたない」「臭い」「きつい」などのイメージを抱いています。私は畜産の担い手を育成するためには、「きつい」や「大変」というイメージ変えることが必要だと考えました。そのイメージを変えるためには農業機械を導入し、労働効率を向上させることが必要だと思いました。今回の研修先であるニュージーランドは家畜の頭数が多く、広いな牧地を有しており、酪農を営むには効率よく作業しないととても時間がかかります。そのため、農業機械の導入が必要であり、担い手不足の問題も解決できると考えました。

ニュージーランドの酪農家には小規模で二百頭程、大 規模なところでは何千頭以上の規模で経営している酪 農家がいます。飼育頭数が多いところでは搾乳の時間 がとてもかかります。ニュージーランドでは搾乳時間を 減らすための工夫として頭数に合わせて搾乳機を導入 していました。ニュージーランドではロータリーパー ラーとヘリンボーンタイプが多かったです。頭数が多い とこはロータリーパーラーを使っていることが多かった ですが、酪農家さんによっては頭数が少なくても早く終 わるからという理由でロータリーパーラーを使っている 酪農家さんもいました。多い頭数を少人数で作業する ため、最新の搾乳機だとディッピングを自動で行う機 械がついていました。この搾乳機を見て日本でもロータ リーパーラーが普及すれば短時間で作業を終えること ができ、労力の負担軽減につながると思いました。それ に若者が感じる 「きつい」という点を改善できるのでは ないかと考えます。

ロータリーパーラーは短時間で搾乳できるので、日本に 良さを広めたいと思っています。ただ、課題として機械 の導入にあたって初期投資がとてもかかるので簡単に は実現できません。ロータリーパーラーの良さは一人で も搾乳ができ、乳量が多い時期、少ない時期で機械を 回す時間が変えられます。そのため早く搾乳を終えるこ とができます。ロータリーパーラーは大きさが様々ある ので頭数に合わせて活用できると思います。酪農家に は搾乳機が必要です。地方自治体が搾乳機を導入する 際の補助を出してくれることでさらに導入がしやすくな りロータリーパーラーが普及するのではないかと思いま す。これからもっとロータリーパーラーの良さが広まれ ばいいなと思います。

#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

私の家は肉用牛の繁殖農家で、放牧酪農にとても 興味がありました。放牧酪農はどのようなメリットが ありデメリットがあるか知りたいと思いました。ニュー ジーランドに行くと、たくさんの牛が放牧されていまし た。私にとってとても憧れる光景でした。研修が始ま りインタビューをする中で畜産について多くのことを 学べました。放牧をすることによって運動量が増え、 ストレスが軽減されます。また、牛舎がいらないという メリットもあります。しかし、牛を牛舎で飼育しないた め、発情期を見逃したり、病気の変化に気づきづらい というデメリットがあります。大規模な放牧ができる ニュージーランドは一定の範囲を囲み、牧草が無く なったら放牧する位置を変えるという方法を用いてい ます。新しく牧草が生えるまでに5週間程はかかるた め、牧草面積が少ない日本では放牧酪農の定着はと ても厳しいということが分かりました。

放牧は牛にとって非常にいいことであり、フリーバーンの牛舎などがいいのではないかと思います。フリーバーンにもメリット・デメリットがありますが、メリットとしては牛が好きな時に移動でき放牧に近い形で飼育できるからです。本研修を通して、日本では放牧酪農は厳しいからこそ工夫して限られた敷地で経営する必要があると思います。

#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとしてシェアミルキングという制度を広めていきたいです。今の日本は高齢化が進んでいて家業を廃業する人も多くなってきています。それに対して就農人口も減っている現状であります。このままだと誰も畜産業に就農する人がいなくなってしまいます。そこでシェアミルキングという制度を行えばいいのではないかと思いました。シェアミルキングとは土地のあるオーナーと土地はないが牛を持っているシェアミルカーが協同でビジネスを行い、一定の割合で収入をシェアする制度のことです。この制度を行

うことで廃業を考えていて土地と牛を持っている人 や、土地を持ってるが上手く活用できていないりなります。私の親戚の肉用牛の飼育農家はとても知識なる人でしたが、後継者がいないため廃業を余儀農なれました。私はとてと残念に思います。地域の農業でものできれば、就農する人はとてと残念に思います。地域の農業であるとは不安でいっぱいだと思います。地域の農業であると思います。また、青森県にはTMRセンターとはういます。また、青森県にはTMRセンターという酪農家同士が企業と連携して飼料の供給シェルキングを行えば経営ができれば、シェバシを行えば経営が変定し、新規就農企業のよりも略農家と地域が正さいくことが必要であると思います。これから関係であるととが必要であると思います。これが必要であると地域が連携していくことが必要です。

現状として、日本の畜産業は女性が活躍できる場が少ないと思います。女性の良さでもありますが、気配りができることで良い環境で牛を飼育でき、良い経営ができるとニュージーランドで学びました。日本でも女性が経営する立場になることで女性目線の新しいビジネスをすることができるのではないかと思います。日本でもニュージーランドのように酪農の分野で女性が輝ける場所が必要なのではないかと思います。



#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

私は農業系大学に進学して、畜産についてもっと深く 学びたいと思っています。また、機会があれば海外に 留学して広く世界の畜産や酪農について学びたいと 思っています。

私は将来、畜産技術者になり、得た知識を生かして家 畜の育種改良をしたいと考えています。新規就農を考 えている人に対して、畜産業、保健衛生、設備技術な どに関することをアドバイスし、経営が安定するよう にサポートしていきたいです。また、人工授精師や受 精卵移植師、削蹄師の資格を取り、地域の農家さん に頼ってもらえる存在を目指して頑張っていきます。 可能であれば、1次産業から6次産業までの連携によ り地域の農林水産物を活用した加工品の開発などの 食分野で新たなビジネスを創出し、地域発展にも貢 献できる人になりたいです。

## 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

日本では新規就農は難しいと思っている人が多いと思います。酪農家や畜産農家になる夢を諦めて欲しくないです。ニュージーランドにはシェアミルキングという制度があります。この制度は新規就農を考えている人にとてもいい制度だと思っています。考え方によっては始めやすいと思うのでぜひシェアミルキングについて学んでみてください。また、ニュージーランドは「男性にできるなら女性にもできる」という考えがあります。強い心を持って畜産業を目指してください。

39



#### 畜産アンバサダー

岩手県立遠野緑峰高等学校 生産技術科 2年

佐々木 美咲姫

#### 1. テーマ

畜産の担い手(農家を育む政策)

#### 2. キーワード

補助金

#### 3. キーワードの繋がりと考察

畜産の担い手というテーマで補助金について考えたとき、最初は日本では沢山の補助金の制度があるのでニュージーランドでも同様の制度があると思っていました。きっと、日本と同じような課題を抱えているのだろうと想像していました。そして、酪農大国ニュージーランドでは、どのように課題に取り組み、どのようなお金の使い方をしているのか知りたいと思いました。また、補助金について日本とニュージーランドの違いをみつけようと思いました。その違いが、自分が畜産業に関わった時のヒントにつながるのではないかと考えながら研修に参加しました。

実際にニュージーランドで研修をして、ニュージーランドには酪農に関する補助金の制度が無いということを知ったとき、私はとても驚きました。

ファームステイ先のデビィさんや多くの酪農家さんにインタビューをした際に「補助金は必要ですか?」と尋ねると、私の予想に反して全ての農家さんが「いらない」と答えました。さらに理由を尋ねてみると、「自分で始めたビジネスだからお金には頼らない」と誇りを持って答えている姿に胸を打たれました。これらのことから、ニュージーランドで酪農はビジネスとしてきちんと成立していて、国全体として上手い儲け方を実践しているのだと感じました。

日本では沢山の補助金制度がありますが、ニュージーランドでは補助金の制度はありません。しかし、様々な対策が実践されています。例えば、「シェアミルキング制度」や「ヤングファーマーズ」などです。どれも、日本流にアレンジして取り入れることが可能な制度ではないかと思いました。沢山の補助金制度があっても日本では課題が山積みな現状を考えると、日本の補助金制度はあまり生かされていないのではないかという疑問を持ちました。これは、畜産業界だけでどうにかするのではく、酪農経営者だけで頑張る問題でもないと思います。その背景にあるものや周囲と上手に連携し、

ニュージーランドのように国としてもっと畜産(酪農)を 大切にできる経営を進めていくことが、これからの日本 の畜産には必要なことだと考えました。



#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

とにかくスケールが大きくて驚きの連続でした。私が 知っている畜産や農業とは全く違うものを見ている気 分になることも正直ありました。そして、農業に携わっ ている人たちがとても輝いて見えました。日本では、 農業はマイナスな3Kのイメージが強く、後継者は農家 の長男という考え方が一般的で本気で農業を志す非 農家の人は一から立ち上げなければならず新規参入 がとても難しい環境だと思います。ニュージーランド では、農業を国として大切にしていて、偏見もほとん どないように感じました。女性は男性と平等であり、 男性も働けるから女性も働ける!という意識の高さを 感じました。研修先のホストファミリーは笑顔が途切 れることなく、心から酪農を楽しんでいる姿が印象的 でした。また、牛が大切にされていて、とても機能的 で洗練されたビジネスに感じました。ホストマザーは ファザーの良きビジネスパートナーとして牧場経営に 積極的に関わり、一緒に経営している姿に同じ女性と して憧れを抱きました。今ある現状に満足することな く、常に上を目指し、1人ひとりが高い目標を持ち努 力している姿に感動しました。今回のプロジェクトに 参加した私たちが同じように情熱を持ち、これからの 畜産業を変えていかなければならないと感じました。 そして、日本の畜産業がさらに活発になるように頑 張っていきたいと考えました。





#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

ひとつは、ニュージーランドの制度など日本とは異なる 部分を広められたらと考えています。特に興味を持っ た「シェアミルキング制度 | や「ヤングファーマーズ | について広めたいです。今の日本の酪農に関する制度 のヒントになるものがあるような気がしたからです。も うひとつは、男女平等な畜産業を広めていきたいと 思っています。日本は高齢化が進み、昔の考え方を貫 く農家が多く、畜産業が停滞しているように思いま す。そして、日本の農業、畜産業で活躍している女性は まだまだ少ないように感じています。地元で表に出て 活躍している農業関係者が男性ばかりだからそう感 じるのかもしれません。どこの農家さんに行っても、 女性も経営に携わって一緒に働いて本当は活躍してい るのに、あまり表に出ていない気がしています。ニュー ジーランドでは、女性も男性と一緒に最前線で活躍 し、女性が活躍できるよう牧場や施設には様々な道 具やシステムが導入されています。



ロータリーパーラーのような大型搾乳機をはじめ、省力化や時間短縮、人件費やコストの削減を目的とした機械化も進んでいます。女性が酪農をするためには、そういった機械化は大切なことだと考えます。そういった制度や環境がもっと整えば、私たち女といった制度や環境がもっと整えば、私たち女ともならと思います。そんな女性たちが、もっと表に出て畜産の魅力と増えると思います。そ、して、ニュージーランドのホストファミリーのように、と女性が共に経営パートナーとして、心から楽して、監農を実践できるようになることが、私が考える女性が活躍する理想の畜産業の姿です。

42



#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

日本の畜産業を支える人材になることが今の私の夢です。今回の研修を通して、畜産業には様々な活躍の場があるということを学びました。そして、将来は家畜人工授精師の資格を取り、酪農家のみなさんに信頼してもらえる技術者になりたいと考えています。今はそのための勉強ができる進路を考えています。最終的な目標は、お金を貯めて自分の牧場を持つことです。そして、この研修で学んだことを生かした酪農経営をしたいです。非農家出身の私にとってはかなり困難な道かもしれませんが、畜産に関する知識と技術をさらに深め、牛への情熱を忘れずに、県および日本の畜産業に貢献できる人材になれるよう頑張りたいと思っています。

## 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

「私は畜産が、牛が大好きです」これだけは胸を張って言えます。この研修に参加してその気持ちはさらに高まりました。新しいことに挑戦して良かったと心から思っています。畜産は女性には難しい、できないと思っている人がいたら、それは本当にもったいないことです。女性だからこそできることが沢山あります。牛を愛していれば、性別は関係ありません。女性であっても何にでもチャレンジすることができると思います。未来の畜産業を支える一員として一緒に頑張りましょう!

6. 参加者の報告



#### 畜産アンバサダー

宮城県農業高等学校農業科2年

岩間 ほのか

#### 1. テーマ

ビジネスとしての畜産(攻めの畜産)

#### 2. キーワード

A2ミルク

#### 3. キーワードの繋がりと考察

NZは日本とは違った視点をもって、ビジネスとしての 畜産を行っているのではないかと興味を持ちました。 そして、新たなる種類の牛乳のA2ミルクがNZで注 目されていることを知りました。牛乳に含まれるタンパク質(カゼイン)にはA1とA2があり、お腹がゴローしにくいといわれるA2の牛乳を牛が生産してくれます。生産者には高付加価値がつくというメリットがあり、消費者にも品質の良い安心な牛乳が飲めるというメリットがあると思いました。そこで、A2ミルクの生産・流通の実態を知りたいと思いました。そして、日本でもA2ミルクを生産できれば、魅力がもっと多の人に伝わって日本の酪農のビジネスが活性化するのではないかと考えました。

日本では酪農家でもA2ミルクのことを知っている人はほとんどいないのに対して、実際に研修に行ってお話をお伺いしたNZの酪農家は全員A2ミルクについて理解していたことに驚きました。また、A2の牛かどうかを確かめる遺伝子のテストを実施していました。ジャージー牛の90%がA2の牧場もありましたが、NZではまだA2ミルクにプレミア価格がついていないため、生産段階までは踏み切っていないという牧場がありました。

しかし、NZ中の生乳を集荷しているフォンテラ社が、 今後、A2ミルクに1L当たり2NZドル(約140円) のプラスの乳価をつけるという計画があるため、多く の酪農家はそれに備えて、A2の牛だけで繁殖するな どしていました。NZは乳量よりも乳質が重視された 取引(MS)のため、このように乳質を改善する牛群 改良に積極的に取り組んでいるのだと思いました。

日本でも、A2ミルクの生産は可能だと研修を通して感じました。乳量の多いホルスタイン種と、A2の遺伝子を多く持つジャージー種を掛け合わせることでできるNZの品種「キウイクロス」を取り入れてみてはどうかと思いました。日本は乳量を重視した改良を続

け、牛が短命になっている問題がありますが、NZのような長命で生乳に付加価値のある酪農を目指すことで、新しい道が切り開かれるのではないかと思います。まずは生産者・消費者共にA2ミルクの認知度を上げる活動が必要です。また、A2ミルクを生産する酪農家や組合、メーカー、企業同士が連携することで、チャレンジするのにもリスクは少なく、安定した供給もできて、畜産業が豊かになると思います。



#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

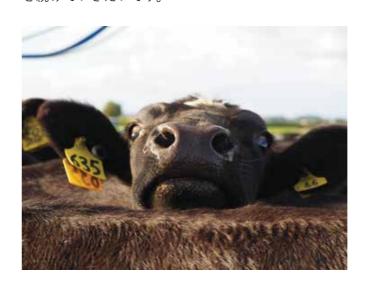
日本とNZでは生産者も消費者も酪農・乳製品に対する 意識が全く異なっていました。生産者は大手乳業 メーカーフォンテラに信頼を寄せ、安心して生乳を 売ることができていました。日本では牧場に加工場 を持ち、オリジナルの牛乳を作っている所もありま すが、NZではただ動物が好きという想いで酪農業 を営んでいる方が多く、自分の牛乳を特別に売り出 したいという想いはあまりもっていないようでした。 しかし、NZの牛乳売り場には多数の種類が並んで おり、乳脂肪分別のもの、オーガニックのもの、殺菌 方法が違うものなどがありました。フォンテラ社が 農家からまとめて買い取った生乳を独自に加工する ことで、消費者のニーズに合わせた質の良い牛乳 を、安定して供給できているのだと考えました。NZ ではバターやチーズなどの乳製品の消費も多いた め、生乳の需要も自然と高まっていると考えました。 さらに、年中、放牧されて育ったストレスフリーな牛 の乳質の良さは世界にも認められ、乳製品の輸出に より利益を生み出し、フォンテラ社が躍進していくと いうよい循環が成されていると考えました。NZの 牛群改良による付加価値のつけ方、リスクに備えた ビジネスのやり方は、日本の風土に合わせつつ、取 り入れていきたいと思いました。

#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

収益を上げるために、乳量ばかりを求めるのでは牛に 負担がかかってしまうので、A2ミルクという新たな方 法で農家の所得を増やすことができればいいと思い ます。そのためにまずは、日本国内での生産者・消費 者のA2ミルクの認知度を高めることが必要だと思い ます。畜産アンバサダー活動を通して一人でも多くの人 にA2ミルクの存在を知ってもらいたいです。

A2ミルクは加工方法で差をつけるのではなく、資金をあまりかけることなく牛の遺伝改良によってブランド化が図れます。生産に成功すればその地域の活性化にも期待ができます。生産者である農家には、経営が良好になることに加えて、仕事のやりがいや農産物の誇りが生まれます。また、牛乳が合わない体質の消費者のA2ミルク需要が高まれば、国内の生乳供給量の底上げにもつなげられるのではないかと思います。

「男性ができるなら、女性もできる」という考え方を もつNZでは、飼養管理の中でも女性が中心となって 働き、政府の農業系の職員、獣医などでも多くの場面 で女性が活躍していました。家族・家畜への愛情、思 いやりをもつ女性ならではの視点で、畜産業を引っ 張っていく頼もしい方が多かったです。経営面では責 任感を持ちながらも、常に新しいことにチャレンジし ていこうというポジティブな姿勢がみられました。女 性酪農家同士のネットワーク、イベントが充実してお り、日本でも未来の担い手を育み畜産業を発展させる ために、もっと女性が参入していくべきではないかと 思いました。男性と女性で何でも平等に仕事を分担 すれば、余裕のある酪(楽)農ができると思います。日 本で女性が胸を張って酪農を営める、そんな社会にし ていくためにも、この畜産アンバサダーとしての活動 を続けていきたいです。



#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

酪農業界を活性化させて、日本の牛乳・乳製品を子供からお年寄りまで多くの消費者に届けたいという想いがあります。日本の酪農の現状や知識を学び、常にアンテナを張って、新しいことにチャレンジしていきたいです。将来は、牛乳の販路を拡大するために高付加価値なチーズやヨーグルトなどの乳製品をつくり、生きえています。今後の学校生活では、学校の牛乳と地元の特産物を使った商品開発を行い、地域に貢献していきたいと思います。また、これまでの考え方を覆ような魅力が酪農にはあることも共に発信していきたいです。そんな中で、私自身も女性の酪農従事者として成長できると考えます。

## 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業は家畜の声、消費者の声に耳を傾けることが 大切だと思います。生産者ひとりでは決して成立する ことのない、つながりが密な産業です。動物福祉を常 に意識し、消費者にとって安心・安全なものを届ける ことが大きな信頼につながると思います。なにより、 自分自身が楽しんで仕事をすることが、更なる可能性 につながります。やってみたいと思ったことはリスクを 恐れず挑戦してみてください。一歩踏み出せば、周り の人も勇気づけられるかもしれません。





#### 畜産アンバサダー

宮城県加美農業高等学校 農業科 3年

上野 璃桜

#### 1. テーマ

畜産の担い手(農家を育む政策)

#### 2. キーワード

うまいもうけかた

#### 3. キーワードの繋がりと考察

畜産の担い手というテーマについて考えた。ニュージー ランドでは若い担い手や女性が酪農で活躍できること を知った。ニュージーランドでは採算性の高い経営が できており、私たち風に言えば"うまいもうけかた"があ るため酪農を積極的に担う人が多いのではないかと推 測し、このキーワードを設定した。

しかし、実際は、お金のために酪農をしているのではな くライフスタイルの一部として酪農をしている人が多 かった。また、新規で始める場合、酪農の始め方が段 階化されており明確であることが分かった。他に、乳価 にも偏りがあるので、乳牛だけ飼育するのではなく肉牛 も複合的に飼育する工夫があった。

日本に反映させるべき点としては、より確実で実現可能 な新規酪農参入のシステムを作り、誰もがその情報を 共有することだと考えた。ニュージーランドのように シェアミルキングの制度を広め酪農に対する考え方を 変えることが大切だ。

#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

ニュージーランドの酪農は日本の酪農と違い、コスト 削減がされている面が多くあった。例えば、放牧酪農 がメインなので粗飼料を多く食べ濃厚飼料にかける お金が少ないこと。牛が餌を求め歩くことで削蹄をす る必要がないことなどである。さらにプラス面として 新規酪農の始め方が明確であった。特に、シェアミル キングの制度は日本でも活用すべきだ。日本には高齢 農業者が多く、跡継ぎを身内から探す人が多い。だ が、身内が跡を継ぐことがない農家さんは酪農を辞め る結果になっている。しかし、ニュージーランドのシェ アミルキングのように新規参入者を後継者のいない酪 農家や放牧地、酪農施設となりうる土地の所有者とつ なぎ合わせることで酪農を次世代に広めていけると考 えた。だが、マイナス面として飼育頭数が多いがため に日本ではできている個体管理が難しいと感じた。ま た、ファームステイで搾乳体験をした際には日本のよ うな消毒などの工程がなかった。放牧酪農をすること で綺麗な状態であると話していた。実際、体細胞数な どが低いことも結果として表れている。しかし、私は 衛生管理の面について日本は徹底していると改めて感 じた。

日本にもニュージーランドにもプラス面とマイナス面 があった。私は、現地で見たことをモーモースクール などで伝えることにより多くの人に酪農を伝えられる と感じた。



#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

高校から始まった私の酪農は、最初から楽しいイメー ジで始まったわけではない。きつい、汚い、臭いの、3 Kのイメージを持って始まったのだ。だがそれは、 ニュージーランドでも同じで、酪農を体験する前は誰 でも3Kのイメージがあるそうだ。しかし、実際に牛と ふれあい、搾乳や管理をしてみると達成感や喜びを感 じることで悪いイメージが薄まっていくのだ。「チャレ ンジしてみて!|私が英語を話せずもどかしく感じてい たファームステイで言われた言葉だ。ニュージーランド での研修が始まったのは「挑戦する」ことの大切さを

知ったことで始まったと思う。何事も挑戦から始まると いう考え方をたくさんの人に広め、5感を使うというと、 そして酪農のことにもさらに興味を持ってもらいたいと

挑戦するということはとても勇気がいることだ。チャレ ンジできる場を作る側の人間も大切だ。常にお互いの ことを思い、共に成長しあえる世の中を作ることを最も 広めるべきだ。



畜産に興味がない人や動物が嫌いな人でも触れる機会 があれば興味が持てる。チャレンジした人たちが担い 手になり、日本の畜産がこれからも持続的に行われる と考える。

ニュージーランドでは「男性ができるなら女性でもでき る | という強い言葉を聞いた。そのような考え方を男女 が持つようになればいいと考える。そうした上で畜産の 世界でも、男女の特性から仕事を分担するのではな く、お互いにやりたいこと、できることなどの適正をしっ かり主張しながら、受け持った仕事に達成感が持てる といいのではないかと考える。お互いを尊重して活動す るということを広めていくことで、女性が活躍できる畜 産現場が増えると感じる。

#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

本校で取り組んでいる酪農教育ファームとしての活動 の中で、ニュージーランドでの体験を踏まえて畜産の 魅力を伝え、畜産のイメージを良くし多くの仲間を作 りたい。また、今回学んだチャレンジすることを、後輩 へ引き継ぎたい。

将来的には、日本でもニュージーランドにならって新 規で酪農を始められるよう自分なりに努めていきたい と思う。SNSや講演会を多く開催することで、新期就 農者が農業を始めるきっかけを作っていきたい。ま た、新期就農者だけでなく跡継ぎの問題などで酪農 などを辞めようと考えている人などを集めシェアミル キングの制度について話し、土地の有効活用と就農 者の増加の両方が日本でも進んでいけばいいと考え る。また私自身も酪農を行いながら、その制度の仲介 をする組織を作りたいと考えている。

#### 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちに メッセージ

畜産農家は男性の力が必要という認識はあるが、性 別や能力に関係なく本当に畜産を目指そうと思えば 酪農家になれる。このことは農業や畜産に興味を持っ ている女子の後輩に特に伝えたい。そして私が研修を 受けて最も学んだのは自分の夢や目標は、挑戦しな いで終えるより挑戦をして失敗することで学ぶことが できるということ。現在の日本畜産の現状は決して明 るいものだけではない。これから畜産業を目指す私た ちは何よりも挑戦し、視野を広く持ちながら学んでい かなければならない。



## 参加者の報告



#### 畜産アンバサダー

栃木県立宇都宮白楊高等学校 農業経営科 3年

#### 1. テーマ

ビジネスとしての畜産(攻めの畜産)

#### 2. キーワード

放牧

#### 3. キーワードの繋がりと考察

私はビジネスとしての畜産というテーマで放牧につい て考えた。最初はニュージーランドでは放牧が有名だ ということしか知らず、土地が余っているから放牧を 行っているのだと考えた。そこで、私はなぜ放牧を 行っているのか、放牧のメリットデメリットを知りたいと 思いキーワードを放牧にした。そして、ニュージーラン ド研修に参加し、自分で見て聞いて確認したところ、 放牧のいいところを日本でも生かせたらと思った。

体験的にニュージーランドの酪農に触れたところ、ビ ジネスとしての畜産や放牧に対しての私自身の考えを 超えていた。ビジネスの面では、フォンテラ社という乳 業会社に出荷した方が効率的であり、酪農家一人ひと りがフォンテラ社の組織の一員という意識からフォン テラ社に出荷する酪農家の方が多く、個人的に6次 産業化を考えている人は多くはなかった。



日本で放牧を生かすには、約42万3千haある耕作 放棄地を利用するべきだと思った。そして、土地の気 候や耕作放棄地の広さに見合った頭数と牛の品種改 良を実施することで飼養管理がしやすくなるとも考え

る。また、我が国の酪農経営形態は、個人経営が主と なるが、ニュージーランドは、オーナー経営、コントラ クトミルカーにシェアミルキングがある。私は、この シェアミルキングを日本に導入するべきだと考える。 シェアミルキングは、放牧や畜舎内で飼養管理をした としても報酬は、オーナーとの交渉で決定するため積 極的な経営戦略を考えることができると同時に畜産 業への情熱を日々の飼養管理に見いだすことができ る。資産である牛舎と牛を持っているオーナーと雇用 経営者が協力することで、離農者も減少するのではと 考えた。

#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

ニュージーランドは放牧地がとても広く、1つの放牧 地に複数の品種の牛が一緒に飼養管理されている酪 農家の方が多くいた。そして、1か所における飼養管 理頭数も多いため、糞尿による窒素汚染で近隣の河 川が汚れてしまうなどの環境問題もあった。しかし、 川から5m離れた場所に植樹やフェンスを張り、河川 に汚水を流出させない工夫と汚水を土壌ろ過すること で糞尿問題対策をしていた。日本とは違い、生産性だ けでなく環境問題にも目を向け持続可能な酪農を目 指していると思った。また、ニュージーランドは、環境 問題対策の延長にあるこの植林活動における補助金 はあるが、生産に関わる補助金が無いことに驚いた。 そして酪農家は、補助金を必要としているのかと思っ たが、生産性における補助金を要望はしていなかっ た。日本では、補助金に頼り機材を購入し、畜舎を建 設するが、ニュージーランドでは補助金を必要とせず オーナーが自ら経営戦略することで工夫し酪農を営ん でいることがすごいと思った。



また、ニュージーランドでは、オーガニックにこだわっ ている農家の方が多いと思った。科学的な抗生物質 を使用するのではなく、植物が持つ効用を利用した オーガニック飼養管理をしている農家の方もいた。 ニュージーランドの雇用は、酪農で女性の活躍が目 立っていた。 酪農家のうち約50%の経営者は女性だ と説明を受けた。私は、女性にしかない強みがたくさ んあることを学んだ。日本とニュージーランドの酪農 は、環境対策を考える牛の飼養管理からオーナーと の協同経営の仕方まで全然違っていた。

#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私は、自分のキーワードとしてきた「放牧」のメリット を伝えていきたい。日本は、放牧の割合が低い。しか し、放牧にはたくさんのメリットがある。特に、私が放 牧のメリットと考えたことが3つある。1つ目は、安く 牛乳を生産することができるところだ。牛は、草食動 物である。草を食べ、乳を生産し、糞尿を土に返すこ とで肥沃な土壌を作り上げる。すると、ミネラルの多 い草が育つ。土壌の栄養が循環しているのだ。更に、 自然の恵みである草を得ることで費用を抑えられる。 そのため、畜舎建築の資金を得るだけでなく飼養管 理における建物が抑えられるのだ。日本でも、放牧を することで補助金に頼る飼養管理が減少し、牛に必 要な機材を購入する資金に使用することになるかもし れない。2つ目は、自分自身のライフスタイルが充実 することだ。飼養管理に時間を費やし疲労が蓄積さ れると良い考えも浮かばないだろう。餌をあげる手間 やフンの処理を省くことができれば、自分自身の時間 を増やすことで新たな角度で牛たちを見ることができ ると考える。更に、臭い、汚い、きつい作業と言われる 3 Kを払拭したい。

そして、経営形態を放牧にすることで、拘束時間が短 く賃金を高くし、担い手不足を解消したい。3つ目に 伝えたいことは、女性だからこそ細やかな清掃に子育 てのように子牛を育てることで酪農において女性が活 躍できることを伝えていきたい。研修で得たことを生 かし、日本で酪農をしている女性や酪農家を目指して いる女性を勇気づけたいと思う。

#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

ニュージーランド研修に参加するまで、私は自分自身 の進路を決めかねていた。参加したことで私は、自分 自身の将来を思い描くことができた。将来、私は動物 の病気の治療法や予防法を遺伝子から解析すること で健康な状態の家畜も将来の病気を見据えた飼養管 理方法をすることで、より長く生産性を増すための飼 養管理方法を確立したいと考える。健康な家畜だから

こそ、よい生産物を生産することができると考えるから だ。今回の研修は、畜産の勉強を通して食料として命を 人間に捧げる家畜がいることを知った。だからこそ、こ のような家畜を助けてあげたい。そして、日本の畜産業 に貢献したいと強く考えた。

#### 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちに メッセージ

日本の酪農は、臭い、汚い、作業がきついの3Kの イメージが強いと思う。しかし、飼養管理を工夫すれ ばこの3 K のイメージもなくなるのだなとニュージーラ ンド研修で学ぶことができた。だからこそ、自分自身 の工夫と畜産業への情熱で、「畜産は楽しい、やりが いがある | と感じられると思う。 作業の厳しい部分に 目を背けず、楽しいと思えるところをたくさん探してい きながら日本の畜産を盛り上げていきましょう。



6. 参加者の報告



#### 畜産アンバサダー

群馬県立勢多農林高等学校動物科学科3年

#### 鈴木 美香

#### 1. テーマ

ビジネスとしての畜産(攻めの畜産)

#### 2. キーワード

ニュージーランドの乳業経営戦略

#### 3. キーワードの繋がりと考察

ビジネスとしての畜産というテーマでニュージーランドの乳業について考えたとき、最初は酪農が盛んなため、乳量が多いから儲けているのだと思っていました。そこで儲かっているニュージーランドと日本の経営を比較し、日本の6次産業化は儲かるために良い方法なのか、乳製品の不安定な供給や乳製品の自給率低下は改善できるのかを学ぶことで、日本の酪農や乳業の改善に貢献できると考え、NZの乳業経営戦略をキーワードにしました。



ニュージーランド最大手の乳業会社であるフォンテラでは、輸出が8割のため長持ちする乳製品に加工シリッドで取引されており、粉末状で保存しているため持まいた。まルクソリッドでの取引をすることで、使わない世紀がよく、安定した乳製品の供給が実現できれているがよく、安定した乳製品の供給が実現できれないではお金を払わない戦略的な面も知ることががたりにお金を払わない戦略的な何加価値を付けたまりによっまで、一方に大きないで、で、その理由として、約8割の農家さんが生乳生産により、その理由として、約8割の農家さんが生乳生産により、その理由として、約8割の農家さんが生乳生産により、その理由として、約8割の農家さんが生乳生産によりによりによりなどの理由からフォンテラに出荷していました。

49

日本の酪農や乳業を改善するためには、まず、粉末状での保存を取り入れるべきだと考えました。飲用生乳以外の乳製品製造時に粉末状での保存を取り入れることで長持ちするため、量を調節しながら乳製品を作ることができます。そのため、近年、問題になって製品を作ることがなくなることがなくなり、安定した供名が可能になります。また、粉末状から作られるニューが足りなくなることがなくなり、安定した供名が可能になります。また、粉末状から作られるニュージーランドの牛乳は保存が利き、濃にした。実際にクラスメートに飲んでもらったところ、全員が生乳よりおいます。と答えていました。以上の理由から粉末にすいると答えていました。以上の理由から粉末にすいます。と思います。



#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

私がニュージーランドに行って、日本とは大きな考え 方の違いがあることを強く感じました。それは負担を 増やしすぎずプライベートも大切にする考え方でし た。ニュージーランドでは、日本で搾乳時に行われて いる前搾りや乳房拭き、ディッピングを行っていない 農家が多く、最初は驚きましたが、放牧のため常に空 気が良い状態だということや、牛にとってストレスの少 ない生活が送れていることなど、日本では実現が難し く、良い環境で酪農ができるニュージーランドだから こそ行えることだと思いました。また、牛への負担を感 じたら搾乳は1日1回にするなど、日本より負担の少な く自由がある無理のない酪農が行われていました。ま た、日本では6次産業化する動きが増えていますが、 ニュージーランドでは乳製品を作るのに特化した フォンテラに任せた方が良い、ライフバランス的に酪 農以外の仕事は増やさないなど、自分に合った仕事 量で上手にプライベートと両立させる考えを持つ方が 多かったです。以上のような考え方で酪農をしていけ ば、日本の酪農も今よりも更にやりやすく、負担が減ることで持続可能な酪農に近づくと考えました。

#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとして、日本に酪農の魅力やニュージーランドの考え方の違いを広めていきたいと思います。酪農の魅力はたくさんあり、自分のペースで作業ができることや、自然がある所で仕事ができることや、自然がある所で仕事ができること、手をかければかけた分だけ牛は応えてくれて収こと、手をかければかけた分だけ牛は応えてくれて収こたもつながるため、やりがいがある仕事だということ等、酪農のたくさんの魅力を知らない人や、酪農や動物に興味を持っている人に、楽しい職業であると思っているようなアンバサダー活動をしたいです。また、酪農を知っている日本の農家の方々にもニュージーランドの負担が少なく、ライフバランスに合った楽しい酪農を伝えたいと考えています。

この活動をすることで、酪農の良さを理解している日本 人が大幅に増え、酪農という仕事に対する不透明さが 薄れると思います。また、酪農について一つでも知って もらうことは、未来の酪農を盛り上げていける大きな一 歩になります。更に酪農の3Kのキツイというイメージ は、日本人の仕事に対して真面目過ぎる性格が故につ いてしまったものだと考えられます。そこでニュージー ランドの酪農スタイルを伝えることで、酪農家の負担軽 減や、キツイというイメージの払拭、酪農を楽しむ余裕 につながり、より良い酪農になっていけると思います。 また、女性の立場からニュージーランドの酪農を知り、 日本の過剰な女性扱いや男女差別の考え方は気持ち が悪いことに気づきました。子育てをしながら働くこと は可能であり、酪農場のオーナーが女性なのは普通の ことです。得意なことは得意なほうがやれば良い、男性 にできることは女性にもできる、この考え方を持った酪 農をしていくことは、私にとって気持ちの良い理想の酪 農です。そんな酪農に近づけるためにもアンバサダー活

#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

動や、この先の学習を頑張っていきたいです。

私は、興味を持っている牛乳や乳製品について大学で学習していき、乳業関連の企業や研究所に就職したいと考えています。そして、ニュージーランドで学んできたことや、これまでの学習を生かし、日本の酪農や乳業のさらなる発展に貢献していきたいです。また、女性が活躍できる世の中にしていくために、私から率先して乳業の方面から行動を起こしていきたいと考えています。そして将来的には、現在薄れてきてもまった食と農のつながりを強く結びつけ、食べ物は農家の方々が大事に育ててきた命であることを改めて感

じてもらえるような商品開発を行い、乳製品から酪農 や畜産を盛り上げていける人材になりたいです。

## 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業は現在衰退しつつあるといわれています。 しかしこれからの酪農を変えていけるのは私たちです。酪農をどこまで楽しい職業にしていけるか、酪農 の可能性をどこまで広げていけるか、一緒に挑戦していきましょう。そして、力を合わせて日本の畜産業を 更に盛り上げていきましょう。



## 参加者の報告



#### 畜産アンバサダー

埼玉県立川越総合高等学校 総合学科 3年

#### 1. テーマ

家畜や自然のための畜産(アニマル ウエルフェア)

#### 2. キーワード

運動と健康

と考えた。

#### 3. キーワードの繋がりと考察

家畜や自然のための畜産というテーマで運動と健康につ いて考えたとき、最初は人間にとって運動は、健康維 持に欠かせないものだから、牛にとってもそれは同じ だろうと思った。具体的には、免疫力や抵抗力が高く なって、病気にかかりにくくなったり、太りすぎを防い だりすることだ。一方で、疑問や不安に思うことも あった。それは、放牧がメインになるということは、餌 のメインも牧草になるということで、運動量に対して、 エネルギーが十分に供給されているか、運動によって 乳量が減ったり、乳脂肪分が下がったりするのではな いかという二点だ。つまり、適度な運動が大切なので はないかと思った。

くなり繁殖力が高くなること、放牧地を歩くことで自 然と蹄が削れ、削蹄の必要がないことを学んだ。 繁殖力の高さについては、足腰が強くなることで種が 付きやすくなったり、放牧によって体力がついたりする ことが要因だと考えた。基本的にフラットな地形での 放牧が多かったが、場所によっては山ともいえるよう な丘で放牧している所もあった。そのような場所での 放牧は、牛への負担が増えたり、蹄の削れ過ぎや、割 れにつながったりしている。そのため、エアシャーや ジャージーのような小型の牛が目立った。ホルスタイ ンに関しても、ジャージーとかけ合わせをしていたり、 ホルスタイン自体が、日本よりも小柄に見えたりした。 このように、放牧によっては牛への配慮が必要になる

実際にNZで研修をして、放牧による運動で足腰が強

日本は森林が多くて放牧に向いた土地が少ないうえ、 人口が多くて乳量を必要とするので、NZのような完 全放牧は向いていないと思った。しかし、完全つなぎ 飼いも、牛の健康を考えると良くないと思う。定期的 に牛を運動させる必要があるだろう。放牧のような運 動をさせるスペースがないのであれば、飼料中の粗飼 料の割合を増やしたり、牛舎の掃除を念入りにしたり するのが有効だろう。そうすることで、代謝病を減ら したり、蹄の腐敗を防いだりすることができる。また、 NZのように小型の品種を導入することで、牛がストー ル内でもある程度ゆとりを持てるようにするのも一つ の手だと考える。



#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

NZで様々な農場を訪問させていただいた。そこで感じ たことは、牛も人も生き生きとしているということだ。 訪問させていただいた酪農家の多くは、シェアミルキ ングによって土地を借りていたが、将来は、オーナー になりたいという、明確な目標を持っていた。また、ど この酪農家もオーガニックやA2ミルクなどの生産を 意識しており、新しいことへの挑戦が積極的だった。 さらに、NZでは農家が直接利用できる補助金がな かったが、そのことに不満を言う人はいなかった。その とき、NZの酪農家はとてもたくましいと感じた。NZ の酪農家がこれほどまでにも生き生きとしていて、た くましいのは、酪農という仕事が国を代表する産業で あったり、多くの希望が存在したりするからだと考え た。酪農を仕事として捉えず、ライフスタイルの一部だ と語る彼らは、本当にかっこ良かった。また、人が楽 しく働いていれば、牛もそれを感じると思う。日本の 農業界でもこのような考え方が広まっていったら素敵 だと考える。



#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私は、畜産アンバサダーとして、畜産という仕事は、希望 に満ち溢れているということを広めていきたい。今の 日本は、少子高齢化によって働き手が減る一方だ。そ して、畜産業は3Kと言われている。このままでは、日 本の畜産業界は、深刻な人手不足になってしまう。私 は畜産業に対するマイナスイメージを、プラスに変え ていきたいと思う。例えば3Kの内の一つ、「汚い」だ が、家畜の糞尿は、決して汚くはない。むしろ、家畜の 糞尿は資産である。排水池に貯めて、有機分解を進め ることで、質の良い肥料に生まれ変わらせることが可 能だ。舎飼いならば、舎内の掃除を定期に行うことで、 舎内の環境をきれいに保つことができるだろう。また、 飼育環境が清潔であれば、病気の発生を防ぐことも できる。清掃作業は大変な作業かもしれないが、その 一手間によって、省ける手間があることを伝えたい。 畜産業に対するイメージが、プラスに変わることで担 い手が増えれば、日本の畜産はさらに発展できると思 う。よく、日本の畜産は、他国と比べて劣っていると耳 にする。家畜福祉が行き届いていないと言われる。し かし、日本の畜産にも素晴らしい部分がある。例え ば、限られた土地で、いかに多くの乳を得るか。肥育 方法を変えることで、いかに柔らかくとろけるような肉 を生産していくかなどの技術だ。そこに新たな担い手 による、新しい考えが加われば、日本の畜産は良い方 向に進んでいくと思う。

今、農業女子が増えており、畜産業を営む女性も増え ている。女性がそこで活躍するには、女性でも扱いや すい機械の導入、妊娠や出産、育児に対するサポート 体制の充実などが必要だと思う。そして、何よりも大切 なのは、男女関係なく畜産という仕事を楽しく行える 環境づくりだと思う。



#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

私は将来、畜産家として生産に携わっていきたい。 しかし、今回のNΖ研修でNΖの畜産を目の当たりに し、外国の畜産にも興味が湧くようになった。そして、 日本の畜産を外国の人々に知ってもらいたいと思うよ うになった。日本の畜産を外国にも知ってもらうこと で、日本の畜産の良い点と悪い点がより明確になると 考えたからだ。そうすることで、日本の畜産はさらに 活気づいていくと思う。そのために、私は大学へ進学 するつもりだ。そこで、生産技術や家畜について学ん だり、家畜人工授精師の資格を取得したりしたい。さ らに、外国人を相手に活動していきたいと考えている ので、英語についても学びたいと思う。私は、生産者 として働きながら、日本の畜産を世界に伝え、発信し ていけるようになりたい。

#### 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちに メッセージ

畜産は休みが無く、力仕事が多いのに、儲けが少ない というイメージがあります。しかし、私と同じように畜 産を目指す仲間がいることはとても心強いです。牛が 好きだから。牛乳や肉が好きだから。畜産を目指した きっかけは何でも構いません。しかし、「畜産が好き」 という気持ちは忘れないで欲しいと思います。その気 持ちが、日本の畜産を後押しさせると思っているから です。そして、新しいことへの挑戦を恐れないで欲し いと思います。様々なことを体験することで、自分の 世界はがらりと変わります。私がそうだったように。



## 6. 参加者の報告



#### 畜産アンバサダー

筑波大学付属坂戸高等学校 総合学科 3年

#### 安江 日向子

#### 1. テーマ

家畜や自然のための畜産(アニマル ウエルフェア)

#### 2. キーワード

アニマルウェルフェアの意識の違い

#### 3. キーワードの繋がりと考察

研修に行く前は、ニュージーランドは動物福祉の考えが日本よりもはるかに進んでいて、生産者・消費者が共に動物福祉の意識をもって畜産及び家畜生産物と向き合っている、といったイメージを持っていた。

ニュージーランドの酪農は放牧が主流であることや、他の畜産業でも日本よりも動物福祉に配慮した生産方法をとっていると聞いていたため、生産者側はそれらの設備等を積極的に使用するよう意識しているのだと考えていた。また、消費者側でも、食品への意識が強く、それぞれがしっかりと動物福祉や生産方法などを理解・把握したうえで選択しているのではないかと考えていた。

実際に現地を訪れ、様々な人の意見を伺うと「動物福祉」を意識して生産を行っている、というよりもそれが「自然」であるから「当たり前」といったとらえ方をしているように感じられた。動物福祉や放牧を「付加価値」としてとらえるのではなく、そうあるべきだと考える国民性が、日本との一番の違いなのではないかと感じた。研修先の農家の方々は皆、自分たちは牛を尊敬しているのだと言っていて、「家畜」「経済動物」と自分たちより下の立場に見てしまいがちな日本に対して、ニュージーランドの人々はより自分と対等な立場で接しているのだということが分かった。

日本では、まだまだ動物福祉の考えが浸透しておらず、生産者側に一切の知識や関心を持たない消費者もけして少なくはないだろう。私は、こういった背景が日本で放牧をはじめとする動物福祉を考慮した商品の需要が低い原因となっているのではないかと考えているため、消費者側に日本の現状などを伝えていくべきだと考えている。また、生産者側にもこのような考え方などを伝えて、アニマルウェルフェアや家畜との向き合い方を考えてもらうことで、ニュージーランドのような、家畜にも人にも優しい酪農が増えるのではないかと考えている。

53

#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

ニュージーランドに研修に行き、何よりも現地の人々のおおらかで、自由で、それでいて自分のやりたいことを堂々とやっている姿が素敵だと感じた。多くの女性が畜産業に携わっていて、みんな生き生きと仕事をでていて自分のテーマとは違ったけれど、女性の畜自身での活躍についてもすごく関心がわいた。自分自身をしていないだとか、厳しいなどといった印象を抱いていたため、とても新鮮で、衝撃的だった。現地の女性は彼女ら自身が自分と男性との差を意識しておらず、堂々としていたため、日本でも女性自身の意識が変わり、自身をもっと男性と対等な立場だと認識できれば、男女格差も改善されるのではないか、と感じた。

また、自分のテーマでもあったアニマルウェルフェアについても、日本との意識の根本的な差に驚いた。私の中では、日本はアニマルウェルフェアに対して「付加価値」としての見方が強くあるように感じていたが、現地ではそのような考えが少ないことが印象的だった。技術や設備がより進んでいると予想していたため、意識やとらえ方そのものに差があることが衝撃的で、日本でも生産者側以上に消費者側に呼び掛けることで、アニマルウェルフェアをより発展させられるのではないかと感じた。



#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私は、日本の消費者のより農業にかかわりや知識のない 人に向けて、今の畜産の現状やアニマルウェルフェア、 ニュージーランドでの経験などを伝えていきたいと 思っている。このような対象を設定したのは、今回の 研修で自分のテーマを考えるうえで、日本のアニマル ウェルフェアでの課題は、生産者と消費者との意識の 差から生じるものなのではないかと考えたためであ る。生産者がどれだけ家畜に優しい生産をしていて も、消費者がそれを理解していなければ意味がない。 実際に、日本のつなぎ飼い牛舎やバタリーケージなど が動物福祉上問題視されていても、消費者はそもそも それを知らないことも多く、付加価値のある農産物の 需要は低いままとなっている。そのため、その需要を 高めるためにも、農業に関わりのない人たちに向けて こう言った情報を伝えていくべきだと考えている。需 要が高まることで、生産者側でもそういった生産に興 味を持つ人も増えるだろう。また、農協などの団体も、 現在では放牧農家は加入できず、新規で始めることは 難しい現状だと聞いているが、需要が増えればこれら に対する注目が高まり、援助などのシステムが作られ るかもしれない。このように、日本のアニマルウェル フェアをより良いものにするためには、消費者側の意 識を変えていくことが一番の近道であると思う。

私の通う学校は、農業高校ではなく総合学科であるため、農業だけでなく、工業、福祉、人文など、様々な分野に興味を持つ生徒が集まっている。そのため、まずは私の身近な学校から、「関心のない人に向けた」アンバサダー活動を行いたいと思う。関心のない人を集めて知識の共有の場を作ることはなかなか難しいと思うが、様々なところで機会を見つけて、こういった活動を行っていきたい。

#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

私は、将来北海道で放牧酪農を行いたいと考えている。ニュージーランドと同じようにとまではいかなくとも、良いところを取り入れてより家畜と自然に優しい形式での生産を行いたい。また、今回の研修を通してニュージーランドや、ほかの日本以外の様々な国の酪農に興味を持ったため、個人的にニュージーランドや、他の酪農の盛んな国での農業留学をしてみたいと考えている。日本だけでなく、視野を広げて自分が本当にやりたい酪農をするためにもっとたくさんの国のやり方や考え方などを知りたいと思う。

## 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

日本での農業及び畜産は、まだまだネガティブなイメージや偏見が多くあるし、特に女性にはやりにくい環境にあると思うけれど、一切そんなことはなくて、たくさんの楽しいことがあるから、むしろ胸を張って堂々とやればいいと思います!ネガティブイメージに左右されず、堂々としていればかっこいいし、楽しめるはず!農業は楽しんだもん勝ちです!お互いに頑張りましょう!



## 参加者の報告



#### 畜産アンバサダー

東京都立瑞穂農芸高等学校 畜産科学科 3年

#### 1. テーマ

女性の活躍できる畜産(ワーク ライフ バランス)

#### 2. キーワード

女性が管理面で先頭に立つこと

#### 3. キーワードの繋がりと考察

女性の活躍できる畜産(ワークライフバランス)という テーマで畜産を仕事にしている女性について考えたと き、最初は日本の畜産の現状について考えていた。日 本は、畜産関係の仕事をするのは男性というイメージ が強いと考えていて、私も畜産に関わっていない家族 や友人に実際に聞いてみた。畜産関係の仕事は、力 を使う面や「きつい・臭い・汚い」と言われる3Kの面 から、男性が多く働いているのではないかという回答 が多くあった。この現状と3Kによって女性が働きにく い環境を作っていると考えた。また、力仕事が多いた め男性と比べて力が弱い女性が働きにくくなっている とも考えた。日本では力仕事は男性の仕事、家事や育 児は女性の仕事というイメージが強いためでもあると 考えた。

実際に研修をしていると、日本とは全く違う考えを ニュージーランドの方は持っていた。男性には女性と 一緒に働く上で心がけていることを、女性には男性と 比べて不便なことを質問したところ、「男性と女性は 公平な立場であるから、女性と男性で比べているとこ ろはない。男性と女性のそれぞれで得意なことを任せ たり、違う方法で補ったりしている」との回答だった。 どの研修先でもこのような回答だったため、ニュー ジーランドの方は男女公平の考えを持っていることが 分かった。作業の様子を見学した際も、男性も女性も それぞれを良いパートナーとして一緒に作業をしてい た。どの方も、楽しそうに作業をしていたのが印象的 だった。

日本は男性が力仕事、女性は家事や育児をするという 考えがあるため、その考えを少しずつでも変えていく ことが必要だと考えている。ニュージーランドでは、 女性が経営している農場や女性が主体となっている 農場が多くあったが、日本ではごく少数である。 ニュージーランドの男女公平という考えを広めるため には、畜産や酪農に関わっている大きな団体や協会

が講演などを行って、世界の畜産や酪農の仕事をする 方の話を聞くことで考えは伝えることができる。実行 に移すことはできなくても、講演の回数を重ねて多く の人に考えを聞いてもらうことができれば良いと考えてい る。また、農場で働く男性と協力して、働く女性が職 場で増えるごとに補助金や仕事道具を支給する仕組 みにすれば女性就農者が増えるのではないかと考え た。

#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

ニュージーランドに行く前に、放牧酪農をしているた め放牧場が多くあるという話は聞いていたのだが、実 際に広大な放牧場に放牧されている羊や牛を見て感 動した。放牧場で自由に寝たり、牧草を食べたり、 走っている牛を見ることができた。自由にのびのびと 過ごしている牛は、日本ではあまり見ることのできな い牛本来の姿だと感じた。日本との飼養方法の違い が明らかであったのは、牛舎がなく搾乳時だけロータ リーパーラーに追い込み、搾乳が終わると放牧場に 放牧するという飼養の方法だった。広い放牧場に牛を 放牧しつつ、人手を少なく抑えるためだと考えた。そ の飼養方法で羊や牛を飼うことができるのは、広大な 土地があるニュージーランドだからこそできることで あると感じた。

日本は牛舎で牛をつないで飼う方法のつなぎ飼いが 主流だ。そのため、あまり放牧はせず日本は土地が狭 いため、牛舎で飼う方法が多くを占める。放牧酪農を やるとしても、ニュージーランドのような広大な土地は 日本にない。また、餌は放牧場に牧草の種を植えて育 てたものを食べさせていた。特に、サイレージが印象 に残っていて、牧草を発酵させたものを食べさせてい たことが驚きだった。なぜなら、私の学校のサイレー ジはデントコーンを細かく刻み、発酵させたものを食 べさせていて、サイレージと言われるとデントコーンの イメージが強くあったからだ。

私は、牧草を発酵させるサイレージがあることは全く 知らなかった。集乳はフォンテラという一つの大きな 会社が主に行っていて、ほとんどの酪農家がフォンテ ラに牛乳を出荷しているとのことだった。フォンテラで 集乳した牛乳はほとんどが輸出用のため、ニュージー ランド国内でフォンテラの牛乳を買うと輸出用の牛乳 よりも値段が高い。

このことから、ニュージーランド国内よりも外国に輸 出し多くの人に牛乳を買ってもらうことで、売り上げを 増やす戦略に力を入れているのではないかと考え

#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

女性が活躍できる畜産について日本に広めたいと考 えている。実際にニュージーランドで研修をした際、 日本で畜産の仕事をするよりもニュージーランドの方 が男女公平な環境があり、働きやすいと感じたから だ。日本で女性が畜産関係の仕事に就く場合、男性 と公平な環境で働くことは難しいのではないかと考え た。畜産業は力仕事が多いため、力がある男性の方が 働き手としては良いという考えがある。そのため、女 性よりも男性が多く働いている。その現状を変えるた めに女性が畜産業で自信を持って働くことのできる環 境を作りたい。多くの女性が畜産業で働くようになれ ば女性の目線から畜産を伝える新しい取り組みが期 待できる。例えば畜産を知らない人に興味を持っても らえる内容の講演や、幼い子には食育を含めた畜産 の知識を教えることである。女性にしかできないこと を進んで行い女性が働きやすい環境を作ることで、畜 産の仕事に就く女性の人口が増えると考えている。最 近は日本でも畜産の仕事をしている女性が増えている のだが、畜産の仕事は力仕事だけではない。ニュー ジーランドでインタビューした際に、女性は母性があ り、子牛の世話に向いているという回答を聞いたこと から、女性に子牛の世話を任せて子牛の育成を良い ものにできるのではないかと考えている。私が考える 女性が活躍する理想の畜産業は、女性も男性と同じ 仕事をすることだ。ニュージーランドでインタビューを した際、「男性ができることの90%以上は女性もでき る | という酪農家の方の意見を聞いた。このことから、 女性だから決まった仕事をするのではなく、男性と同 じ仕事をしながら男性ができない仕事を女性がする ことで公平に畜産業ができると考える。私は畜産アン バサダーとしてニュージーランドの畜産の良い所を日 本の畜産に取り入れて、日本の畜産を現在よりも良い ものにするため活動していきたい。



#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

夢は、酪農家になることだ。人にも牛にも優しく、快 適に管理ができる牛舎を作って管理をしたいと考えて いる。そのため、アニマルウェルフェアを意識すること が必要だと考える。日本国内で全てのアニマルウェル フェアの基準を満たしている農場はとても少ないた め、厳しい基準を満たして牛が快適に過ごすことので きる牛舎を作りたい。人にも優しいというのは、過酷 な労働をさせないことや休日の日数を決めることだ。 働く人それぞれの得意分野を生かして、自信を持って 働く人と一緒に働きたいと考えている。酪農家になる ため、高校卒業後は大学に進学して酪農の知識につ いて深く学び、大学での実習で多くの技術を習得した いと考えている。

#### 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちに メッセージ

畜産は知れば知るほど、世界が広がる。日本で学ぶこ とも大切だが、一度、日本の畜産から離れて外国に学 びにいくのも良い。海外に行くことで自分が今までに 知らなかった家畜についての知識や飼養方法などを 学ぶことができる。日本と外国では家畜の飼養の方 法が全く違う。今回の研修先のニュージーランドも日 本とはかけ離れた飼養方法だった。考え方も違うた め、今までの自分の中での常識が外国では通用しな いこともあった。そのため、自分の今までの考えが 180度変わる。そこから自分の中の「畜産」がさらに 広がる。考えを広げて、これからの家畜との関わりに 生かすことができるだろう。これからの畜産を発展さ せるため、一緒に頑張っていこう!





#### 畜産アンバサダー

岐阜県立岐阜農林高等学校 動物科学科 3年

#### 川口 奈由

#### 1. テーマ

女性の活躍できる畜産(ワーク ライフ バランス)

#### 2. キーワード

女性と経営との関わり

#### 3. キーワードの繋がりと考察

女性の活躍できる畜産について、最初に日本との違い を考えたとき、ニュージーランドには、日本には無い 女性と畜産業に関する制度や取り組みがあると思って いました。日本では、畜産は男性がするものというイ メージがありました。女性は男性と比べ、力が弱いと 思っていました、私でも実際に学校での実習で、もっ と力があれば!と思うことが多く、畜産はあまり女性 には向いていないと思っていたからです。また、女性 は妊娠、出産、子育てや家事をしなければなりませ ん。休みの無い畜産業との両立は難しく、その面でも 畜産は男性の仕事という考えがありました。男性が仕 事、女性が育児と家事という考えの中、ニュージーラ ンドの女性が活躍できるのは、日本には無い制度のお かげだと強く思っていました。

実際に研修して分かった、ニュージーランドで女性が 畜産業で活躍されている要因は、男女が公平な立場 で働く環境だということです。女性と経営との関わり について調べると、ニュージーランドのほとんどの農 場で女性が経営に関わっており、男性とは個々の得意 なことを生かして働かれていました。ニュージーランド の酪農では、「男性のできることの90%以上は女性 もできる | という考えがありました。女性の方はとても 堂々としていて、「畜産において女性という理由でのデ メリットは無い | とおっしゃっていました。 男性の方 も、女性の方をとても頼りにされていました。男性が 仕事、女性が育児と家事、という考えは無く、協力し て家事を行い、女性が畜産業で活躍できる環境があ りました。

日本では、男性が仕事、女性が育児と家事、そして、 畜産は男性の方が有利、という考えがあると思いま す。まず、その考えを変え、ニュージーランドのような 男女が公平な環境を作ることが大切だと思います。今 回の研修で、マルチタスクや母性があるなど、畜産を 行う女性には、男性には無い特徴が大きなメリットだ と知りました。また、そんな女性の能力を認め、男女 の役割を固定しないことで、女性も子育て時期でも畜 産に関わることができていました。これらのことを性 別に関係なく知ってもらい、女性の活躍できる、男女 が公平な環境ができるのではないかと思います。そし て、女性の方が日本で堂々と畜産に関わっていけると 思います。



#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

私が、ニュージーランドの農業を目の当たりにして一番 考えたことは、「酪農は、なんて素晴らしいライフスタ イルなんだ!|ということです。今回、現地でお会いし た全ての農家さんは、とても幸せそうでした。「酪農 は仕事ではない、ライフスタイルだ」という言葉を聞き ました。その方だけでなく、全ての方が酪農を仕事だ と思っているようには見えませんでした。日本では酪 農をはじめとした農業は、休みが無い、きつい、くさい など、マイナスなイメージが大きいと感じます。しかし、 ニュージーランドの方々の酪農に関わっている姿を見 ていて、少しもそんな考えは浮かびませんでした。男 性も女性も、酪農という仕事を、本当に幸せそうにラ イフスタイルとしていました。そして、生きがいとして いました。また、アニマルウェルフェアの考えも浸透し ており、人だけでなく動物も幸せそうでした。そんな 光景を体の全てで感じ、私もあんな生活を送ってみた い!と何度も思いました。仕事ではない、自然、牛と関 わりながら送る酪農というライフスタイル。そんな考え を日本にも広めたいと強く思っています。そして、 ニュージーランドの方々の幸せそうな姿をみなさんに も見てもらいたいと強く思っています。



#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私が、畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと は、男女が公平という考え方です。今回、女性の活躍でき る畜産というテーマで活動し、質問する中で何度も日本 とニュージーランドの男女意識に違いを痛感しました。私 達が、女性は畜産業においてデメリットはある、と決めつ けたような質問に何度も疑問を持たれました。

しかし、その反面、女性であることの畜産業においてのメ リットはいくつも答えていただきました。私達は、このテー マについて考えるにあたって、男女の在り方など考えもし ていませんでした。しかし、ニュージーランドの畜産で女 性が活躍している理由に、日本とは違う男女の在り方が ありました。研修が終わっていくにつれ、私達は初めて、 男女を比べその上で女性にはデメリットが多いと決めつ けているということに疑問を持ちました。男女は得意なこ とが違います。女性にしかないメリットもたくさんあると 気づきました。そこで比較し、男女に明確な差をつけてい ることがおかしいと思いました。そのことについて男女関 係なく日本に広めていきたいです。そうすることによって、 女性は更に活躍でき日本の畜産業は更に盛り上がってい くと考えるからです。

ニュージーランドでは女性が関わることで素晴らしい酪 農ができている農場ばかりでした。考え方、得意なことが 違う男女でお互いに助け合いながら管理、経営を行って いました。改めて男女の違いについて述べるならあの ニュージーランドの酪農があるのは女性の活躍が大きい と、強く思いました。日本の畜産業でも、女性は不利、と 決めつけるのではなく、女性の得意なことを存分に発揮 しながら堂々と活躍できるような環境にしたいです。これ が、私の考える女性の活躍できる理想の畜産業です。

#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

私は将来、農業高校の教員になりたいと思っています。 そして、日本の農業の後継者不足を無くすことが将来 の夢です。今回は、その夢を叶える上でとても重要だ と思うことを多く知り、体感することができました。私 のテーマである、女性が活躍できる畜産に関して、女 性のキャリアというものがありました。ニュージーラン ドの女性は、自分のキャリアに自信を持っていて、 堂々と活躍できている方ばかりでした。私も、農業高 校の教員になったら、高校時代の経験が大きな自信 になり、将来農業界で堂々と活躍してもらえるような 人を増やせるようになりたいです。そのために、今回学 んだことを大切にしていきたいと思います。そして、将 来の夢を叶える上で大きな一歩である畜産アンバサ ダー活動を頑張りたいです。

#### 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちに メッセージ

日本での畜産業のイメージは、まだマイナスなものが 多いと思います。私も農業高校に入り、乳牛と関わる までは、畜産はきついというイメージしかありませんで した。しかし、きつい面もあるけれど、実際に関わって みないとわからない多くの魅力に気づきました。そし て今、少しでも酪農に関わることができていることが とても楽しく、誇りに思っています。人が生活していく 上で畜産業は必要不可欠です。そんな畜産業に誇り を持って、魅力溢れる畜産業を盛り上げていこう。 そして、日本の農業を支えていこう。





#### 畜産アンバサダー

静岡県立富岳館高等学校 総合学科 2年

小林 香弥乃

#### 1. テーマ

女性の活躍できる畜産(ワーク ライフ バランス)

#### 2. キーワード

女性のキャリア

#### 3. キーワードの繋がりと考察

女性の活躍できる畜産というテーマからニュージーラ ンドの女性のキャリアについて考えたとき、最初に 思ったのは「ニュージーランドの女性は酪農に関する キャリアをたくさん積んできたのかな? | ということ だ。家が酪農家だったり、幼い頃から酪農について学 んだりしている女性が多いのではないか?という予想 の元、研修を行った。実際に研修で話を聞くと、確か に経験豊富な方も多く、農業系の大学を出ている方 もいた。しかし、酪農に特化したキャリアだけでもな かった。そして各々がその経験を上手に酪農に生かし



女性は腕が細いので、牛の負担も軽減

日本人だって過去に学んできたことを生かせてない訳 ではないと思う。ただ、「女性」という言葉に囚われす ぎているから、女性はうまく力を発揮できていない人 もいるのではないかと思った。

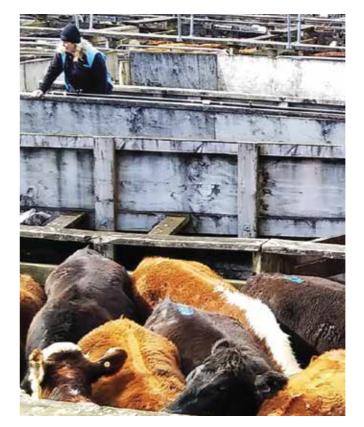


女性でも簡単に設置できる電気柵

#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

一番最初に思ったことは「大きい!!|ということ。広 大な土地があると聞いていたが、本当にその通りで圧 倒された。

たくさんの方々の話を聞いて思ったことは二つ。一つ 目は仕事している人達がとにかく楽しそうということ。 「キツイ、汚い、臭い」という日本の農業に関するイ メージとはかけ離れた様子に違いを感じた。日本人が 楽しそうに見えない訳ではないが、ニュージーランド の人達は仕事中から休みの日まで全てを楽しみつくそ うとしているように見えた。ニュージーランドとは環境 が違うから仕方ないかもしれないが、日本人は仕事を し過ぎというイメージを外国の方は持っているという 話は聞いたことがあったが、確かにその通りだと思っ た。もう一つは、シェアミルカーや自分の農場を持て るまでの過程について。私はニュージーランドに行く まで、そんなこと考えもしなかった。酪農業を始める というのは莫大なお金がかかるから大変、私の中にも そんな考え方があった。しかし、実直に仕事をこなし ていけばいくつかの段階を経て、自分の農場を持つこ とができるかもしれない。自分の農場を手に入れるた めに努力する。そんな人達を見て人生で初めて、明確 な目標を持ち仕事をするということが、とても魅力的 に思えた。そして、「シェアミルキング」これを日本人 が知れば、今までよりも酪農業を始めやすくなるので はないかと考えた。



牛を誘導する女性

#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

一番に伝えたいことは、日本は「女性 | や「男性 | とい う言葉に過剰になっている気がする。男女公平で男尊 女卑の無い社会を目指すなら「女性が~」とか、「女 性でも~ | と考える所から間違っているんだと思う。 男性の方が優位な時代があったのは事実で、「女性 も!|と言ってきたからこそ今意識が高くなりつつある ことも分かる。だが、これからはそのままの考え方だ といつまでたっても、意識を改変していた側が性別に 囚われ続ける時代になってしまうと思う。男性が強く 女性が弱いのではなく、区別がはっきりとしていつま でも「性別に囚われる時代 | から変わらないのではな いか。実際「女性の活躍できる」と言っているのもそ の一片の気がする。もし、その意識が変わるなら効率 的に仕事も進められるし、就農者も増えると私は思 う。「女性 | 「女性 | と意識を寄せすぎてしまうことこ そ、逆に性差だと私は思う。

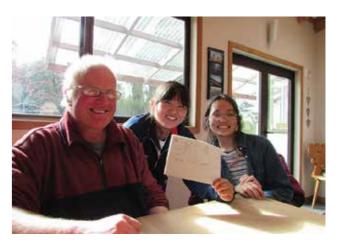
「女性の活躍できる畜産」それは「たくさんの人が活 躍できる畜産」になればいいと思う。女性も男性も性 別ごと括らずに働けて、その中で女性がもっと増えて いくことが理想的だと思う。

#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

ニュージーランドに行く前、私は「動物に関わる仕事 をしたい | と思っていた。しかし、今回ニュージーラン ドでの沢山の経験を通して、もっと酪農業に関わって みたいと思った。日本の畜産について学んでみたい し、もっと畜産に関わって生きている人達と出会って みたいとも思った。また、「女性が」「女性の為の」と いう考え方をもう気にする人がいなくなるような働き 方をしてみたい。

#### 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちに メッセージ

外国へ行ってみて価値観がとても変わった。酪農につ いての働き方だけでなく、正直、日本は性別による差 別や働き詰めの社会であり、社会人になるのはすごく 大変そうに見えてしまう部分もある。しかし、それだけ 愚直に仕事のできるわが国はすごいと見直すこともで きた。そんな国を担っていくのは私達だから一緒に頑 張りましょう。



## 6. 参加者の報告



#### 畜産アンバサダー

三重県立明野高等学校生産科学科3年

#### 小屋敷 萌香

#### 1. テーマ

女性の活躍できる畜産(ワーク ライフ バランス)

#### 2. キーワード

女性が活躍するメリットとデメリット

#### 3. キーワードの繋がりと考察

「女性の活躍できる畜産」というテーマで畜産業について考えたとき、力作業も多く時間の自由がきかないと思える仕事で、女性が活躍することができるのだろうかという疑問が頭に浮かびました。女性は男性に比べると体力や筋力が低く、畜産業に就くことは肉体的にも精神的にも辛いと感じることが多いのではないかと思いました。そこで、女性が活躍しているというNZでは、仕事において男性女性それぞれの役割にはどのような差があるのか、女性は弱点や難点をどのようにカバーしているのか、また女性だからこそ活躍できるという強みがあるのか知りたいと思いました。

NZの方々が考える畜産業においての女性の強みを大きくまとめると、マルチタスクができること、綺麗好きなこと、周りを見る力に優れていること、母性があり分娩や搾乳、仔牛の世話が上手にできることの4つでした。今回の研修で現地の方々に男女の差について質問をしましたが、そもそもNZでは男女平等・公平という意識が根付いており、そのような質問自体に違和感があるようでした。男女平等・公平という国民意識があるからこそ、先の4つのような強みが生きてくるのだと思います。

男性も女性もそれぞれ強みはありますが、それを比較して男女の差別をつける必要はなく、誰もが自分自身の強みを生かしていくべきだと思います。

日本の畜産業においても、女性の視点や特性が経営の多角化や売り上げ増加に貢献していることが注目されています。しかし、まだまだ女性が活躍しているとは言えないのが事実です。研修を通して、NZと日本では仕事において男女の比較や区別があるかないかの違いを実感することが多々ありました。NZでは畜産現場でも畜産経営に関しても女性も男性と同じように仕事をしていました。NZと日本で女性畜産就農者の割合に大きな差はありませんが、その中で経営に関わっている女性の割合が日本は圧倒的に少ないのです。女性が自分の力を発揮し、モチベーションを維持し、主

61

体的に働き活躍するためには、NZのように女性が経営の全面に出られるようにしていくべきだと考えます。

#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

NZの広大な農場でのびのびと家畜が放牧されている 景色は見ていて飽きることがなく、今でも目に焼き付いています。

研修地では畜産業に携わる方々に実際に話を聞くことができました。その中で特に印象に残っていることは、ファームステイ先でのインタビューの際に日本かは男性の方が優位だと伝えた時に、ご主人から「Why?」と返ってきたことです。他の農場でもご主人やパートナーの男性に聞くと、「彼女がこの農場できないことはない」「彼女がいなければ困る」などと話され、NZでは女性と男性が対等な立場であることを実感しました。研修に行く前は、NZで活躍している女性は畜産についての特別な知識やキャリアがあるのだろうとか、NZには女性のための特別な制度があるのかもと考えていただけに、大きな驚きでした。女性の活躍は男女公平という意識の基においては、ごく自然なことなのだと思います。

また、日本はNZのような広大な土地はありませんが、NZのシェアミルキングのような制度を広めていくことで、新規参入者を増やしていけるのではないかと思います。それには私たちのような若い世代が世界の畜産を学び、日本の伝統と組み合わせながら、新しいビジネスモデルを作り発信していくべきだと思います。



#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

日本の畜産 (酪農)に広めたいNZの方々の考え方があります。それは、多くの方々が酪農を「仕事」ではなく「ライフスタイル」と捉えていることです。

訪問先の農場では夫婦で酪農業を営み「酪農はわたしたちのライフスタイル」と、その生活をとても楽しんでおられました。子どもたちは幼い頃から親と一緒に農場で過ごし、楽しんで朝の搾乳を行ったり、自分たちにできる手伝いをしたりしていたそうです。幼い頃から酪農に関わることで、自然の素晴らしさや命の大切さを感じられるのでしょう。また、そういった経験により、酪農の大変さだけでなく楽しさも知っていくのだとも思います。日本では小学校で農作物を作る授業がありますが、畜産に関わることはほとんどないように思います。日本でも授業や課別活動で、子どもの頃から畜産を学び身近に感じられる環境をつくるべきではないでしょうか。そうすることで、畜産の仕事に興味を持つ人が増えると思います。



また、酪農を「ライフスタイル」と捉えると、男女を比較することは無くなるのではないでしょうか。「ライフスタイル」という考えによっても、女性自身が満足し自信を持って活躍できる場が生まれているのだと思います。NZでは男女関係なく、お互いの苦手なところは補い合い、それぞれが自分の持つ力を発揮し効率良く酪農を経営しておられました。

畜産就農者の減少や高齢化を解消し、その中で女性ならではの強みを最大限に生かしていくことが日本の畜産を活性化させるために必要だと感じました。

62

#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

私は将来、生産動物の医療の面から畜産業に携わりたいと思っています。NZで獣医療は畜産(酪農)にとって大切であり、獣医療が必要とされていることを知り、さらにその思いが強くなりました。今後は生産動物医療を学べる大学に進学し、家畜人工授精師などの資格を取ることが目標です。そして、消費者に安全安心な食を届けるため、生産者へのアドバイスやサポートを行い家畜の健康を守っていきたいです。女性だからこその強みや視点を生かし、楽しく仕事をしていきたいです。

## 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

私はこの研修でたくさんの人に出会うことができました。そしてたくさんの発見がありました。自分自身の考え方や意識の変化も感じています。今だからできること、今やりたいことがあるのならば、迷わず積極的に挑戦してください。自分の視野を広げ、より良い畜産業を目指して一緒に頑張りましょう!!



## 参加者の報告



#### 畜産アンバサダー

京都府立農芸高等学校

#### 1. テーマ

畜産の担い手(農家を育む政策)

#### 2. キーワード

酪農をはじめたきっかけ

#### 3. キーワードの繋がりと考察

畜産の担い手というテーマを選んだ理由は、学校の 先生から京都の畜産人口が減少しているというのを 聞いたことがきっかけです。地元である京都の畜産が 廃れていくのは悲しいため、私にできることはないか と考えていたときに、畜産の担い手について学びたい と思いました。

畜産の担い手というテーマで酪農をはじめたきっかけ について考えたとき、ニュージーランドでは国全体に 酪農が身近なものなのではないかと考えました。日本 では酪農と言えば北海道!というイメージが強いよう に、ニュージーランドの人は酪農と言えば自国!という イメージを持っているのではないかと思っていまし た。そのため、ニュージーランドでは全ての高校で農 業の授業が実施され、子供の頃から全ての子供が農 業のそばで生きているのではないか、酪農教育ファー ムなどの取り組みが盛んなのではないかと考えていま した。

しかし、実際にニュージーランドには農業高校という ものすらありませんでした。また、酪農教育ファーム のような取り組みもありませんでした。しかし、日本と ちがい、酪農に対する「きつい・くさい・汚い」の3K のイメージはありませんでした。その理由として、牛舎 のない放牧のオープンな酪農だからではないかと考え ました。実際に搾乳場所も搾乳後には水で糞尿を洗 い流すため、清潔な状態で保たれていました。また、 実際にファームステイで現地の酪農家の仕事を体験 しましたが、給餌作業や牛床の管理もないため、労働 時間が日本に比べて少なく、自由な時間が多いと感じ ました。また、自然と共に生きているという実感が、広 い放牧地から感じられました。それに加え一般家庭の 子供の、酪農家に対するイメージも、お金もち、など の良いイメージばかりでした。

私はこの酪農に対するイメージを日本に持ち帰ること ができるのではないかと考えました。酪農教育ファー ムというシステムが存在している日本だからこそ、実 際に牧場に訪れてもらうことにより、3 K のイメージを 改善していくことが可能なのではないかと考えます。 ニュージーランドの酪農家の方も、ファームステイな どで研修生を受け入れることにより、酪農を知っても らう良い機会になっていると言っていました。しかし、 ファームステイより、酪農教育ファームの方が手軽で より簡単に酪農を知ってもらうことができると思いま す。だから私は、今学校でも取り組んでいる酪農教育 ファームをより多くの人に知ってもらえるように、体験 してもらえる活動をしていきたいと思います。そして日 本でも酪農に対するイメージ改善につなげていけれ ばいいと思います。



#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

まずはじめに、ニュージーランドの牧場を見て驚いた のは、牛舎がないということでした。放牧型の酪農 で、ニュージーランドならではの地形を生かした広大 な放牧地の美しい風景にも驚きました。また、現地の 酪農家の方が、「放牧は牛本来の姿でいることができ る | とおっしゃっていたのも心に残っています。 ESO Lの授業の中で5freedomsについての話や、「牛が 私のためにじゃなくて、私が牛のため」という言葉も心 に残りました。このような考え方を普段の学校での作 業時にもう一度意識してみようと思いました。そして1 0日間のニュージーランド研修の中でも特に心に残っ ているのは、現地の酪農家さんの酪農というものに対 しての考え方です。農業視察先の酪農家さんの多く や、ファームステイ先の酪農家さんも酪農というもの を仕事としてとらえていませんでした。1つの生き方や 憧れのようなライフスタイルとしてとらえていたので す。私も酪農に悪いイメージは一切持っていませんで したが、あくまで仕事の一種としてとらえていました。 今まで考えもしなかった酪農についての考え方にとて も驚き、私自身の酪農に対する考えも、「仕事」という 堅苦しいものではなく、取り組みやすいイメージにな りました。



#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私は、研修の中で酪農に対する考えが変わるきっかけに もなった、酪農への考え方について広めていきたいと思 います。まず、そのことを日本に広めていきたい1番の理 由としては、私が今回の研修の中で酪農家さんに酪農を はじめたきっかけを訪ねたときに、「酪農というライフス タイルに憧れた|という回答が私の酪農に対する考えを 一気に変えてくれたからです。ぜひあの感覚を多くの人 に味わってもらいたいと思いました。

そして、日本に広めていくことにより、まず多くの人の酪 農に対するイメージを変えることが可能なのではないか と思います。そしてそれにより、先入観で3Kのイメージ を持っていた人にも酪農の良さを知ってもらうことがで き、その結果、酪農人口増加につながるのではないかと 思います。

私はニュージーランドに行き、女性が活躍する理想の畜 産業とは、女性の強みを生かしたものだと感じました。 ニュージーランドの女性は、信念が強く、自分自身に自 信を持っていました。どの女性酪農家さんも口をそろえて 「男性にできて、女性にできないことはない」とおっ しゃっていました。私は、日々の作業をするなかで、ここ は男子に任しておいた方がいいのではないか、女の私が 手を出さない方がいいのではないかと、自分に自信が持 てないことがありました。しかし、ニュージーランドの女 性は、男性に劣っていないことを実際の作業風景を見て も感じました。とくに、男性は1つの作業をすることが得 意ですが、女性はマルチタスクができ、また、分娩時の 母牛の気持ちをより分かってあげることができるなどと いう考えも男女問わず持っており、女性だからこその強 みを酪農に生かしていました。したがって、私が思う女性 が活躍できる理想の畜産業は、女性の強みを生かした ものだと思います。

#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

まず、2月に校内で行われる学習成果発表会で、今回 の研修についての報告を行います。そこで本校の生徒 や先生方に、私がニュージーランドで学んだたくさん

の酪農の魅力や女性が活躍できる酪農について伝え たいと思います。

そして、高校卒業後は4年生大学に進学し、より酪農 について深く学んでいきたいと考えています。在学中 には酪農家さんのところでアルバイトをしたりして、た くさんの経験を積んでいきたいと思います。そして、大 学卒業後は、酪農家もしくはふれあい牧場で働きた いと考えています。しかし、どちらの道を選んだとして も、多くの人に酪農の魅力を伝えていきたいと考えま す。それが、ニュージーランドのように日本の酪農を活 性化することにつながると思います。

また、今回の研修でお世話になったファームステイ先 に、もう一度しっかりと英語で会話できるようになった ときに訪れたいと思います。そのときにはもっと、たく さんのことを話したいです。



#### 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちに メッセージ

自分がやりたいと思ったことは、遠慮せずにやりた い!と言えることが大切になってくると思います。チャンス は誰にでも訪れるものですが、それを自分のものにで きるのかは自分次第です。 実際私は今回の研修に、先 生から行ってみないかと誘ってもらい、「行く!」と答 えられて良かったと思います。その結果、自分自身の 大きな成長につなげることができたと思います。

何ごとにも、どうせ無理だから、とマイナスにならずに できるとこまでやってみよう!と考えることがどれだけ 大切なことなのか、今回の研修で私は知ることができ ました。どんなことにもチャレンジしていくことで大き く自分の未来が変わると思います!





#### 畜産アンバ<u>サ</u>ダ<u>ー</u>

兵庫県立農業高等学校 動物科学科 2年

髙橋 未来

#### 1. テーマ

女性の活躍できる畜産(ワーク ライフ バランス)

#### 2. キーワード

妊娠、出産後の仕事復帰

#### 3. キーワードの繋がりと考察

私は女性が活躍できる畜産というテーマで、女性の妊 娠時、そして出産後の仕事と子育てとの両立について 考えました。日本の畜産業は労働時間が長く、肉体労 働が多いため、仕事と家事・育児との両立が難しい状 況にあります。そのため、畜産業に携わる女性の数は 年を重ねる毎に減少している傾向にあり、労働不足を 招いています。しかし、NZでは女性が畜産業で男性 に劣らず、どの年齢層でも無理なく働いており、畜産 に特化したキャリアウーマンが多いと思っていまし た。それは、NZでは産休や育休が十分な期間取得で き、働きやすい制度が定められていることで女性が優 遇されていると思ったためです。"国"が女性の働きや すい環境をつくっているイメージが強くありました。

NZの研修を通して、ホテルマネジメントや教員免許、 会計士など様々なキャリアを多くの女性が持っている こと。そして、国で定められた制度は日本と大差ない ことを学びました。私は畜産のみに的を絞らず様々な 知識や技術を活用することで、経営安定につながって いると考えました。また、国からの対策や補助金は日 本よりも少なく、2週間から8週間の産休と育休のみ で女性が働いていました。農家の多くはパートナーや 家族と経営しており、ファームステイ先の肉牛農家の 家族は、当然のように旦那さんが子供達の相手をして いました。夫婦が家事や仕事をシェアし、特に子育て の面で助け合っていたことが、女性が畜産業に長く携 われる理由だと思いました。女性が働きやすい環境を つくるのは"国"ではなく、"人"なのだと考えさせられま した。

NZと日本の大きな違いは、助け合いの意識の高さだ と思います。日本人女性が畜産業界により進出するに は、制度を真似するのではなく、一人ひとりの意識改 革が必要だと考えます。女性一人で仕事や家事、育児 の全てを行うことは難しく、自分の意思だけではどう にもならないことが多くあるはずです。そのため、日 本の産休や育児休暇などの制度をしっかりと利用でき るようパートナーはもちろん、職場の理解づくりを積 極的に行い、その意識で会社をつくることが、女性が 仕事を楽しく続ける秘訣だと考えました。女性が立ち 上がり、協力の声を上げ、助け合いが当たり前の国づ くりが大事だと思います。"まずは私が"と思える人が 増えるよう、その第一歩を踏み出したいと思っています。

#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

NZの空港に到着してバスでの移動中、丘と平地の広大 な放牧地に牛や羊などの家畜が多く見られ、町からす ぐ近くということからNZにとって畜産は人と身近な存 在であり、主要な産業だと感じました。実際のNZは日 本と同じく乳質を追求していましたが、風味を大切に する日本とは異なり、オーガニックにこだわりを持って いました。しかしNZの酪農は餌が牧草中心のため、日 本のように濃厚飼料を与えるよりも乳量が減ることが 問題なのではないかと思いました。ですが、オーガニッ ク認定やその理念で牛乳を生産することで付加価値 をつけ、消費者の希望の商品を生み出すことで十分 な利益を得ることができていました。実際にオーガ ニック理念の酪農家の牛がのびのびと暮らしいる姿 を見たとき、日本で生かせるのではないかと思いまし た。また、化学肥料、化学薬品を一切使用せず、牧柵 の素材、水質汚濁問題の対策が決められており、アニ マルウェルフェアとアニマルヘルスに特に時間、土 地、お金をかけていることから、牛に対しリスペクトし ているように感じました。面積や人口、環境、全てが 異なるため同じ飼い方はできませんが、牛に優しい飼 い方を追求し続けること、牛乳を生産する背景により 注目することが日本の牛乳を世界に広めるために必 要だと考えました。



#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私は男女を比較せず、働く一人ひとりの知識や能力、 経験を生かした役割につくことが女性の活躍につな がるということを広めたいと思いました。日本の女性 は働きづらいとよく耳にしていたためです。しかし、 NZの女性は楽しそうに仕事をし、生き生きとしていま した。その背景にNZでは社会全体の仕組みに男性の できることの90%は女性もできるといった考え方があ りました。

研修に行った際にインタビューをした多くの女性たち は、畜産に限らず様々な知識やキャリアを持ってお り、長く畜産業に携わっていました。その人本来が 持っている知識や経験が豊富なことから自信と積極 性が生まれ、女性の活躍につながることで収入が上 がり、経営がうまくいっていたのです。私は一人ひとり の考えを改め、協力精神を養うことで働きたい女性が 働きやすい環境を作ることができると考えました。日 本の畜産業が衰退している中、女性が活躍できる環境 を整えることで、新しい働き手が増え、畜産業が盛ん になるチャンスをつくることができると思います。

また、日本の畜産業で働く女性同士、子育てをする親 たちを支える交流の場の必要性を知ってもらい、交流 の場を広めるべきだと思っています。そうすることで、 子育て中の女性が孤立しづらくなり、子育てと仕事と の両立での悩みが解決に向かうと思います。

私は畜産業で女性が肩身の狭い思いをすることなく、 のびのびと働くことが女性の活躍につながると思って います。畜産業に携わるすべての人が多様な経験、 キャリア、個性を認め合い、それぞれの状況に合わせ て柔軟に働けることが日本の畜産業の理想と考えま した。私はこの理想の畜産業に少しでも近づけるよ う、先頭を切って努力を続けていきます。

#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

私は自身の得意な絵で、酪農の未来を守っていきたい と思っています。畜産の世界は、臭い・汚い・キツいと いうイメージが強くあるのが現状です。確かにそう いった面もありますが、それ以上に乳牛と接するのは 楽しく、命の大切さを実感させてくれるかけがえのな いものです。しかし、今の日本では酪農の仕事への働 き手も牛乳の消費もどんどん減少しています。そのた め、これから世界の酪農に視野を広げ、それを絵で表 現し、たくさんの方々に見聞きしてもらうことで酪農の 素晴らしさを伝えていきたいと考えています。酪農と 接し続け、魅力を感じて貰うことで酪農がもっと身近な 存在となり、栄えていくように努力を続けていきます。

#### 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちに メッセージ

私は今回のNZ研修で、日本の畜産をより良くするため には、まず行動を起こさなければならないというとて も大切なことを学びました。少しでも多くの人に酪農 の素晴らしさを知っていただくためには、世界に視野 を広げ、柔軟な考えを持ち、取り入れていく必要があ ると思います。これから沢山の経験を重ねることで 様々な知識や技術を得て、大好きな酪農が日本でより 栄えるために、次世代の私達が盛り上げていくよう頑 張りましょう。





#### 畜産アンバサダー

島根県立出雲農林高等学校動物科学科3年

#### 福田 侑美

#### 1. テーマ

ビジネスとしての畜産(攻めの畜産)

#### 2. キーワード

ビジネスの視点で学ぶ最新技術

#### 3. キーワードの繋がりと考察

私はビジネスとしての畜産というテーマでビジネスの 視点で学ぶ最新技術について考えたとき、最初はい 本で使われている技術とあまり変わらないのではない かと考えていました。しかし、実際にニュージーランド へ研修に行き、そうではないと気づきました。ニュー ジーランドでは放牧により管理を行い、それに伴い最 新技術が発達していました。例えば、衛星を利用し、 牧草地を管理するシステムや、牛の装着したICチッで、 年齢、妊娠の有無などが分かるシステムです。これ らの技術により作業が効率的に行え、広い土地 くの家畜を正確に管理できます。放牧が少ない日本で もこれらを導入すれば、牛の体調をその都度確認す るなどといった作業を省力化できるのではないかと考 えます。



#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

ニュージーランドへ研修に行き、驚いたのはアニマルウェルフェアが強く意識されていることでした。日本でもその考えは広まっていますが、理解を得られない

こともあります。しかし、ニュージーランド研修でお話をしてくださった方々皆さんはとても意識されていました。その証拠に牛の市場でもアニマルウェルフェアについて書かれた看板がありました。一人ひとりがしっかりアニマルウェルフェアについて考え畜産業を営んでおられることにとても驚きました。ファームステイでもそのことを実感することがありました。ホストファミリーの方と日本の畜産の話になったとき、「牛に鼻環をつけるのは古い、しょうがないけど可哀そう」と言っておられました。



アニマルウェルフェアについて書かれた看板

また、ニュージーランドでは徐角のとき獣医に麻酔を 打ってもらうとも言っておられました。これらはアニマルウェルフェアの考えによるものだと思いました。産 業動物でありながらも動物本来の姿が尊重されているのだと思いました。日本でこの方法は定着しづらいと思います。ですが、日本の畜産の形態にあった方法を考え実践し、アニマルウェルフェアについてもっと 関心を持つことが大切ではないかと考えました。そうすれば古いとは言われないと思います。

ファームステイの時に、「日本人は毎日働いていて、みんな疲れた顔をしている。」「全然楽しそうじゃない」と言われました。私はこの言葉を聞いたとき確かにと思いました。お話をしていただいた方は皆、牛が好まだから、趣味で酪農をやっていると答えておられまられる。略農をやることを誇りに、なにより心の底から彰しんでおられました。日本でも畜産をやることに続から、楽しんでいるという方はたくさんいるとに寄り、楽しんでいるという方はたくさんいるます。ですが、それは仕事であって楽しいとは言えなります。ですが、それは仕事であって楽しいとは言えなった。

日本人は休みなく働き私生活の時間が短くなりがちです。このままではいけないと思います。そこで、 ニュージーランドで使われているICチップで年齢、妊 娠の有無、分娩のタイミングなど牛の管理が手元で確認できる技術などを導入すれば労働を省力化でき、少しでも働く時間を減らすことができるのではと考えます。また、そうすることで女性が子育てしながら畜産業に参加できると思います。



女性は、妊娠や出産を機にやめていく人が多いですが、仕事と私生活のバランスをとり、両立しやすい環境を作っていけば続けていけるのではないかと思います。そのために最新技術の導入は効果的なのではと考えます。同時に、畜産業で女性が活躍するには周りの理解が必要です。「女性なんかが」ではなく、「女性だからこそ」できることがたくさんあるという気持ちを誰もが当たり前に持っていること、女性自身が男性には負けないという気持ちを持っていることは大切なことだと思います。

#### 5. 自分の夢、これからやりたいこと

私は、将来、畜産を教える教師になりたいと思っています。畜産業を営み、直接畜産を盛り上げる一人になるわけではありませんが、教師として畜産の魅力を次世代に伝え、私なりに畜産を盛り上げていきたいと思います。このニュージーランド研修で学んできた女性の活躍、アニマルウェルフェア、進んだ技術などグローバル面での畜産も伝えていき、長期にわたって畜産アンバサダーとして活動していきたいと思います。これから様々な場所や形で畜産アンバサダーとして活動していきますが、ニュージーランドの畜産の魅力、日本でどう生かすべきかしっかりと伝えられるように活動していきます。



畜産アンバサダーとして活動

## 6. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業はとても素晴らしい職業だと思います。これから私たちの力でもっと素晴らしく、魅力あふれるものにしていきましょう。上手くいかないこともいっぱいあるだろうし、やめたくなることもあるかもしれないけど、同じ道を目指す仲間同士で一つ一つ乗り越えていけると思います。畜産の未来を背負う一人として一緒に頑張りましょう。



67



広島県立油木高等学校 産業ビジネス科 3年

畑本 瑞穂

#### 1. テーマ

家畜や自然のための畜産(アニマル ウエルフェア)

#### 2. キーワード

放牧環境

#### 3. キーワードの繋がりと考察

家畜や自然のための畜産というテーマで「放牧環境」について考えたとき、研修以前は放牧は家畜にも生産者にとってもメリットの大きい飼育方法であると考えていた。そのため日本で問題視されている耕作放放地として活用することができれば、使われない土地を有効活用できるだけではなく、飼料コスト低減や労働負担の軽減に加え、放牧地で自由に運動することにより家畜の体と心の健康を保つことができること考えていた。酪農の盛んなニュージーランドで放牧を学び知識を深めた上で家畜のために私ができることを考え、放牧や酪農のことをより多くの人に発信していきたいと考えている。

実際にニュージーランドに行ってみると、メリットだけではなくデメリットも多く存在していることが分かった。その中でも環境問題として水質汚染がとても深刻な問題であることがあげられた。牛をはじめとする経済動物から排出された糞尿が放牧地に大量に還知によって、近くを流れる河川や湖に汚染物によって、近くを流れる河川や湖に大きなが染み出し土壌や川に生息する生物などに大き質染に対して「糞尿を肥料として利用する」、「水源から5m以上離して電柵を張る」などの改善策が多く見りに積極的に取り組んでいるのだと感じた。将来的には日本も畜産業に限らず、国全体で今以上に環境につまり組んでいて前向きに取り組んでいく必要があると考える。

日本で放牧をすると考えたとき、ニュージーランドと 比べても面積に大きな差は存在しない。しかし、人口 密度も合わせて考えてみると、日本はニュージーラン ドと比べて利用できる土地が狭く限りがあることか ら、放牧圧が高くなることは容易に想像できる。この ことからそのままニュージーランドの放牧を日本に取 り入れることはほぼ不可能であり、水質汚染問題はよ り深刻化すると考えられる。しかし今回の研修で知ったメリットから考えると、放牧という飼育方法が人間と動物に与える影響はとても大きなものであると感じた。ニュージーランドのような大規模なものはできなくとも、少ない頭数で放牧を行うことは日本で可能である。中でも私は、耕作放棄地を活用して放牧を行うことが最も有力であり実現的であると考えている。つなぎ飼いに比べ初期投資が少なく家畜の管理が容易となるため、一般の人が新規就農者として畜産産産始めるきっかけとなるのではないか。加えて飼育管理が容易になることで農業従事者の労働時間の大幅な改善が見込めると考える。



#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

ニュージーランドでの研修で最も印象に残ったこと は、ニュージーランドの酪農家は環境保全にとても積 極的であり、実際に何らかの取り組みを行っている牧 場がとても多かったことだ。日本でも環境問題に対し て対策は考えられているものの、ニュージーランドほ どの積極性があるわけではない。そのため自分の牧 場を営みながらも現状を理解し、行動している姿には とても感動した。現地には「人のために牛が働くので はなく牛のために人が働いている|という考えを持っ ている方がいた。日本では家畜を下に見ている傾向 が強く、家畜を粗末に扱う畜産農家も多い。しかし、 ニュージーランドでは家畜に対しリスペクトという気 持ちを強く持っており、人間と牛の心の距離の近さを 感じた。牛に対する尊敬の気持ちは自然と牛たちの生 活をより良いものにしたいという気持ちにつながり、 酪農家自身の行動力の根源ともなりえると私は考え た。また女性の酪農従事者の活躍もとても目覚ましい ものであった。日本ではいまだ男女差別が強く残って おり、一般的にみれば農業は男の職業というイメージ があり、女性が働くとなると周囲から反対される傾向 にあると感じている。ニュージーランドでは酪農をす

る上で男女の差は見当たらなかった。それどころか女性が働くことへのメリットが多く出てきたことには驚かされた。話を聞いていく中でニュージーランドの女性は自信と誇りを持って仕事と向き合っているのだと感じた。私は今までやりたいことがあっても女ということで自分の将来に自信が持てなかった。しかし、今回の研修を通して働く上で必要なことは性別ではなく、強い気持ちと行動力であることを知った。女性の活躍の場が広がればこれからの日本の酪農はさらに発展するだろう。



#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとして畜産の素晴らしさをより 多くの人々に広めていきたい。日本の畜産というと3K の臭い・汚い・きついというイメージを持たれること が多く、一般の人にとって身近なものではないため畜 産業はあまり知られていないことが現状である。しか し私にとって畜産は、とても充実的で直接人々の食に 関わることのできるとても魅力的でやりがいのある仕 事である。そこで、まずは酪農という職業に興味を 持ってもらいたい。私は非農家であるが日々の高校生 活やインターンシップ、畜産関連イベントの参加を通し て酪農に興味を持ち多くの魅力に気づくことができ た。そして毎日のふれあいから私にとって牛はかけが えのない存在となった。このことから興味を持たせる ためにはきっかけとなる材料が必要であると考えた。 そこで私は多くの人にとって畜産に興味を持つきっか けとなってもらえるような講話をしていきたいと考えて いる。まずは小学生や中学生、高校生などの若い世代 を中心に情報発信していきたい。酪農や牛の魅力な どを伝えることはもちろん、畜産動物から牛乳や肉、 チーズができるまでの過程やそれらを生産する生産 者の人たちについて深く知ってほしい。またニュー ジーランドで学んだ女性の活躍についても発信してい きたい。日本の畜産は女性が働きにくい環境にある。 しかし女性と男性が働く上で大きな差などは存在しな

いこと、女性にも男性にはない強みがあること、新たなことに挑戦することの大切さなどを広めたい。私はニュージーランド研修を通して男性と女性が信頼しあい、対等な立場で働けることが日本の畜産の理想の形ではないかと考える。アンバサダー活動を通して少しでも多くの人に産業に興味を持ってもらいたい。そして今後、日本の畜産を支える担い手を増やしていきたい。この活動をきっかけに畜産に持たれるマイナスイメージを少しずつ変えていきたい。

#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

私の夢は持続可能な酪農を目指した観光牧場を開くことです。そのために中国四国酪農大学校に進学し、環境保全や持続可能な畜産について学びたいと思っています。将来は消費者一人ひとりの声に耳を傾け、日本の畜産をより良いものにし牛にやさしい環境づ一層放牧に興味を持ち、さらに知識を深めたいと思いました。事前研修の際に投げかけられた「牛にとっての幸せとは何か」という問いには今でも私の中で答えは出ていません。ですが、これからはその疑問に対して考え行動し、自分が牛にとってプラスの存在になれるよう努力していくつもりです。日本の畜産を支えていきまた。



# 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業は命の大切さを伝え、人々の生活に直接関わることのできる魅力と可能性に溢れたとても素晴らしい職業であると思います。失敗を恐れずたくさんの経験を積み、畜産を学ぶ仲間として共に今後の畜産業を盛り上げていきましょう。



愛媛県立野村高等学校 畜産科 2年

#### 友松 瑠生

#### 1. テーマ

家畜や自然のための畜産(アニマル ウェルフェア)

#### 2. キーワード

放牧のメリットとデメリット

#### 3. キーワードの繋がりと考察

放牧のメリットとデメリットについて考えたときに、私が一番はじめに考えたのは「そもそも放牧にデメリットなんてあるのだろうか」ということです。放牧によって足腰が強くなり、産次数が多くなることなど、メリットしか思いつきませんでした。ではなぜこんなにも日本で放牧が少ないのか。デメリットがあるとして、ニュージーランドではどのようにしてそれをカバーしているのか。この答えを見つけることで、日本で放牧の魅力をより正確に伝えられると思いました。この二のの疑問を中心に、ニュージーランドで放牧のメリットとデメリットを調べてきました。

実際にニュージーランドに行き、放牧にもやはりデメリットがあることを知りました。例えば酪農家の視点から見てみると、放牧は乳量が少ないというデメリットがあります。これは酪農家、特に日本の酪農家、放牧は飼料の多くを粗飼料が占めることから飼料コストを低く抑えられるという面も持ちます。このように放牧にはデメリットを補うことができるだけのメリットをはデメリットを補うことができるだけのメリットがあります。またデメリットへの対策も行われています。そのために行われているのが、河川とフェンスの間にもいるのが、河川とフェンスの間にもいるのが、河川とフェンスの間にもいるととができます。これらのととで土壌汚染を防ぐことができます。これらのドメリットとして捉えていないように感じました。

しかし、今の日本でいきなり「さあ放牧をしよう」と言っても無理な話です。すでにつなぎ飼いが主流となっている日本では、牛さらに人間への負担が大きすぎるからです。そこで二つのアイデアを考えました。一つ目は小さな規模から始める放牧です。育成牛だけ、など少ない頭数だけでも放牧することで飼料コストを低く抑えることが可能になります。また牛も運動をすることで健康を保つことができます。二つ目は耕作放棄地を放牧地として有効利用することです。調べてみ

たところ、日本には耕作放棄地が約40万haあることが分かりました。土地の少ない日本で放牧をするのならば、土地の有効利用が不可欠だと考えます。このように日本で放牧をすることは非常に難しいことです。しかし、少しずつでも始められることがあります。牛そして人間にも負担がかからない放牧の魅力を日本に発信していきたいです。



#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

ニュージーランドに行って、まず驚いたのが土地の広さです。360度どこを見ても放牧地。美しい自然と澄み切った空気の中で牛はのびのびと草を食んでいました。放牧なので牛舎はなく、あるのは搾乳室のみ。無駄な建物で美しい景色を邪魔していないところも放牧の魅力の一つだと思いました。

ニュージーランドでは多くの人のお話を聞いてきました。その中でも特に耳にすることが多かったのが「牛はパートナー」という言葉です。研修中に訪れたホーリー・ワーム氏もそう語った中の一人です。働いてくれて、お金を稼ぐ牛たちをリスペクトしていました。ニュージーランドの人々は牛を家畜としてではなく、それぞれの牛を一頭の牛として見ているように思いました。そしてこのような動物をリスペクトする気持ちが動物と対等に接する態度につながっているのではないかと考えました。これからは日本でも牛舎の飼育環境を良好にするなど、牛をリスペクトする気持ちが大事になってくるのではないでしょうか。

私はニュージーランドに行くまで現地には畜産をしたい人が余るほどいるのでは、と考えていました。しかし、お話を聞くうちにニュージーランドでも人手不足に悩まされるということが分かりました。そこでニュージーランドではいくつかのアイデアがありました。例えば若手の農家を支援するヤングファーマーズという団体。政府からの補助金はないため、ボランティアとして活動されている状態です。もう一つの例がシェアシルキング制度です。最初はどこかの農場でアシスタントとして働き、しばらくしてからマネージャーになりま

す。そして牛だけを持っていて土地がない人のために シェアファーミングで土地をシェアし、お金をためて、 いずれかは自分の農場を持ちます。このように段階を 追って自分の理想の農場を持てるようになることが素 敵だと思いました。

いま日本では高齢化が進み、畜産業は衰退の一途を たどっています。こんな時だからこそ、日本もニュー ジーランドのように若い人も就農しやすい環境を作る べきだと思います。

#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

ニュージーランドには「かっこいい」女性がたくさん いました。どの女性もみんな自分の仕事に誇りを持っ ていて、輝いていました。日本は昔からの固定概念の せいか、女性の立場は男性よりも低く感じます。 ニュージーランドも昔は日本と同じ状態だったそうで す。しかし、今のニュージーランドは女性と男性の立場 が対等になっています。このことは具体的な数字にも 表れていました。それは牧場経営者の50%が女性だ ということです。この数値には本当に驚き、同時にま だ男女に差がある日本を情けなく思いました。また女 性が畜産業に携わるうえで多くのメリットがあります。 男性より手が小さいので人工授精の時に牛への負担が 小さいこと。注意深い女性の方がトラクターの運転に 向いていること。これらのことを聞いて自分自身への 自信にもつながりました。これからの日本には畜産業 を引っ張っていく女性の力が必要です。まずは私達畜 産アンバサダーが先頭に立って引っ張っていきたいです。 そして私は日本の畜産へのイメージを変えていきたい と思います。日本の畜産へのイメージと言えば、3Kで す。くさい、汚い、きつい・・・。どれも非常にマイナス なものです。しかし、ニュージーランドの人々にそう 言ったイメージは全くありませんでした。お金が儲か る、牛がかわいい、など日本とはかけ離れた考え方で す。確かに畜産という、動物に直接触れ合う仕事は大 変な仕事です。しかし「大変」という面では、どんな仕 事だって一緒なはずです。もちろん大変なこともある けど、それ以上に楽しいことや、やりがいを感じる瞬間 がたくさんあります。さらに自分できちんと計画を立 てれば休みを取ることができるので、趣味や家族との 時間を楽しむこともできます。きっと私たちが想像す る以上に畜産という仕事は様々な魅力にあふれてい ます。このような畜産の魅力を自分でも探しながら日 本中へと発信していきたいです。

「パッションと長靴があれば酪農はできる」ニュージーランドの女性酪農家の言葉です。ニュージーランドはそれだけの環境が整っているということでしょう。この言葉を聞いたとき、私は自分の中に新しい風が吹いたように感じました。いつか私も日本でこの言葉が言えるような日本の畜産業の未来を創っていきたいです。



#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

私は将来、畜産という仕事を見て、体験して、学ぶことのできる観光牧場を経営したいと考えています。ここで小さな子供からお年寄りまで、幅広い年代に畜産の魅力を発信していきたいです。少しでも畜産につて知ってもらい、今の日本の畜産を一歩立ち止まって見回してみてほしいです。目指すのは、「畜産っていな」と思ってもらえるような牧場です。そのために、まず高校卒業後は農業系大学に進学します。そしてけていきた知識を学ぶとともに実践的な技術を身に付けていきたいと思っています。また、機会があれば外国に行き、世界の畜産を学び、畜産アンバサダーとして学んだことを日本に合う形で広めていきたいです。

# 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

「畜産」という仕事は動物と直接かかわるとても大変な仕事で、楽な仕事ではありません。しかし、牛が大好きな私にとっては魅力がいっぱいの自慢できる仕事です。そのため、ニュージーランドでの研修は新しい畜産の魅力を見つけるいい機会となりました。高齢化による人手不足から衰退していく日本の畜産にストップをかけるのは私たちの若い力です。日本の畜産を守り、さらに発展させていくためにも力を合わせて頑張りましょう!



熊本県立菊池農業高等学校 畜産科学科 3年

#### 加藤星菜

#### 1. テーマ

ビジネスとしての畜産(攻めの畜産)

#### 2. キーワード

6次産業化

#### 3. キーワードの繋がりと考察

「ビジネスとしての畜産」というテーマで、「6次産業化」について考えたとき、研修前はニュージーランドー戸あたりの飼養頭数が多く規模が大きいため6次産業化が盛んに行われていると考えていました。日本では比較的、規模が大きい牧場が積極的に6次産業化と較い、自分の牧場で生産した生乳を商品化したいと考えている酪農家が多いイメージがあります。その一方で、6次産業化に失敗し借金が残ったという話したのようで、6次産業化に失敗し借金が残ったという間きます。そこで、ニュージーランドの酪農家は商品化をしたりような付加価値を付けているか、そしてどのような経営戦略をとっているか疑問に思ったため、「6次産業化」というキーワードに設定し、このキーワードを中心に現地で「ビジネスとしての畜産」を学ぶことにしました。

実際にニュージーランドのタラナキ地方での研修を 終え、テーマとキーワードから導かれた答えは6次産 業化をしている酪農家はとても少なく、自分の牧場で 生産した生乳を商品化したいと考えている酪農家は ほとんどいませんでした。しかし、自分の牧場で生乳 を販売することに成功している 「ドリーズミルク」で は、ニュージーランドの平均飼養頭数500~600 頭の中、15~20頭の搾乳で経営を成り立たせてい ました。経営や牛についてのお話を聞くと、急速冷却 以外の殺菌処理をしていない・雄牛はA2の遺伝子を 持った個体を使用する・無添加で放牧による飼育方 法での付加価値を付けていました。このような付加価 値が付いていながら、ニュージーランドの牛乳の平均 相場より安く販売することで、生産乳量160~200 ℓのうち約150ℓが売れています。わざわざ牧場に 出向いてまで一日60人以上が買いに来る、これは生 産者と消費者の信頼があるからこそ可能な販売方法 であると考えました。

日本の畜産(酪農)もさらに個々の牧場が積極的に6次産業化をしていくことも、経営戦略の一つだと感じ

ました。「ドリーズミルク」のようにうまく付加価値を付け、消費者のニーズを考え経営をすることで儲かることができます。牧場名の「ドリーズミルク」はオーナーが大好きな歌手の名前(ドリー・パートン)からとっている、私からしたら、酪農経営を楽しんでいるように思います。「生産者が楽しい酪農経営をやることが、おいしい牛乳を生産し、消費者とのつながりを持てる」と身をもって感じました。日本の酪農は時間と場所、そして労働で追われています。

更に日本の酪農経営を「楽農経営」に持っていくことが、日本の酪農の発展には必要なことと考えます。

#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

現在、日本では大規模農家が増え、小規模農家は離農していくという問題があります。ニュージーランド研修で様々な酪農家の方々のお話を聞き、この問題は日本だけでなくニュージーランドでも共通なことを知りました。大規模農家が増加すると、法人化が増えます。企業化すると独占や利益追求になっています。その中で、小規模経営の役割について考えさせられました。それは、地域から見て小規模農家の必要性や役割が大きいということです。小規模農家が地域から消えたら酪農の良さや魅力を伝えることができません。これは両国にまたがって重視すべき課題であることも考えることができました。

また、日本で壁が高いとされている新規就農に関して、ニュージーランドで日本でも取り入れたい「シェアミルキング制度」というものがありました。シェアミルカーは最初から自分の牧場を持つのではなく、他の牧場で働きます。資金がなくてもやる気があれば始めることができ、技術を学ぶことや、将来牧場を持つための資金を貯めることができます。この制度が日本にあったら、新規就農者は安心して就農でき、且つ失敗することがほとんどないと思うので、農業の担い手が増えていくと思います。なので、これから畜産アンバサダー活動で積極的に伝えていきたいです。

#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

- ① 「男性ができるなら女性もできる」というニュージーランド女性の考え方を日本にも定着させること。
- ②自分にあったワークライフバランスを考えること。
- ③酪農の魅力

この3つを広めていきたいです。日本では男尊女卑の考えが残っていて、男性が多い職種では女性が働きにくい場合があります。また、仕事により趣味や家族

との時間がなく、息抜きができていないことが多いと感じます。そして、酪農のことをあまり知らず、悪いイメージを持っている人たちに酪農の魅力を発信する活動などをして、これらの問題を少しでも改善していくことで女性の働きやすい環境へとつながるのではないかと考えました。

そして、それらが広まると畜産業は、

- ①男尊女卑から男女平等の考え方となり、女性の働ける仕事の幅が広がることで女性差別がなくなり、快適に仕事ができるようになるかもしれない。
- ②自分に合ったワークライフバランスを考え、趣味や 家族との時間を作ることで、息抜きとなり作業効率が 上がるかもしれない。
- ③酪農をしたいという人が増え、担い手不足問題の改善や、3Kなどの悪いイメージをなくすことができるかもしれない。

上記のようになっていくと考えます。

女性が活躍する理想の畜産業とは、女性が安心して 子育てができる環境で、男性と女性で苦手な部分を 補い、対等な立場で意見を出し合い、お互いを高め あっていくことだと思います。また、「女性には無理だ ろう」という考えをなくすため、女性が積極的に経営 に携わっていくことも活躍するために必要だと考えま す。これから、男性だけでなくたくさんの女性が活躍 したら、日本の畜産業は更に向上していくと思いま す。

#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

私の夢は自分の牧場を持ち、ニュージーランドのように牛たちがのんびりと暮らせる放牧酪農をすることです。実家は非農家で新規就農をしなければならないので、これから夢の実現に向けて酪農の知識を更に深め、実際に牧場で働き経験を積んでいきます。また、日本では酪農に対し良いイメージを持つ人が多いと思います。一方ニュージーランドでは酪農はとても身近な存在です。多くの子供たちに「酪農は楽しい!」と思ってもらえるよう、「酪農教育ファーム」などを盛んに行い、にするも、「酪農が身近になるように活動していきたいです。そして、日本の酪農を盛り上げる一人になるためにこれから頑張ります。



# 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

日本では当たり前だと思っていたことが毎日覆される 刺激的な10日間でした。実際にニュージーランドの 酪農家のお話を聞いたり、酪農を体験したりする中 で、ニュージーランドと日本の酪農を比較し、両国の 良さも身をもって感じることができます。更に、全国各 地から集まる20人の仲間たちにも感化され充実した 研修になりました。海外に行くことに対して心配があ ると思いますが、それ以上の貴重な学び、体験がある のでぜひ挑戦してみてください!



73

7.



鹿児島県立鶴翔高等学校 農業科学科 3年

#### 内野 佳奈

#### 1. テーマ

家畜や自然のための畜産(アニマル ウェルフェア)

#### 2. キーワード

飼料

#### 3. キーワードの繋がりと考察

私の学校には乳牛がいないため、ニュージーランド研修に参加する前に学校近くの酪農家の下で酪農研修をさせてもらった。そうすることで日本とニュージーランドでの飼料の与え方の違いが分かると思ったからだ。この研修農家では乾草を与えた後、濃厚飼料を与えて、搾乳の際にさらに濃厚飼料を与えていた。乾草だけでは脂肪分が低いためだと教わった。そのこともあり、今回私が行くニュージーランドでも広い土地で牛を飼う放牧が主体だが、粗飼料だけではなく乳成分が低くなるため、日本と同じく濃厚飼料もしっかりと与えていると考えていた。

しかし私の考えていた放牧と実際のニュージーランド での放牧は大きく異なっていた。最も驚いたことは濃 厚飼料をほとんど与えないということだ。ニュージー ランドの給餌方法は、限られた敷地内を効率よく使う ために移動式の電気牧柵を張り、春から夏にかけてイ タリアンライグラスやペレニアルライグラスなどの牧草 を与え、冬は牧草の生育が遅いため、日本同様、夏に 刈り取った牧草を与えていた。また、トウモロコシやタ ピオカペレット、DDGといった濃厚飼料を搾乳時と 冬場の給餌時のみ与えていた。ニュージーランドでは 濃厚飼料の給与量が日本に比べて非常に少ないこと が分かった。粗飼料を多く、濃厚飼料を少なくするこ とにより、ニュージーランドの牛は乳房炎になりにくい ということも分かった。ニュージーランドの放牧スタイ ルは、牛がのびのびと広い範囲で過ごすことができる だけでなく、病気のリスクも軽減でき、さらに飼料代 のコスト減にもつながる牛にとっても人にとってもすば らしい飼育方法だと感じた。

この放牧スタイルを日本に導入することは非常に難しいと思う。その理由として、放牧できる広大な土地が少ないこと、「少ない頭数から多く乳量を得たい」という日本の考え方に合わないことがあげられる。しかし、放牧はできなくても日本独自の牛の過ごしやすい環境づくりはできるはずだ。例えば、濃厚飼料に頼らず脂肪分を現在のように維持できる栄養価の高い牧

草作りを研究することで、乳房炎になるリスクを軽減できるのではないかと私は考える。

「牛をリスペクトしている」、「牛はパートナーである」というニュージーランドの考え方を、私は「牛は産業動物だ」という考えを持つ日本の畜産業でも広めていきたい。そして、家畜と人が共に快適に過ごせる畜産業を目指していきたい。



#### 4. ニュージーランドの農業を目の当たりにして 考えたこと

①畜産業のイメージが異なる~酪農は楽農~

日本の畜産業は3K(きつい、きたない、きけん)とよく言われるが、ニュージーランドでは「お金持ち!楽しく生活している!」というプラスなイメージだった。その背景にA2ミルクの開発やシェアミルキングシステム、EIDレーダーやネックストラップなどの最新技術の導入で、小規模農家でも稼げる体制があった。日本でもこれらの技術を導入し「ラク(楽)に、たの(楽)しみながらできる農業=楽農|を目指したいと

#### ②女性が働ける環境

思った。

75

~ジェンダーギャップのない国を目指して~

日本では「力仕事は男性の仕事」のようにまだ分業をしているが、ニュージーランドでは「男性のできる90%の仕事は女性もできる」と言われている。それだけ男女比較せずに農業は行われている。また、女性はマルチタスク、きれい好き、思いやりがあるなど逆に男性が苦手なことができるため、よりよい農業をするためには女性の存在は大きいと気づいた。

#### ③環境保護とアニマルウェルフェア

ニュージーランドの酪農では放牧をしているが、放牧するためには国が定めた条例を守らなければならない。例えば、川から5mの範囲にはフェンスを立て牛の侵入を防ぐ必要がある。これは牛の糞尿による水質汚染を防ぐためだ。また、この範囲内に植物を植えると政府から15~50%の補助金が出る。このように牛の過ごしやすい環境を作りつつ、環境汚染を防ぐを力を国がサポートしている。日本も持続可能な農業をするために環境に配慮した政策にも力を入れるべきだと感じた。

#### 5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとして、畜産業としてのビジネス の可能性について広めていきたい。

私はニュージーランドの農業を目の当たりにして、「畜産業はやり方次第で稼げる」と感じた。ニュージーランドには、A2ミルクの開発やシェアミルキングシステム、EIDレーダーやネックストラップなどの最新技術の導入により小規模でも稼げる体制が確立されていた。きつくて稼げない畜産業は時代遅れだと私は考えている。

特に「シェアミルキング」というシステムは、畜産業に 従事したいが、資金や土地がないため酪農ができない 人のためにあるシステムで、アシスタントから始まり、 次第にステップアップしていき、ゆくゆくはオーナーに なれる。このシェアミルキングの考え方は酪農業だけ でなく肉用牛や豚、鶏など他の畜産業でも可能であ ると私は考える。このシステムが構築されれば、畜産 業の担い手不足も軽減されるだろう。

現在の日本の畜産業では、私はまだジェンダーギャップはかなりあると思う。私は畜産業でも男女格差のない働く環境こそが理想の畜産業だと考えている。「女性だから」というマイナスなとらえ方ではなく、「女性であること」をプラスにとらえることにより男女格差を軽減できると私は考えている。例えば、女性は女性ならではの思いやりがあると言われている。そのため、子牛の体調変化にいち早く気づくことができるそうだ。他にも、マルチタスク、きれい好きなど畜産経営をよりよく行う上で欠かせない存在だと私は感じた。

#### 6. 自分の夢、これからやりたいこと

私には高校入学当初から決めていた夢がある。それは 牛に携わる仕事に就くことだ。高校入学後、毎日牛の 世話をするうちに、その気持ちはさらに強くなって いった。そして、繁殖・肥育一貫経営を行う地元企業 に就職することが私の今の目標である。

就職後は、繁殖部門に入り、女性らしさを生かし子牛の管理を行っていきたいと考えている。また、ニュージーランド研修での学びを生かして、鹿児島の畜産業を盛り上げていきたいと考えている。

76

# 7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

学校の畜産、鹿児島の畜産しか知らなかった私だが、このプロジェクトで出会った仲間との交流、ニュージーランドでの研修を通して、日本各地の畜産、海外の畜産について目を向けることができ、多角的に畜産業について考えることができるようになった。そして、この学びを生かし日本の畜産業を盛り上げたいと強く思うようになった。

「牛が大好き」なあなた、日本の畜産業は私たち若者が支えていかなければなりません。是非このプロジェクトに参加して、将来の日本の畜産業を一緒に盛り上げていきましょう!



# 参加者の報告



#### メンター

#### 菅 原 牧 場 藤田 春恵

ニュージーランドから学んだ人材育成と畜産業 におけるジェンダーフリーについて ~良い育成牛作りは酪農経営の基礎~

#### 1. はじめに

私は酪農家に生まれ、現在両親と一緒に酪農に従事 しているが、私の弟は学生生活を終えた後上京し、1 次産業とは全く違う職に就いている。両親は自分たち の子供の進路について一切強制も反対もしなかった ので、私は幼い頃からの自分の家である牧場で働き たいという夢のために学び、経験を積み、就農したの だが、就農以降、「弟さんはいつ帰って来るの?」そし て結婚後は、「いつから旦那さんと一緒に牧場やる の?」とよく尋ねられる。(酪農をやりたくて就農した のは私なのに、何故みんなは特に牛に興味があるわ けでもない人に「男」という理由で後継者の期待を寄 せるのだろう?)

縁あってこの事業に関わらせていただき、この疑問と 再び向かい合う機会ができた。

また、私の住む岩手県西和賀町という地域は過疎と 高齢化が深刻な問題であり、農業を仕事として選択す る若者はとても少ない。その中で畜産就農人口は更 に少なく、同町の同世代の女性で畜産業に携わって いるのはおそらく私一人である。孤独、とまではいか ないが、同じように子育てをしながら酪農をしている 仲間がいればもう少し地域の酪農の未来が明るく見 えるだろうな、と思うことは時々ある。

そこで今年もメンターとして同行させていただくにあ たり、個人的なテーマとして上記表題を据えることに した。本事業のタイトル、「未来の畜産女子育成プロ グラム」に準えて「未来」「畜産女子」「育成」をキー ワードに筆を進めていきたい。

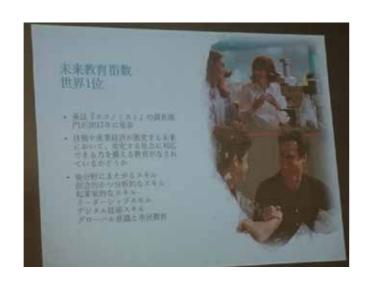
#### 2. 未来

本事業の現地研修に先立ち、6月に東京で行われた事前 研修時にニュージーランド(以下NZ)大使館への表 敬訪問があり、ここで政府機関のEducation NZの担 当の方から興味深いお話を聴くことができた。

NZは未来教育指数が世界1位である。未来教育とは 技術や産業経済が激変する未来に於いて、若者が有 望な人材として働き、変化する生活に対応できる力を 備える教育で、未来教育指数は彼らに与える教育環 境として、他分野にまたがるスキルやリーダーシップ、 デジタル技術スキルやグローバル意識など6つの項目 について調査した指数である。自国の教育政策や ジェンダー、多様性などについての教育も含まれる。

近年の酪農を取り巻く環境の変化は凄まじい。気象、 経済、世界情勢など、半世紀前なら変化に10年要し たものが今日では刻一刻と変わってしまう。酪農家に はより変化対応できるような経営者スキルが求められ るのだが、この未来教育は酪農に於いても早期からの 人材育成に大きく貢献していると思われる。

現地の視察先の農場主も、広大な農地と沢山の家畜 を管理するためにIoTやITを上手く取り入れながら省 力化を図り、正確なデータから経営分析を行ってい た。放牧というと古典的なイメージを持たれがちだ が、NZの放牧酪農は牧草の生育から乳質、家畜の個 体の遺伝情報まで、詳細なデータに裏打ちされた科 学的な経営手法である。これを実践するにはやはりIT スキルが欠かせない。また、労働者の雇用や、乳製品 の殆どが海外への輸出に向けられている乳業メー カーとの関わり方等、経営者に必要な要素を若いうち に学べる教育システムは酪農を志す若者にとって力強 いサポートだと感じた。



#### 3. 畜産女子

NZは男女格差指数が世界7位(2018年)と、男女間 の格差がとても少ない国である。若き女性首相アーダー ン氏も日本で度々メディアに登場し、知名度も高い。で は、実際にNZ女性は日本人と比べてそんなにも才覚に 溢れ、男性にも勝る強さを兼ね備えているのだろうか。

参加した高校生達は視察先で「女性が畜産に関わるこ とについてどう思うか?」という質問を何度もしていたが、 その回答は揃って「素晴らしいことだと思う」であった。

よって当初彼女達は、「女性は」畜産業に向いている。と いう結論に向かおうとしていた。だが、よく考えてみると 仕事における男女差意識が元々ない国である。質問され る側からすれば、畜産に関わるのが男性でも子供でも友 達でも、彼らはきっと「素晴らしいことだと思う」と答え るのではないだろうか。(実際、現地で会ったのは特別 に逞しいわけでもない、チャーミングで気配り上手な日 本人女性と変わらない女性達だった。)

つまり、NZ人は男女に関わらず畜産という仕事に就くこ とについてポジティブなイメージを持っているのだ。その 中で、例えば女性にはペーパーワークや幼獣の哺乳等の 飼養管理が向いていて、男性は機械操作や力仕事を担 当というように分業しており、互いをビジネスパートナー として尊重し、協働できることが「素晴らしい」と考えて いるのである。

また、本来力仕事であるはずの作業が前述したIT等の導 入により容易になっていることも女性が畜産の現場で働 きやすい追い風のひとつなのだろうと想像する。

ヒアリングを重ねた高校生のこの気づきは、彼女達が将 来畜産を生業とする際に役立つ大きな収穫だと思う。 NZという社会では、人々は「平等」をベースにして、男女 や個人の得手不得手を補い合いながら 「公平」 に生きて いる。努力や経験を積んだ人の能力は、男性であっても 女性であっても適所で生かされるという概念が、私たち 日本人には「男女平等で女性が活躍している国」に見え ているのかもしれない。

#### 4. 育成プログラム

本事業は、単に動物好き高校生を外国の視察に連れ ていくのが目的ではない。参加者は帰国後畜産アンバ サダーとして、それぞれが見聞してきたことを基に畜産 の魅力を広く世間の人たちにPRするというミッション がある。アンバサダー活動は主に校内、あるいは其々 の暮らす地域内で行われるが、本事業の現地研修部 分を経た今、彼女たちは、以前にも増して日本や自分 の暮らす地域の畜産、特色、課題などについての意識 が向上している。現地研修中にその兆しが見えた生徒 もいる。一人の生徒は研修の終わりに「自分はNZで 学んできたことを地元に還元したい|と言っていた。 地域に酪農家があることは、今や単に近場で牛乳が 生産できるということのみならず、人が口にする食べ 物と生産の現場をつなぐ食育となり、分娩をはじめと

した牛の繁殖のサイクルは(時には死亡なども)命に ついて考える機会であり、また、広大な牧草地は酪農 家が草を刈り、牛が食べることで中山間の美しい景観 保全の役割も果たす。

研修を終えた20名の高校生たちは既に、その酪農が 持つ多面的機能を生かし、担い手不足や農業従事者 の高齢化等の問題解決のためのアイデアを創造する 「人材=人財 | なのである。

人材育成は酪農経営とよく似ている。酪農家が儲け を得るためには乳を搾らなければならないが、牛が乳 を出すためには受精→妊娠→分娩の過程が必要だ し、良い発情が来てきちんと種が止まり、沢山乳を出 す良い牛になるかは哺乳期の仔牛の管理で決まる。 自家育成で経営しようとするとものすごく迂回生産な のだ。

今はまだ仔牛のようなキラキラした瞳の高校生が10 年後、日本の畜産業界の一翼となるとすれば、今年度 で2回目になるこの事業からは既に40名の畜産女子 が生まれたことになる。彼女達は、今現役で酪農に携 わっている世代にとっても頼もしい存在である。私が 就農した15年前、「農業女子」や「畜産女子」という 言葉はまだなく、畜産業界の女性は点在という程度 だったように思う。

今後この事業の継続や啓蒙により、仕事についての男 女間格差はないと気づいた若い畜産女性のネット ワークが拡充していくことは、その少し先を歩く私た ち世代のモチベーションも刺激し、結果として畜産全 体のボトムアップにつながると想像する。

まだ十代の高校生。されど大人になるまでは一瞬の 高校生。彼女たちの若く柔らかい発想を持った頭と、 強くても折れない女性らしいしなやかな心は、この時 期に育むからこそ意義がある。今の日本の畜産業界 は、そこを大人が一生懸命取り組まなければならない 時期にきているのではないだろうか。

良い育成牛作り(=人材育成)が良好な酪農経営 (=畜産業界の活性化)につながるのである。



# 6. 参加者の報告



#### メンター

京都大学大学院 地球環境学舎 環境マーケティング論分野 博士後期課程

#### 光成 有香

#### 1. はじめに

ニュージーランド(以下NZ)は、大きく分けて北島と南島の2つから成る。昨年度は南島南端のInvercargill、今年度は北島西部のTaranakiと、いずれも酪農がさかんな地域を拠点に、大小規模の酪農経営、肉牛市場、乳業メーカー、農業資材店の視察を行った。NZの生乳生産量自体は世界全体の3%程度だが、人口が少なく国内需要が限られるため、生乳の9割は乳製品として輸出され、全粉乳とバターはともに世界貿易の6割を占める。

このように高い国際競争力を持つNZを含むTPP11に加え、日EU EPAの発効、日米FTA交渉の進展を受け、日本の乳製品市場が開放に向かう中、日本でも酪農の競争力強化が求められている。

何をもって「競争力」とするか。その指標は多岐に亘るが、NZ酪農の場合、価格競争力をはじめ、製品の品質、アニマルウェルフェア(以下AW)や環境への配慮においても高い水準を誇る。驚くべきは、こうした産業成長を農業補助金なしで成し遂げてきたことである。1970年代のオイルショックとイギリスのEC加盟による市場喪失で、NZ酪農は大きな打撃を受けた。その後、ロジャーノミクスの行政改革で小さな政府化が断行され、農業補助金が廃止された。しかし、それでもなお酪農はNZの基幹産業であり続け、国際市場を席巻している。

そこで、本報告書では、NZ酪農の強みである価格競争力、品質競争力、サスティナビリティ、産業人材育成の4点に注目して視察の成果を整理する。その上で、なぜNZ酪農が政府の支援に頼ることなく今日の競争力を実現できたのかについて考えてみたい。

#### 2. 研修成果と考察

#### 1)価格競争力

年間を通じ温暖湿潤なNZでは、その風土を最大限に生かす酪農経営が行われている。

第一に、周年放牧による牧草飼養である。牧草の生育期に合わせた季節繁殖を行い、冬季もビートの直接採食や自家サイレージ給与で飼料費を極めて低く抑えている。搾乳舎以外の設備を持たず、物財費も

少ない。北島は南島に比べても牧区が細かく、集約度が高い。Taranaki東部の丘陵地帯の酪農経営では、耕地としては条件不利な急傾斜地も余すところなく活用していた。乳価低迷時には補助飼料を減らして低コストの青草飼養を徹底したり、少ない搾乳回数で燃料費・人件費等の削減に努めたり、肉牛や羊との複合経営によるリスクヘッジも見られた。

第二に、MS (乳固形分)を基準とする独自の乳価形成システムに合わせた品種の導入である。日本で飼養される乳牛の99%がホルスタインであるのに対し、NZではより放牧と乳製品加工に適する品種として、高泌乳のホルスタインと小柄でMS含有量が多いジャージーのクロスブリードである「キウイクロス」が多く採用されている。

第三に、放牧やIoTの導入により牛群管理と搾乳の 効率化を図り、労働生産性を高めている。Taranaki 地域最大級の大規模酪農経営TREWITHENでは、 IC耳標管理とロータリーパーラー搾乳により省力化 を図り、近年の人件費上昇にも対応していた。

こうした徹底的な低コスト経営に加え、フォンテラによる合理的な流通網によって高い価格競争力を 実現している。FONTERRA DEMO FARMではさらなる効率化を目指した品種改良や飼養技術の実証 研究が進められており、積極的な情報発信を行っている。

#### (2)品質競争力

放牧地面積に飼養規模を規定されるNZでは、これ以上の牧地面積の拡大は難しく、今後生乳の大幅な増産は見込めない。そのため、高品質化による有利販売を目指している。

NZの乳製品はグラスフェッドというだけでも付加価値が高いが、フォンテラは特色ある牛乳の開発に注力している。その一つが、消化不良の原因とされる $\beta$  カゼイン- A1を含まない A2ミルク」である。その機能性については未だ科学的根拠に乏しいものの、フォンテラでは既に製品化に踏み切っている。現在のところA2ミルクの集乳地域はWaikato地方に限られるが、将来的には生産拡大の可能性も高く、プレミアム取引を見据えてA2を意識した繁殖を行って備える経営も見られた。

一方、小規模酪農経営Dolly's Milkは、乳牛15~20頭、1日1回搾乳というミニマル経営で、近隣消費者をターゲットに高品質の無殺菌乳を自販機販売するニッチビジネスを展開していた。日本の牛乳は殺菌が義務付けられているのに対し、NZでは2015年から無殺菌乳の販売が許可されている。牧場外販売禁止や厳しい品質管理が求められるなど条件は厳しいものの、殺菌処理施設も店舗も必要なく、初期投資を抑えた6次産業化が可能である。

#### (3) サスティナビリティ

畜産物市場におけるAWや環境配慮の重要性は、ヨーロッパを中心にますます高まっている。NZでは元来、飼料費と労働力の削減を狙いに放牧酪農が行われてきたが、AW水準の向上にも寄与している。その評価は世界的にも高く、世界動物保護指数では最高ランクにカテゴライズされる。若手女性酪農家、Hollie Wham氏他、複数の視察先で、思いやりをもって接すれば牛も健康になり、結果として自らの利益にもなる旨の話が聞かれた。これは昨年南島の視察でも多く聞かれた意見である。

畜産の環境負荷に対しても風当たりが強くなってきている。集約度が高く、都市近郊でも畜産が行われる北島では、家畜糞尿による水質汚染がとりわけ問題視されており、2020年から川縁の土壌流出防止のための植林が義務化される。これに先駆け、Taranakiを端緒として植林費用の助成事業が行われ、全土へ拡大しつつある。

#### (4)担い手育成

産業振興と競争力強化には、それを担う産業人材の 育成と確保が欠かせない。Young Farmersは、農業に 興味を持つ若者に対して情報交換会やボランティア の出前授業を行う。政府によって設立された第一次 産業の実務者養成組織Primary ITOは、実務に必要 な専門知識や技能の習得のための研修を行ってい る。就農希望者は、こうした研修機関や大学等で基 礎を学び、既存経営でワーカーやシェアミルカーと して経験を積み、資金が貯まれば自らの牧場を持ち オーナーとなれる。キャリアパスが明確で参入しや すく、第三者継承もさかんである。また、大学やポリ テック(専門学校)の農業系学部で学び、銀行等の 経営アドバイザー、飼料や土壌の専門コンサルタン ト、資材業者やコントラクターといったサポーティン グ・インダストリーに就職する人も多く、女性の活躍 も目立つ。

ファームマネージャーやオーナーはまだまだ男性の 方が多いものの、男女差を意識したマインドセット は感じられない。

昨年度と同様、「力で男性に及ばずとも分担したり工夫したりすることができる」「母性による本能的な思いやりは女性のアドバンテージでもある」との意見も聞かれた。前出の.Hollie Wham氏は、パートナーから「牧場で彼女ができない仕事はなく、彼女の方が優れているところも多い」との評価を得ていた。また、女性酪農家による若手育成や生産者交流の場として機能するDairy Women's Networkなど、女性の活躍を支援するコミュニティや活動が充実している。

#### 3. 所感

NZ式放牧酪農は、コスト、品質、サスティナビリティといった多くの面で優れている。NZの酪農産業がこうした競争力を獲得した背景には、恵まれた気候に加え、農業が保護されていた時代に、補助金が単なる所得補填ではなく、生産性や競争力強化につながる放牧地整備、家畜育種、人材育成等に充てられたことにより、産業全体の振興に繋がったことが大きいだろう。特に、丘陵地を含めた未利用地の開拓と耕作放棄地の再整備が奨励され、徹底した放牧地拡大が図られたことは、その後の家畜増頭の礎になったと思われる。

そうして、補助金廃止後も国際競争の荒波に揉まれながら自らの経営努力で乗り切ってきたことこそが、 今日の酪農家の独立心と誇りとなっている。今日では 国からの助成を求める現場の声は少ない。

こうしたNZの成功、すなわち競争力形成の過程を、そのまま日本に適用することはできない。ただし、風土を生かして身の丈に合った経営スタイルや、状況にでじて柔軟に適応しようとする姿勢、ワークライフバランスを重視する価値観など、学ぶ点は多い。日本では、大半の酪農家がほとんど休みなく働く。1日2回の搾乳、給仕、牛舎清掃など日々仕事が山積し、NZのような長期休暇取得は困難である。しかし、輸入飼料の高騰により乳飼比は上昇し、個体乳量の向上も頭料の高騰により乳飼比は上昇し、個体乳量のの酪農家が甘受してきた。しかし、昨今、放牧による省力化飼料をある。これまでこうした現状を、多くの酪農家が甘受してきた。しかし、昨今、放牧による省力化飼料生産による飼料費削減など、従来の輸入飼料多給型の舎飼い酪農が見直され、徐々にではあるが、努力と創意工夫で現状を打破しようとする酪農家が出てきた。

そうした状況の中で、次世代を担う未来の畜産女子たちが、日本を飛び出し異国の酪農に直に触れ、自分が知る方法以外の選択肢を知り、若い女性農業者たちが生き生きと働く姿に憧れ、具体的な目標を見いだす機会を得たことの重要性は大きい。そんな彼女たちの学びを微力ながら手助けできたことを誇りに感じつつ、アンバサダーとしての今後の活躍に期待したい。



#### 現地研修 引率教員

#### 富山県立中央農業高等学校 教諭 **千田 なつ紀**

#### 1. はじめに

農業高校に勤めている英語教諭として、私は生徒に何を 伝えられるだろう。日々悩みながら勤務していた私に とって、この研修に参加できたことは非常に意義のあ ることであった。事前研修はもちろんのこと、ニュー ジーランド(以下NZ)での研修はとても充実した日々 であった。中でも生徒たちの成長は目を見張る物があ り、そのスピードに驚かされた。今後もこの事業が継 続され、1人でも多くの生徒が成長する場となるように 願いを込め、今回の研修の成果と課題をまとめた。

#### (1)参加生徒について

昨年同様に、JAECが全国の農業高校から20名の生徒を選抜した。昨年と違い1年生が募集の対象から外れ、また各学校から最大1名の生徒という制限も設けられた。そのため3年生12名、2年生8名というメンバー構成であった。知識があるという点では、学年を絞るのも1つの方法であると思うが、入学当初から酪農をしたいという強い気持ちを持った1年生もいることを考えると少しかわいそうにも感じた。

研修当初は何を質問していいかわからなかった生徒が多く、特定の生徒だけが発言する状態であったが、メンターからのアドバイスを受けることで課題をどのように解決していけばいいのかが明確になり、どの生徒も積極的に質問するようになった。ESOLでの実践的な英語会話も生徒の自信につながった。

その結果、最終日には質問する時間が足りなくなるほど、生徒たちは競うように発言をしていた。研修後半になるとチームワークが芽生え、課題解決に向けて互いの役割を確認、分担し合う様子が見られた。アンバサダーとしての自覚が芽生えていく様子は、頼もしさを感じた。しかしチームで行動することがメインになりすぎてしまい、最後まで関わり合いを持たない生徒たちもいた。20名全員がメンバーの名前を覚えていなかったのは残念なことであった。

#### (2)事前研修について

1人、また1人と集まってくる生徒たちは緊張した面持ちであったが、打ち解けるまでにそう時間はかからなかった。席で恥ずかしそうに俯いていた生徒も、人前に立った途端に堂々と大きな声で自分の思いを語り始めた。NZ大使館では緊張感のある雰囲気がより一層、生徒の団結を高めたように思う。

酪農の知識については、メンターの2人から自己紹介

と合わせて指導があった。しかし、畜産に関する知識量が生徒によって違うため、理解に差があったように思う。事前研修前に、最低限知って欲しい知識について宿題を出し、事前学習させるのも1つの方法ではないだろうか。

本来ならば自ら積極的に学習してくれるのが理想だが、それは難しいのが現状だ。ある程度こちら側が範囲を絞り、各自で学習させることが必要だと思う。

研修報告会のテーマ選定にも苦戦していた。今まで学んだ知識に捕らわれすぎて、なかなか柔軟に他の意見を取り入れられない場面もあった。

拘りを持つことは良いことだが、滅多に行けない場所 で見聞を広げられるチャンスなのだから、視野を広げ て欲しいと感じた。

事前研修で出されたリサーチ課題は非常に良かった。まず現地研修で質問したいことを身近な酪農家や先生にインタビューする。そして英語で質問する際に必要な英単語を調べてくるというものだ。課題の報告書を見ると、積極的な生徒の様子がよく分かった。このような「自分でインタビューできた」という成功体験が、現地での質問の意欲に大いにつながっていると感じた。

一方で、調べてきた英単語を活用できずにいた生徒が多かったように思う。調べて終わりではなく、それらの単語を使って各学校のALTにインタビュー内容を英語で報告する練習をするのも面白い。

全体を振り返って、もう少し生徒同士のコミュニケーションを増やす工夫が必要と感じた。本来は子どもたち同士で上手くコミュニケーションをとってくれることが望ましい。しかし前述したように、研修の最後までお互いの名前を覚えていない生徒がいた。同じ志を持ち、畜産アンバサダーとして活動していく以上、仲間の名前はしっかり覚えてもらいたい。

今回は昨年と違い各学校から引率の先生方が来ておられたが、かえってそれが生徒たちに甘える場所を作り、生徒同士のコミュニティを広げられなかった原因になっているようにも感じた。ESOLで行ったshort datingのように、生徒たちが1対1で会話できるようなアクティビティを取り入れるのも良いと思った。

#### (3) 研修日程について

現地での10日間は非常に充実した時間であった。現地コーディネーターのFleur先生のお陰と感じた。Fleur先生は日本でのALT経験もあり、日本語が堪能な方だ。そのためか、非常に細やかな配慮をしてくださった。

また、通訳のJJさんも素晴らしい方だった。最終的には生徒1人1人のテーマまでしっかりと把握し、的確な通訳をしてくださった。この2人の存在が現地での学びをより深いものにしてくれたと確信している。

まず何と言っても歓迎のHakaには感激した。マオリ

の伝統を大切にしている現地生徒の真剣な姿には圧倒された。また、Hongiという互いの鼻をすり合わせるマオリ伝統の挨拶も全員体験することができた。 生徒たちは滞在中、寮生活をしていた。日本人2名で1

全にたらは滞任中、寮生活をしていた。日本人2名で1 室だったが、学校の配慮で各部屋に1名ずつ現地の生徒を付けてくれた。お陰で英語での交流がスムーズになった。また、寮では子羊をペットとして飼っており、その世話を通してもコミュニケーションを図ることができていた。寮母さんも優しい方ばかりで、生徒たちは安心して寮での生活ができたようだ。このような環境が、体調不良者を1人も出すことなく研修を終えられた大きな要因であったと言える。

最も生徒を成長させたのは、2泊3日のファームステイだ。2~4名で1つの牧場に滞在した。出発する前は、ホストファミリーはどのような人なのか、英語しか通じない環境で過ごせるだろうかと不安がる生徒ばかりであった。しかしいざ巡回すると、生徒たちは溢れんばかりの笑顔だった。更には「どうして来たんですか?!」と巡回に来たことに不服そうな生徒までいた。そうなったのも、Big welcome!で迎えてくれた、NZの人の温かさがあったからだろう。各牧場では搾乳を中心に、子牛の世話や移動電気柵の設置など、様々な作業を行った。中には羊の解体をした生徒までいた。まさに現地の牧場ならではのことであった。

その他の視察先も多岐にわたっており、勉強になることばかりであった。セールヤードでは、日本の競りとは違う様子に生徒は夢中であった。フォンテラ社の資材店では、最新のICT機器を使った家畜管理ツールに驚いた。女性が活躍している牧場や、規模の違う牧場、搾乳設備が違う牧場、独特な方法で生乳を直売している牧場など、毎日違うタイプの牧場を巡った。フォンテラのチーズ工場を訪れた後にマクドナルドでそのチーズを実食した。農業の実務的なトレーニングを指導する団体、PITOの女性トレーナーたちからNZの酪農についてレクチャーを受け、一緒にバターも作った。全日程が非常に刺激的であった。

研修前半の午前中にはESOLという英会話学習の時間が設けられ、Fleur先生が毎日授業をしてくださった。5W1Hの活用を定着させる授業では、日本語を学ぶ現地の生徒と合同授業を行い、意思疎通が図れることの楽しさを学んだ。知っている英単語を使えばコミュニケーションが図れると気づいた生徒たちは、それ以降英語で発話することに恐れを感じなくなっているようだった。英語を話しながらお菓子作りもした。生活の中で使うことができる実用的な英語会話指導であった。

充実していた一方で、生徒たちにとっては少々情報過 多になっていたことも否めない。正直、大人でさえ整 理するのが困難に感じるほどであった。途中、情報の 消化不良を起こしている生徒の様子に気づいたため、 与えられた情報を共有して整理する時間を作った。他の生徒の話を聞くことで情報が整理され、深い学びにつなげることができた。今後の研修でも整理する時間を作ってほしい。また、ファームステイも必ず研修日程に組み込んでほしい。

#### (4) ニュージーランドで研修を行う意義

今回の研修では北島タラナキ地方のTARANAKI DIOCESAN高校で研修をした。畜産が主な産業の、のどかな田舎町だ。地元の人々にとって牧場は当たり前の風景であり、日本の畜産3K(きつい・汚い・臭い)のように、畜産を悪く言う人はいなかった。

また、酪農を学ぶ上で最適な国であるということはもちろんだが、女性として、1人の人としてどう生きるかを考えさせられる国であった。出発前、なぜNZでは女性が活躍しているのか、男性はどのようにサポートしているのかを漠然と考えていた。女性が首相の国だから女性に贔屓していることがあるかと思ったが、そうではない。そもそも、男性だから・女性だからと性別に捕らわれて考えることが間違っていた。できる人がやればいい。得意な分野で能力を発揮したらいい。だから協力することが大切だと考えているのだ。

また、男性ができることは女性もできると話す人が殆どであった。これには非常に衝撃を受けた。日本で女性が畜産に携わりたいと思っていても、現実的に難しい。畜産農家へ嫁に行くのが一番早いといわれるほどだ。しかしNZには、自ら酪農家になることを望んで努力をしている女性がたくさんいる。国が違い制度も違うため全てを真似することは不可能だが、NZの女性酪農家たちの考え方と行動力は間違いなく日本の高校生たちに勇気と自信を与えるものであった。

酪農家になるためのシステムも魅力的だった。特に「シェアミルカー」に魅力を感じた。これは牧場主から放牧地を借りて家畜を育て、利益も経費も29%~50%シェアする方法だ。若い酪農家たちは「シェアミルカー」になることで、将来自分の牧場を持つための資金を蓄える。私はこの制度を是非日本でも取り入れてもらいたいと思った。

そうすれば、やる気のある若い世代が高い志を持って 畜産業界に参入することができるようになる。そして、 畜産農家が衰退していくことを防ぐことにもつながる と考えられる。このように、すぐに日本に取り入れられ そうな方法もあれば、なかなか難しいと感じることも 多かった。特に放牧酪農を行うには、まず土地がない。そして気候もNZとは違うため、難しいのだろうと 思う。しかしそのような日本との大きな違いを学ぶことも、今後の日本の畜産業を発展させる上でヒントに なるように思う。

NZで研修をする最大のメリットは、やはりの人の温か さだ。ファームステイ先の家族や学校の先生方はもち

6. 参加者の報告

ろん、町の人々も穏やかで温かい。私たちが訪れたことを地元の新聞の第一面に取り上げてくれた。初めての海外を経験する生徒にとっても、安心して過ごせる国であった。

#### (5) 生徒の成長と指導

20名いれば、20通りの考えがある。生徒同士でうまく人間関係を構築できるだろうか、体調不良や怪我無く帰国できるだろうかという不安があったのは言うまでもない。しかしそんな心配をよそに、高校生たちは頼もしい成長を見せつけてくれた。

人の意見を聞き入れなかった生徒は、チームでの役割を通して柔軟に対応できるようになった。大人に頼らないと不安で仕方なかった生徒は、ファームステイを通して自分の行動に自信を持てるようになった。研修後半に入ると全体に積極性が生まれ、一体感も増した。特に、帰国してから研修報告会に臨むまでの集中力には感心した。彼女たちの中にはしっかりと畜産アンバサダーの自覚が芽生え、その第一歩である報告会で最高の発表をするために誰一人手を抜くことがなかった。報告会当日の発表を見て、彼女たちを心から誇らしく思った。

研修中は昨年に続き生徒たちに記録簿を書いてもらい、毎日添削した。私にとってこの記録簿は、生徒との大切なコミュニケーションツールとなった。しかし生徒にとっては少し負担だったかもしれない。真面目な生徒が多く、記録簿をまとめるために毎日遅い時間までかかっていたからだ。書き方のポイントをもっと明確にすべきだったと反省している。来年以降もこの記録簿は継続してほしいが、簡素化してもいいと思った。引率者の添削ポイントも絞るべきだと感じた。

この研修は学校の研修旅行とは違い独特な立ち位置にあるため、引率教員としてどの程度まで指導すべきか迷いがあったのが正直なところだ。その都度引率者で話し合い、役割を考えながら指導した。もっと私が積極的に動くべきだったと反省するばかりだが、引率メンバーに支えられて無事研修を終えることができたと思っている。

今回は大きな問題はなかったが、やはり20人がお互いの名前を覚えていなかったことがどうしても気にかかる。出会って間もないうちに現地へ出発するため仕方のないことだと思うが、女子生徒特有のグループ化が起こらないように工夫することが課題だと思った。

また、課題解決能力とコミュニケーション能力についてもメンバー検討の際には必要になってくると考える。例えば応募の段階で担当教員が提出課題文を添削するのは当然であるが、最終的に提出するものがあまりにも生徒が考えたものとかけ離れたものになってはいないだろうか。現地研修でのまとめは生徒たちで行う。

その時に自分の力でまとめられないと、失敗体験を積むことになる。そういう意味では出発前に、学校で生徒に課題解決に必要な知識と方法をアドバイスしておいてもらいたいと思った。20名が別々の場所から集まるため難しいと思うが、それを強みに変えた指導ができるように各学校の先生方との連携も大切にすると、より実のある研修になると感じた。

#### 2. 今後に向けて

今回の研修を通して感じたことは、とにかく日程が ハードであるということだ。しかしそれにも負けず、生 徒たちは懸命に日々の研修に参加していた。情報量 が非常に多いため、今回急遽作ったような情報整理の 時間を作ることが大切だと感じた。

プロジェクト参加者が今後どのような成長を遂げるかとても楽しみである。将来日本の畜産を担う1人として活躍してくれることを心から願っている。そして今後、1人でも多くの生徒や先生がこの研修に参加してくれるように、私も畜産アンバサダー2期生としてこの活動を広めたい。百聞は一見に如かず。多くの生徒たちに自分の目で見て、肌で感じて学んでほしい。

最後に、農業教諭ではない私にこのようなチャンスを下さったJAECの方々、メンターのお2人、 そして岸田校長先生に感謝したい。



TARANAKI DIOCESAN
School for Girls

#### 校長 Fiona Green

TARANAKI DIOCESAN School for Girlsは、設立 105年の歴史を持つ女子寄宿学校です。設立当初は、この地域の農家の娘たちに教育を提供するため、英国国教会の教会学校として設立されました。現在は、ニュージーランド政府から資金提供を受けており、タラナキ地方経済活性化の鍵として、この地方の多くの酪農家家族をはじめとした幅広い女子たちに教育の機会を提供しています。本校は、優れた学業成績を持ち、女子生徒を革新的かつ熱心な市民へと育てることに高い評価を得ています。特に酪農地帯にある本校において、生徒の多くは、農業に関する優秀な成績を収めています。



私は、本校の校長職を7年間務め、女子学校だけでなく、男子学校でも教鞭を執った経験があります。また、私は芸術学、地理学の学士号を持っているため、ニュージーランドの土地と資源の活用方法に強い興味を持っており、他国とその文化を学ぶことにも関心を持っています。他国や背景の異なる生徒と交流し、アイデアの交換、お互いを理解し合うことでさらに学びを広げ、他人に対してより寛容になることで、共同で問題を解決することができると本校の生徒に伝えています。

本校が、未来の畜産女子育成プロジェクトの研修受入学校になりたいと思った理由がいくつかあります。 本校には、長く姉妹校提携にある高等学校が日本にあり、交換留学プログラムの実施を毎年行っており、 日本と親しい関係があります。また、本校の国際言語の授業では、日本語を専攻することができ、この日本語を勉強したことがきっかけで、進学した大学で成功を収めた生徒もいます。さらに、本校の日本語教的は流暢に日本語を話し、このことが生徒たちの文くは略学びを深くしています。そして、本校の生徒の多くはな学びを深くしています。そして、本校の生徒の多くは路農力っているため、本プロジェクト実施期間中、寄経の中では、農業に基づいた生徒同士の知識を担当ることは、高品質の製品を海外に引することは、高品質の製品を海外に対することの重要性を理解することに役立ち、若い時にこのような経験をすることで、将来の進路選を与える機会になります。

そして、このプログラムの趣旨と目的に賛同しました。 畜産業における女性の活躍推進を目指し、日本の若い女性が、酪農家や、企業家として、成功することをサポートするこのプロジェクトは、本校が目指していること、価値観に非常に合うと思いました。本校で学んだことを通じて、20名の若者の将来成功を応援したいと思います。農業は、男性のものでもなく、女性のものでもありません。皆さんのものです。

このプロジェクトの経験を基に、夢を追いかけ、心を奮い立たせ、思う存分、一生懸命に頑張ってください。将来の活躍のため、今回ニュージーランドでできたこの関係を生かして、皆さんの活躍を心より応援しています。

若者よ、大志を抱け。



#### 北海道帯広農業高等学校 尾崎もも



これはNZで当たり的なな、ていろ考え方です。そのた め畜産現場でも皆、生さ生きとして働いていました。 「畜産は男の仕事」という考えは古いのです。女性は 力仕事を苦手としますか、その分を短恵や道具を使 、て補えます。逆に、母性をもって生に接し たリマルチタスク能力を活用するなど、女性に しかできないこともあります。女だかりといってい 畜産業を締める必要はありませんりり

始めやすい環境。

シェアミルキング制度 これは リスで新規が農するまでのキャリアパス です。この制度は、オーナーの元で働き、徐々に屏鎖 し、工地を買えるお金が貯まるとオーナーになれます。 また、シェアミルカーというオーナと収・経費を一定 の割合でシェアする段階かあり、現場での経験や 経営者としての経験を積みなからお金を約めれる ことか特徴です。日本にもこのような新規就農 まざの明確な道筋を提示し、倉産を始めた すい 環境を整える必要かあります!

NZの農家の方々は、楽しそうに仕事をしていました。そんな方々のモチベーションは… が酪農を仕事として促えていない。1つのライフスタイルなど思っているので仕事の感覚ではない。 実は、実際に従事している人が仕事を楽しみ、好きになることか一番大事かのです。

111

周りに良いイメージが伝わる!? そして、畜産業を目指す人が増えるな



意外と知らないかも!? 畜産業の魅力●

畜産は大変な仕事だと懸念されやすいです。しかし、すごく 魅力的な仕事でもあります。NZの人か言っていた通り、朝日と 共に起きて、牛と共に仕事をする。このライフスタイルか素適です。 買に、畜産は自分の個性を表せる職業だと思います。生産能力の 上を目指したり、放牧を行い、 牛本来の姿を重要視したり、やる 人収署で 様々な形の畜産があります。 こんな素晴らしい畜産 業に興味を持、てくれると嬉しいです。

#### 青森県立三本木農業高等学校 新屋敷真生



#### 岩手県立遠野緑峰高等学校 佐々木美咲姫

一今の日本の酪農は? 畜産の担い手について

今の日本は担い手が少な()!そして、沢山の補助金 制度があっても日本では課題が山積みな現状を考えると 日本の補助金制度はあまり活かされていないのでは?と疑問を 持ちました。

# ニューミ"・ランドでは?

担い手に困まることはない!とどの酪農家も口をそろえて言っていました。 理由としては若い人たちに優しい制度があるから!ヤンク"ファーマース" ヤニエアニルカー制度など。この制度があり国として農業を大切にしている! また、補助金についても「自分で始めたビニネスだから他人のお金には 頼らない」と強く言っていた。そしていから楽しんで酪農をしていました。

# 私かじれから出来ること。。。

今回、NZに行って学んだことを1人でも多くの人に伝え たいです。そして、沢山の酪農家に信頼してもらえるような 家畜人工授精師になることです。そして最終的には自分 の牧場をもつこと!!女性だってなんでも出来るぞ! ということを証明する。

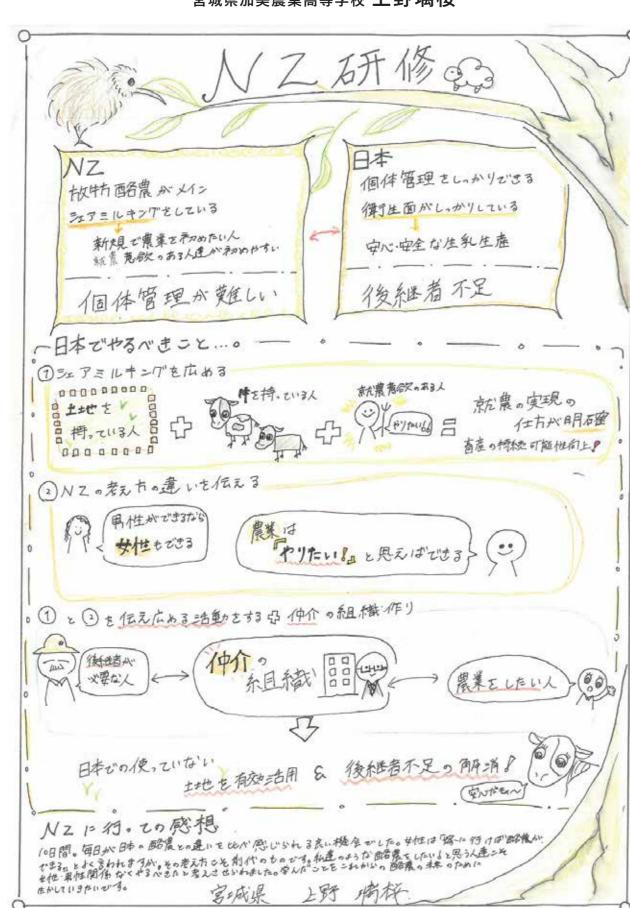
### 後輩へのXッセージ

日本だけではなく世界の酪農に目を向けてみてください!沢山の 事か見えてくるはずです。そして沢山の知識を身に付けてください。 無理だと思ってもあきらめずに自信を持って何事も挑戦してください! 「酪農はかっこいい!」、と心から、思えるように。

#### 宮城県農業高等学校 岩間ほのか



#### 宮城県加美農業高等学校 上野璃桜



#### 栃木県立宇都宮白楊高等学校 髙橋夢天



日本の畜産を放牧で変えたい ~畜産の「楽しさ」「やりがい」伝えます作戦~



#### 日本の畜産の現状









育成牛

パドックの狭さ

#### 「アニマルウェルフェア」を考えた飼養管理が必要!



日本にも「放牧」を実施している場所があります。特に、ホルスタイン種で す。しかし、肉牛の飼養管理においては、求める肉質が違うので難しい現状 がありますが、育成期や繁殖牛の管理では、ストレスフリーを元に「放牧」をす ることで、強健な四肢を成長させることが可能となるのではないでしょうか。



①強健な四肢 ②骨格の成長 ③ストレスフリーなど-



#### となれば、収益も向上













|収益が上がれば||家畜が臨む「環境」で飼養管理ができるだけでなく、「スマート農業」を活 用した畜産業が可能となる。また、「家畜」が臨む環境になることは、「管理者」である私たちにも 優しい環境といえるだろう。

#### どこで、「放牧」をすればいいのか!









耕作放棄地に家畜を放ち、家畜を守る柵を作ることで山林の管理にもつながる。 「放牧」のメリット

①畜舎や飼料費(粗飼料)の「費用削減」できる!

②家畜の管理時間が減少するため、管理者の「自由な時間」が増える! ③「家畜」本来の姿でいられるため「ストレスフリー」になる。

さらに、「シェアミルキング制度」を導入しよう!

「家畜と必要な機械や畜舎を所有する人」と、「土地を所有する人」が協力して畜産業を営む 例えば「耕作放棄地所有している人」と「新規就農で酪農を始めたい人」が協力する。

あとは、あなたの「積極性」それは、「やる気」

一緒に「未来の日本の畜産」のために「放牧」をキーワードに「畜産」をやりませんか?

#### 群馬県立勢多農林高等学校 鈴木美香

乳価を上げる

中衛環境の見直し

品種改良

乳量生ける西台農が信緒かるためには?

付加価値を付ける 乳製品の需要を高める



乳業の方面から信番かる酪農を欠りたい!

一N2最大手の乳業会社『フォンテラロを見てきました一

「フォンテラ」: NZの酪農家が共同出資して建てた乳製品加工会社。 国内拿乳シェア約8割のNZ最大手で世界最大の生乳取扱い量。 商品の8割至輸出。7割が業者向け、取引は世界140年国。 車前出が主のため日持ちするナース"やノ"ター月や脂料が乳にクロエされる。

目NZ。乳業。特份的目 ☆生多小取引は季心国刊》「「三ルクソリー、F")で、現在1kg=7\$ ☆オーヤ"ニックミルク等の付か価値は対してりときア価格である」 分粉乳で保存しているため安定供給ができる

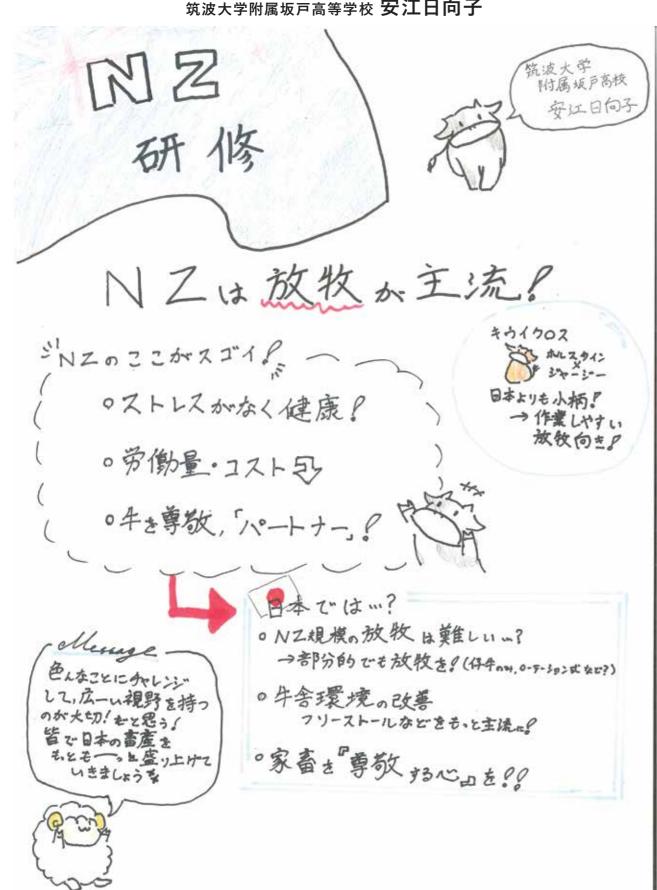
これから畜産を担う仲間へ

酪農は国も起えた世界共通の産業でした。好きなものにはキャレ シシ"することが大けで、好きなものに国境はありません。少しでも 変えたいという思いだ日本を変えます。一緒に頑張りましょう!

#### 埼玉県立川越総合高等学校 神尾里佳



#### 筑波大学附属坂戸高等学校 安江日向子



東京都立瑞穂農芸高等学校渡良サキナ

# 72で女性が活躍できる理 @NZ社会の考え方にあった!→男女が公平!



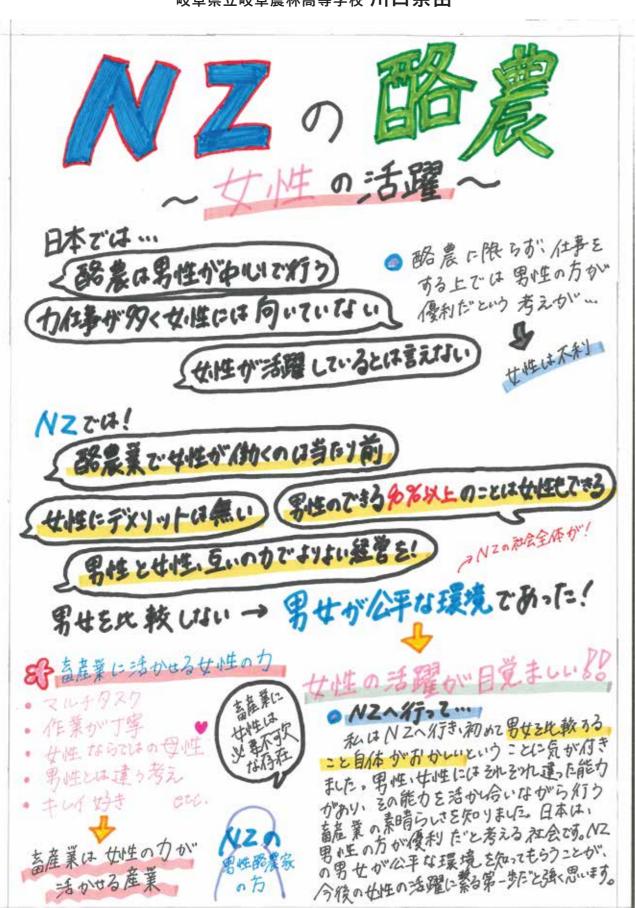
男性ができ事の 90%以上は妙性も 力の差なんて気にしな 男性に負けている事 ta 2"ta L"!

~ 男性の考え~

自分より、女性の方が、 侵れていて、女性が畜産業を やるのは普通で良い事だ と思っているよ。

Pにも、このような男女がお互いに 尊重できる環境を広めていくと、女 性が活躍できる一歩になるのでは ないかと考える。

#### 岐阜県立岐阜農林高等学校 川口奈由



#### 静岡県立富岳館高等学校 小林香弥乃



#### 三重県立明野高等学校 小屋敷萌香

女性が活躍できる畜産 ワークライフバランス

- ・女性は男性よりも体力や筋力が低く、力仕事に向いていない?
- ・家事や育児の負担が多いが、時間の自由がきかない仕事は大丈夫なの?



- 、男性、女性それぞれの役割がるの差
- 、女性は弱点や難点をどのようにカバーしているのか
- 、女性だからこそうを躍ざきるという方気みはあるのか

結果 図置では…

- ☆男性も女性も自分自身のうまりをきまかせる環境、文化がある
  - L。 男女平等、公平といり国民意識が根付いている
    - 「お豆いの強みを活かし、役割分担(効率)か
- ☆ 酪農をプライフスタイル・生活の一部山として捉えている
  - し、この生活を楽しんでいた
    - \* 子どもたちは幼の頃から自分たちにできる手伝いをしていた

#### 女性の強み

- ロマルチタスクができる!
- で 綺麗女子まな人が多い!
- の 国りを見るかに優れている! の母性があり、イ分娩や搾乳 付件の世話が上手にできる

日本の畜産業においてき、

最大限に発揮することが大切

畜産業活性化には女性の強サが必要不可欠(! まとめ

NZで、女性の活躍でおる産でデーマに調査を進め、頭に浮か人だのは「日本って窮屈…」でした。 日本は女性の球位が低く、「女性力活用が厚れている国といり(メージがあります。しかしここで女性が 弱気にひるのではなく、自分の意志を強く持ち、一女性だからこそし」といった視点が感性を活かしていく べきごする女性の強みを発揮することで、畜産業の活性化が望めると思います。

#### 京都府立農芸高等学校 田中陽満莉





島根県立出雲農林高等学校 福田侑美



日本の畜産に必要なものとは?

女性が大沽躍D 若者专活躍中? マニマルなんなアの意識かり

- 方、日本は…? 後繼者不足ぎみ…。 女性がりない 畜産、て大変そう などなど …

日本の畜産を 一時で近づけるには?

₩ るで導入されている技術方

ラュアミルキング
分新規酪農家(=1335") 母若者が細にせるい

EID Reader · ICfo70 会世生根《有根、都布如3 ☆ 牛の居場所特定

Techno Grazing System 会放車がといくらい生えているか となくらいあるった成長しています。

ネックストラップ° 分井。/固体激別



A231L7 会お腹が痛くならないまいり 合付的価値向上人

message

ニューミルランドへ 石市1個へ行き、日本の 高産は問題が山づみ たいと思いました。

初問題を解決引には 私たちのような畜産好が失頭 た立ろうき焼きるることが大七刀ですべ せひ、一緒にかんは"りましょう!!

プ日本でも取り入れる♡ サルナでそのまやすい畜産にと

苦者が増える畜産にと

広島県立油木高等学校 畑本瑞穂

# 放牧」min 流。

なと"

- ・牛のストレス軽減
- 削蹄不要
- 黨 尿 処 理 不 要
- ・コスト削減
- ・牛の健康維持
- ・農家の大幅な負担軽減

# 私の理想の畜産

- ・製畜のストレスかりない 飼育環境
- ○環境におさしい特織可能
  - → 日本ど実現するには -…
- 。館育環境を駐し、農家1人 1人が中にやさしい環境作りを! . 少ない頭数ご小規模放牧
- •使われなくなった土地(耕作 放棄地)を有効利用

# 日本ごも放牧を広めたい

土地かせまい .... 99くの牛を放牧どきない....



龙鼎立油木高等学校 烟本端穗

# 私かいこれからやりたいこと

酪農の魅力能行言です。 日本の富産業界では相い手不足力い 深刻な問題と"すか"、担い手以前に いと充分に知られといないことか

私かとれからもりたいことは、

なのと"私は游光、観行牧場を経 暫し、たくさんの人に牛に触れあっと もらうことで酪農お牛の糖力を 90くの人に発信していきたいどす そのために多くの實格取得も経路 ETみ、NZの女性のように職い長持ち きもっとこれからも頑張っていきたいとす

#### 愛媛県立野村高等学校 友松瑠生



#### 熊本県立菊池農業高等学校 加藤星菜

Agriculture where women shine

NZの女性産E見て、日本の女性も更に輝くことかできると確信! QNZの女性のあり方とは?



NZでは男性と女性お互いか良いとうを尊重 夫婦の場合、夫婦であり、どジネスパートナーでもある

仕事と子育ての両立

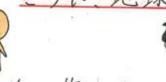
→女性農家だけの集りやコミュニケーションツールがあり、 相談や情報と見ることができる。

男性ができることは女性にもできる。 多くの女性酪農家さんたちが話されていました。

やる気があれば男女問わず、

みんなが酪農を楽しむことかできる時代!!

さらに、地球規模で考える農業 in NZ



放牧酪農、そして作 業効率をUpするこ とで労働時間を大 幅Down!自由な 時間が増えて、人 がいきいきとしてい

アニマルウェルケェアが浸環境汚染防止のため ることができる?

透しており、動物が快に放牧地に流れている 適に過ごせる。放牧 \*川の両側5mのところに 酪農では牛か食べ棚をしなければならない。 たい時に草を食べ 棚の中に植物を植る 場合は補助金を出 してもらんる。

#### 鹿児島県立鶴翔高等学校 内野佳奈



日本での牛の食司育方法はほとんどが日本は後糸性者不足に小凶まされてします。 つなぎ食司レノです。そして毎日濃厚 居る農家さんでは年間50頭しか乳房炎に

そして農業サイの教をとても少ないです。 育司料を与えまなNZでは広い土までに しかしNZでは本小生が失豆負に立ち木葉マケン 教百豆頁の午を牧牧しままでして「宰乳の分野でリーダー的な存在が目立っていました。 時だけ、悪厚食同料を与えます。一部の農家 ケル生の小柄な体型をしてして人工授精かさんでは、農厚食同料に乾燥がよかを与える お産などでも活足量してしてるそうです。 きってす。そしてNZの牛は、農厚飼料の与える NZの本小生は男小生にごきる仕事の90% 曼が少ないので乳房炎になりにくく牛が1000頭が牛小生にもできると言かれています。

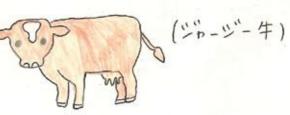
ならないそうです。



3117

NZのミルクは色なな種類の乳牛 ミルクを混せて出荷しているのでとzt 甘くてスッキリレていてとてもずいしかた です。そしてNZのスーパーで売られているミルクは ほとんどリレボトルで売られています。 牛のミルクには二つの未重娄夏がよります。 AlsnorA2snozt, Alsnort 一般的な牛乳でオリスタインにタタと含まみます。 AZシルクはより复ち焼しにく人肌荒水や糖尿病 の予防にもなりますこのミルクを出す牛は ジャージー牛がタタレノです。







## むすび

平成31年度未来の畜産女子育成プロジェクトを無事に終了でき、今は安堵しているところです。本プ ロジェクトは昨年度初めて実施され、ニュージーランドでの海外研修と啓蒙活動を合わせた取り組 みのユニークさが注目され、多くの方々のご協力により成功裏に終えることができました。昨年度の 経験に基づき、より一層のプロジェクト充実を目指し取り組んでまいりました。

参加者の募集を開始した4月26日の翌日からは、平成から令和への改元に伴う10連休となり、果たし て十分な応募があるか、不安を残したまま大型連休に入りました。5月24日の募集締切日にはその不 安とは裏腹に、多くの学校からお申し込みをいただき、胸を撫で下ろしました。

応募してくださった皆さんの熱意ある応募動機や、作文「私が輝けるとき」を読み、さらに、電話で一 人ひとりの意気込みを聞くと、できることならすべての方に参加してもらいたいと思いました。いよい よ参加者が決まり、6月17日から東京で事前研修を実施しました。

元気いっぱいの畜産アンバサダーたちに初めて会った時、一緒にプロジェクトを実施できる喜びがこ み上げました。訪問したニュージーランド大使館では、Carolyn Guy第一次産業参事官から「Welcome your mistake ― 間違えを歓迎してください。その間違えたことにこそ皆さんの成長があります | と いう応援メッセージをいただきました。

ちょうどこの時期、NHK連続テレビ小説『なつぞら』が放映されていました。女優の広瀬すずさんが 北海道十勝の農業高校生を演じ、日本学校農業クラブ連盟の「FFJの歌」が何度か披露され話題と なりました。全国から集めた歌唱動画をつなぎ合わせミュージックビデオを作るNHK札幌放送局の 企画「みんなでつくるFFJの歌」に事前研修で撮影した動画を応募し、見事その動画が採用されました! 8月の現地研修は、連日ハードスケジュールでしたが、高校生たちの何でも学び取ろうとする姿に、そ して笑顔に元気をもらっていました。農業視察先では事細かにメモを取り記録をつけ、果敢に英語で インタビューし、ファームステイ先では自分たちだけで会話をしようと挑戦しました。誰一人欠けるこ となく、大きな怪我や病気もなく、ニュージーランドから帰国することができました。

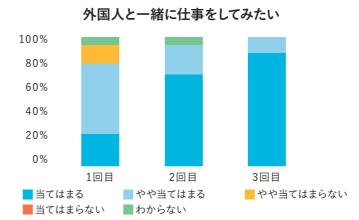
帰国翌日に実施した研修成果報告会では、4チームで発表に臨みました。帰国翌日の疲れた様子など 一切見せず、元気いっぱい堂々と発表でき立派でした。

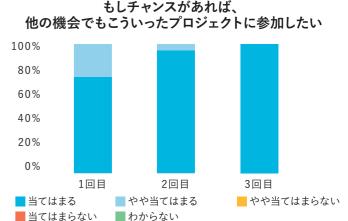
そして、各地での畜産アンバサダー活動では、昨年度の8.631名を大きく超える、13.298名に畜産の 魅力を伝えることができました。

実は、参加者への意識調査の中で、「外国人と一緒に仕事をしてみたい? | という質問をしていまし た。プロジェクトを通じた3回の回答結果を見比べると、「当てはまる」と答えた人が増えています。こ れは、現地研修で、英語を使ってしっかりとコミュニケーションが取れたという自信の表れでしょう。 グローバル化が進んだこれからの時代を歩む彼女たちなら、躊躇することなく世界中の人たちと手を 携えて新しい世界を作っていけるはずです。

さらに、「もしチャンスがあれば、他の機会でもこういったプロジェクトに参加したい?」という質問で は、20名全員が「当てはまる」と畜産アンバサダー活動後に回答しました。 プロジェクト担当冥利に尽きます。

105





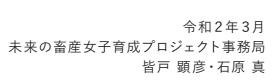
昨秋、9月20日の開幕戦に始まったラグビーワールドカップが日本で開催されました。日本チームの 躍進もあり、大変盛り上がりを見せた大会でした。2019ユーキャン新語・流行語大賞に

「ONE TEAM」が選ばれました。未来を担う若人たちが日本の畜産業を明るく照らしていけるよう、 私たちもONE TEAMで努力を続けてまいりたいと思います。

最後になりますが、本プロジェクト実施にあたり、日本中央競馬会、公益財団法人 全国競馬・畜産振興会、 農林水産省経営局就農・女性課、農林水産省生産局畜産部畜産振興課、ニュージーランド大使館、 エデュケーションニュージーランド、全国農業高等学校長協会、全国高等学校農場協会、

本事業推進委員の納口るり子先生、髙橋ゆかり先生、鈴木憲治先生、メンターの藤田春恵さん、 光成有香さん、現地研修引率教員の岸田隆志先生、千田なつ紀先生、ご応募頂いた全国の高等学校、 その他多くの皆様に多大なご支援とご協力を頂けましたこと深く感謝の意を表したいと思います。

日本学校農業クラブ連盟、現地研修受入学校TARANAKI DIOCESAN School for Girls、 本当にありがとうございました。







# 日本中央競馬会平成31年度畜産振興事業未来の畜産女子育成プロジェクト事業報告書

発行 令和2年3月

発行者 公益社団法人 国際農業者交流協会 住所 東京都大田区西蒲田5丁目27番14号

日研アラインビル8階

電話 03-5703-0252 Email mirai@jaec.org

URL https://www.jaec.org

校正・デザイン Arina Kubota

印刷 株式会社エーヴィスシステムズ



